

平 泉 文 化 研 究 年 報

第 20 号

令和 2 年 3 月

「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会

序

岩手県では、世界遺産に登録された遺産を含む平泉の文化遺産を周辺の歴史遺産も含めて総合的に調査研究し、その成果を広く公開し活用していくため、研究機関の整備を検討しています。その一環として、平泉遺跡群の中核遺跡である国指定史跡「柳之御所遺跡」の発掘調査を進めるとともに、「平泉文化研究機関整備推進事業」により、平泉文化研究に必要な人材の発掘と育成、研究者相互の連携や多角的・学際的な研究の推進を図るための共同研究など、研究基盤の整備と拡充に取り組んでいます。また、「平泉の文化遺産」について、「平泉文化フォーラム」などの機会を通して、県民の学習と理解の場を提供するよう努めているところです。

岩手県教育委員会は平泉文化研究体制整備の観点から、柳之御所遺跡を含めた平泉遺跡群の調査、および研究の拠点として「平泉遺跡群調査事務所」を設置するとともに、「平泉文化フォーラム」を共同で開催する岩手大学平泉文化研究センターと平泉文化の総合的研究体制について協議を進めながら、共同研究を行ってきました。また、「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会が文化庁から令和元年度文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）を受けて実施した事業の成果を含めて、さらに広く成果の発信を行っているところです。

平泉文化研究年報は20号の発刊を迎え、今年度はフォーラムで発表された講演・報告内容をまとめたものとなっています。次年度からは、新たな形での「平泉文化研究」を推進し、今後も本年報が平泉文化研究の進展の一助となるよう努めて参りたいと考えております。

最後に、これまで共同研究に参画されてこられた諸先生方をはじめとする関係機関各位のご協力に厚く感謝申し上げます。

令和2年3月

岩手県教育委員会

教育長 佐藤 博

目 次

【基調講演】

日本の遺跡保存と活用、この30年　－世界遺産“平泉”誕生の意義に寄せて－	
	田辺　征夫…… 1

【報告】

柳之御所遺跡等の発掘調査成果	北村　忠昭……15
世界遺産　－平泉と宇治－	杉本　　宏……25
書き換えられた東北の古代・中世　－平泉（柳之御所）30年の成果－	吉田　　歆……33
アジア史の新たな展開　－平泉の歴史的意義－	渡辺　健哉……39

パネルディスカッション

司会　菅野　文夫（岩手大学） 佐藤　嘉広（岩手県文化スポーツ部）	
パネリスト　報告者等　5名……………	41
平泉文化フォーラム第20回記念大会付属資料……………	59
平泉文化フォーラム第20回記念大会実施報告……………	87

例 言

1. 本書は、「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会が実施した事業である。
2. 本書には、岩手大学平泉文化研究センターと共同で開催した平泉文化フォーラム第20回記念大会での基調講演、研究報告及びパネルディスカッションでの発表内容を掲載したものである。なお渡辺健哉氏の研究報告は別な原稿として公表される予定であるため、著者の承諾のもと本誌への掲載は発表内容の要旨のみとさせていただいた。
3. 本書に収録した平泉文化フォーラム第20回記念大会の講演・発表者は以下のとおりである
田辺　征夫（公財　大阪府文化財センター理事長、平泉遺跡群調査整備指導委員会委員長）
北村　忠昭（公財　岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　文化財専門員）
杉本　　宏（京都造形芸術大学　教授）
吉田　　歆（山形県立米沢女子短期大学　教授）
渡辺　健哉（大阪市立大学　准教授）
4. 掲載内容としては上記のほかに、平泉文化フォーラム第20回記念大会の際に配布した付属資料も併せて掲載している。
5. 本書の編集は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課が行った。

平 泉 研 究

－平成から令和へ、課題と展望－

平泉文化研究年報

第20号

令和2年3月

「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会

基調講演

日本の遺跡保存と活用、この30年 —世界遺産“平泉”誕生の意義に寄せて—

田 辺 征 夫

はじめに

平泉文化フォーラム20回の大変重要な記念大会でお話をさせていただくことになって、ありがとうございます。今日このようなテーマにしていますのは、平泉の研究そのものの中身に入った話というよりも、世界遺産平泉がどういう流れの中で誕生したか、日本の遺跡をめぐる環境というのが、この30年でどう変わってきたのかを見ようということです。この30年というのはまさに平成の時代なんです。



私は先ほどご紹介いただいたように昭和40年代の前半、学園紛争の最中で、せっかく大学に行ったけど、ほとんど授業が行われない時代に大学と少しだけ大学院に行きました。私に近いご年配の方はそういうご記憶があるかと思います。慶応の学部にいるときに「学費値上げ反対闘争」があり、これがあの時代の学園紛争の始まりでした。このころはまだ穏やかな学園運動でしたが、それが年々過激になっていき、最後は東大の安田講堂となっていったことを思い出します。大学院は京都に行きましたが、やはり授業が行われない中、たまたま初めて奈良国立文化財研究所の採用試験がありまして、曲がりなりにも採用されて奈良での仕事が始まりました。それから半世紀が経ちます。

昭和50年代、奈良市の文化財組織を作るために、一時期、国から奈良市の方に行って、市町村の行政も経験したことがあります。そういうことも含めて、ずっと奈良の平城宮跡、あるいは藤原宮跡の宮殿とか寺院の調査をしてきております。そういう50年の流れの中で見ても、この30年っていうのは、やはり随分変わってきたな、という考えを持っております。そんなことも交えながら、少し今後のことも含めて、午後から諸先生方が少し専門的に突っ込んだ話もいただけますし、それからパネルディスカッションの中で、もう少し突っ込んだ議論がされると思いますので、私はそのきっかけにもなるようなお話をさせていただきたいと思います。

1. 保存から活用へ

1) 高度経済成長期

日本の遺跡の個々の法整備ができたのは大正年間ですから、およそ100年になります。その間色々と考え方も変わってきているのですが、特に我々の世代にとって大きいのは、やっぱり高度経済成長期の時期が非常に激しかった記憶がございます。ものすごい勢いで開発が行われ、これは日本独特の世界にないシステムなのですが、開発に伴ってその事前調査を行うシステムが確立されました。この

話をしていると長くなりますから省略しますが、その結果、ものすごい数の発掘が行われます。文化庁の統計によりますと、一番最盛期は、年間1万件を超えるぐらいの発掘が行われたということです。それに対応するために都道府県教育長会議の要望に基づいて、全国に埋蔵文化財センターが作られることになります。そして、全国で最盛期には七千人を超える人が、自治体とか、あるいは財団の埋文センターとかに所属して発掘するというようなことになったのですが、バブルが崩壊して、最近はその辺が少し変わってきています。そういう流れの中で、当初は発掘をした結果、重要なものが出てくると、何とか保存ができないかということで、保存運動も盛んに行われた時代です。

2) 遺跡（遺物）の保存整備から活用へ

そういう流れが、平成に入ってくるころから大きく変わってくるようになります。ちょうど1990年代、まさに平成に入る頃から、それまでバブルで行われた開発が少し下火になったということもあったと思います。私はその頃文化庁の美術工芸課というところにおいて、重要文化財、国宝を誕生させる方にいたんです。全国回っているとき、開発側から「あなたたちが大事だということから金出して発掘を行い、ものも取り上げたのに、あれ全部倉庫に放り込んであって何もしてないじゃないか」ということを言われる、という話が出始め、資料館とか、博物館などできちんと見せて、活用するということをしないといけないのではないかという機運が、出始めました。活用ということもこのころから言われ始めたように思います。遺跡の方で言いますと、とにかく開発に対処して、発掘して、重要なものを保存に持ち込むだけが精一杯でしたから、とりあえず凍結保存するんだというのが、遺跡の方の考えだったんです。



活用という観点で言いますと、実は建造物の方の考え方は早くからしっかりしておりました。皆さん、お分かりだと思いますが、建物は使わないと傷みます。重要な文化財なんかでも人が住まなくなると傷みますから。だからそれを例えば、建物の形をうまく残して、喫茶店にするとか、そういうような発想が比較的早くから、建造物の方から出てきていたと思うのですが、遺跡の方はどうしてもとりあえず保存して、とにかく地面の下に残しておくんだ、という考え方がずっと主流だったんです。それが変わり始めたということです。

遺跡の場合は年間1万件掘っていても、保存され、史跡指定されている遺跡は総数でも2000件いらないくらいです。それでも、保存された遺跡をどうするのかというのは、大きな問題で、保存するまでは勢いである。そのあと、維持していくのが実は大変なんです。そういう問題が、自治体の方にも多分負担がかかってきているというのもあったのでしょう。ですから、何か遺跡を活用できないか、というような動きの出てきたのもちょうど同じ頃です。長いこと批准しなかった世界遺産条約を日本が20年遅れで批准することで、世界遺産が動き出す。これも非常に大きなきっかけになりました。また同じころ、大きな開発工事がなくなった。こういう言い方は変なんですけど、建設省サイドも、文化財を使った「まちづくり」ということに注目しはじめます。平成の30年間は遺跡を中心に考えたときに、遺跡の保存、保護という考え方から、さらに活用という考え方に非常に大きく方向が変わって、その流れの中で、今年の文化財保護法改定に繋がるのだと思います。改定された文化財保護法の中の非常に重要な骨子が、活用の流れ、これはもうまさに今政府がやっている観光と非常に密接に結びつ

いた内容なんです、これはこれでどう考えるかという大きな問題が出てきているということです。この辺の話も今から少しさせていただこうと思います。いずれにしても文化庁の考えも大きく変わってきたと思います。

3) 遺跡活用の意義

保存を中心に考えてきた人間からすると、活用、活用と言われるとなんか遺跡が壊れそうな感じがして嫌な感じがするのですが、実はそうではないんです。その活用をきちんと考えておかないといけないと思うのですが、これは世界遺産の議論の中でも、特に初期のころによく出てきましたが、欧米の遺跡というのは、ギリシャやローマに行かれた方はご存知だと思いますが、石造りが多いですから、モニュメントとして地上に見える形であり、どこに遺跡があるか分かるんです。残骸になったモニュメントがそれなりの風情を持っていて、郷愁をそそったりするものですから、価値が見えるわけです。日本の遺跡は木造建築ですから、古墳とか、一部、城郭跡とか可視的に見えるものもありますが、たいていの遺跡が田んぼの下だとか、畑の下だとか、地下にありますから見えないんです。発掘して、非常に価値の高い遺跡が見つかって、そのままでは分からない。非常に大きな弱点を持っているわけです。若い頃、ある県の非常に重要な遺跡で現在も重要な遺跡として保存されていますが、見に行ったら、ちょうど6月ぐらいの田植えが終わって、そこら中の水田が青々としたものすごく美しい景色になっていました。すごいところだ、さすが昔の古代の拠点があったところだと思って、遺跡を探してみますと、中に1ヶ所、草ぼうぼうの汚いところがあるんです。「あれ？」と思っていたら、実はそこが国の史跡になって保存されているところだったんです。現在そこは、国の史跡として整備されてきれいになっています。そんなところが実は1ヶ所だけじゃなくて、いっぱいありました。ですから、やっぱり何とかしないといけないという流れの中で、整備という言葉が盛んに言われる。整備されることにより、可視化されますが、ここに建物がありましたという表示をしたぐらいではその遺跡の価値がなかなか見えない、ということなんです。

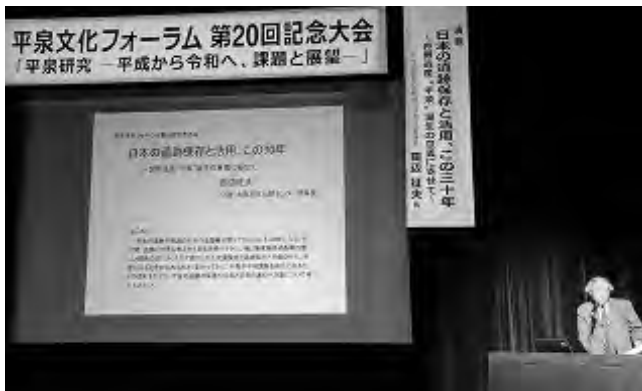
もう一つ大きな問題は、先ほどの草ぼうぼうのように、せっかく大事な遺跡が保存されたのに、何もしないと逆に、浮いてしまうんです。それまでは、むしろ水田であり、畑であったり、あるいは古墳だった小高い山として、結構生活の中に馴染んでいた遺跡が、史跡に指定されて、公有化されて、それに対して適切な手が打たれないと、逆に日常から切り離されてしまう。これはやはり良くないだろう。もう一度、本当に大事な財産ならば日常生活の中でそれを感じるようにしないといけないんじゃないか、ということで、その整備が行われる。もう一步踏み込んで言えば、それはその遺跡をもう1回日常に取り戻し、活用すること。そういう思想がやっぱりだんだんと強くなってきたのだろうと思います。それが、平成という時代だったんじゃないか、というふうに考えます。

4) 点の保存活用から面の保存活用への流れ

そんなことを含めて、最近ではよく、保存と活用は車の両輪である、という言われ方もしますが、ただ間違っていないのは、保存なくして車の両輪は成り立たないんですね。そういう場面を幾つも最近経験していますので、活用は結構なんです、一つ間違えると遺跡が壊れていく、遺跡の価値が減っていくということにもなりかねません。ですからその活用がどういうものなのかということを本当はしっかりと議論していかないといけない時期になってるんだらうと思います。もう一つは、この活用の中身で少し変わってきたことというのは先ほど最初にお話した、例えば、かつての建設省（今の国交省）の開発側と、遺跡を守る側の文化庁サイドというのが、1970年代から80年代では非常に過激

に対立して、「破壊者と保存」という図式で単純に動いていた時期がありました。

それを国交省が中心になって、「歴史まちづくり法」というのを2008年に作ります。いわばまちづくりの中に、地域に保存されてきた遺跡も含めた文化財を取り込み、そういうものを生かしたまちづくりをしましょうということで、各省庁が取組を始めたんです。それまでは文化財の保存活用といっても、全部「点」だったんですね。文化庁が史跡や特別史跡に指定する、あるいは重要文化財に指定する。その指定したものの保存であり、活用だったんです。この歴史まちづくり法というのは、その文化財を含んだその地域全体の活性化に補助しましょう、というような簡単に言えばそのような仕組みなんです。これは自治体としてはすごく嬉しいシステムです。点じゃないですから。現在76都市が参加してますので、それはすごいですね。中身は少しずつ変わってきていますが、基本的にはこういう「点の保存から面の保存活用」という大きな流れになってきた。それを追いかけるようにして、文化庁も日本遺産というのを2010年に設定します。これは単純に遺跡だとかいう資産だけじゃなくて、それを繋ぐストーリーとかいう言い方をしています。そういうものを通じて全体の文化財とか、そういうものに光を当てましょうという考え方なんです。これなんかも従来の遺跡の保存といった考え方の枠をかなり超えてきています。今度の文化財保護法改正に合わせて、文化審議会が提言をしています。その中で私がちょっと注目しているのは、今まで保存や活用の対象は、指定された史跡や文化財、



県指定でも市指定でもいいんですが、指定して保存をするという考え方が前提でしたが、文化審議会の提言には未指定の文化財も考えましょうという考え方が入ってきています。実際そういうことをやり始めている県もあります。そういう意味では、文化財というもの、あるいは遺跡というものを今まで以上に広く考えましょうという流れが活用という考え方に絡めて出てきているということは間違いないと思います。

5) さまざまな遺跡の活用

活用の仕方の基本的な考えというのは、とりあえずきれいに整備をして、そこに例えば小学生たちを連れて、ここにはこんな大事な遺跡があります、ということを理解してもらう。多分、平泉なんかでもやられてるんだと思いますが、こういうのが基本で教育的な歴史教育の観点から遺跡を活用するという考え方です。当然、遺跡の場合は、一定面積がありますから、公園として使いやすい。特に都市部の遺跡が保存された場合は、都市公園としても使われる、そういう場合があります。最近よく見られるのが広場を利用したイベントで、様々なものがあります。さらに先ほどお話しましたが、今度の保護法の柱になりますが、観光活用を積極的にしようという空気が非常に強くなってきます。事例はたくさんありますが、ここでは少しだけ紹介します。私が全部実見しているわけではありませんが、ネットでも拾えますので、興味ある方は一度拾っていただければと思います。

最初に言った一番ベーシックなものとしては青森県の三内丸山の例があります。夜間照明をして魅力を伝えようとしているほかに、遺跡で縄文土器を作っている体験学習的なものがあります。資料には載せていませんが、確か子供たちに縄文土器の拓本を採るような勉強もありました。非常にベーシックな活用じゃないかと思います。

次に、これは私も直接、関与していて、この平泉にも関わっておられる委員の先生方と何人か一緒

に行っていました。栃木県下野市の国分寺跡が、長年かけて整備が完成し、復元された金堂基壇を利用して完成記念の催し物をやりたいということです。当然、委員はみな覚悟して、シンポジウムか何かでみんなで分担して話をしないといけないんだろうなと思っていましたが、この市長さんは、「そんなのやったって人來ない」とか何とか、仰ってました。栃木県というのは薪能がすごく盛んです。立派な金堂の基壇、一辺が40～50mあって、すごい立派な基壇なんです。ここを能舞台にして、薪能をこの史跡整備のオープニングセレモニーにしたい、と市長さんが決められました。オープニングに呼ばれていきましたら、夕方から始まって5月にしては寒かったのですが、なかなか良かったですね。立派な国分寺の金堂基壇を薪能の舞台に使うという発想はなかったです。

次に、これも若い頃に関わったんですけれども、丹波、兵庫県養父郡という山の中にある三塚廃寺という寺跡です。ネットで見たら、あやめの公園ができていました。遺跡の横に運動公園を作ったらしいんですが、公園との間をつなぐところに地元の主婦の皆さんであやめを育てて、名所にしていこうというようなやり方をしているところもあります。



それから有名な吉野ヶ里遺跡です。花火大会はどこにもあるかとは思いますが、バルーンの大会、国際大会なのか国内なのかは分かりませんが、ものすごく定着しており、有名らしいです。「吉野ヶ里遺跡に立てば邪馬台国が見える」という一言で大変有名になった人がいますが、その遺跡でこういう事を行っているんです。

そして大分県の復元した弥生時代の倉庫の藁葺の建物ですが、えらい綺麗な人がいるなと思っ

てたら、これ写真のモデルさんなんですね。ここで、写真の撮影大会を行っているんです。撮影大会をする背景として復元した建物がいいんでしょうか。

そして最後の極めつけがこれです。大阪城のモトクロスです。私はこれいいか悪いか分かりませんが、こういうのを見ながら皆さんが、平泉がどうしていくかということの参考のためにあげてみました。4年前ぐらいから始まって、1年でやめるのかなと思ってたんですが、3年ぐらいして大阪の教育委員会の人に聞いたら「やってるよ」と言っていました。大阪城公園に土盛りをしてオートバイで曲芸的なことをやって、写真を撮って、今でいうインスタ映えがするというこのようです。これネットでご覧になられたら、いっぱい写真出てきます。これも活用ということでしょうか。このようにいろいろな活用が出てきています。この辺をどう考えていくかということになります。

2. 世界遺産と地域

1) 世界遺産とは

平泉の世界遺産誕生のことなどは皆さんご存知ですから、ちょっと確認のために、流れを見ておこうと思います。1960年のアスワンダム建設によって、ヌビア遺跡が水没するところから運動が始まって、結局アルシンベル神殿が移築保存されたということで大変有名です。それがきっかけになって1970年に世界遺産条約が成立したんです。2019年時点で1121件だそうです。文化遺産が869、自然が213、複合が30、危機遺産に登録されているのが53、登録抹消されたのが2つあるんです。世界遺産誕生のきっかけになったこのアスワンダム建設による結果は、アルシンベル神殿の移築だっ

たわけです。移築保存ですね。

皆さんご記憶あるかどうか、私も非常に深く関わったので、他人事じゃなかったんですけど、奈良で有名な高松塚、キトラ古墳の保存問題が、10数年前におこりましたね。最終的にはキトラ古墳は壁画を外して、外に出しました。高松塚古墳に至っては石室そのものを解体して、今も保存施設で修理がされています。これはもう当然、批判する人は無茶苦茶批判しますし、やむを得ないじゃないか、という人もいました。しかし世界遺産の出発点のアルシンベル神殿は解体保存ですから、これを考えたら、キトラなんてそんなに騒ぐ話なのかなと思ってしまうんです。なかなか文化財の保存というのは難しいです。

2) 日本の世界遺産

20年間、世界遺産条約を日本は批准しませんでした。ようやく1992年に批准しました。最初は法隆寺、そして姫路城から、屋久島でした。現在はもう全部で23件です。最初の世界遺産の頃は、奈良の寺のいくつかは、いやだというところが結構多かったようです。なぜかという、それまでも史跡だとか重要文化財に指定されるのは結構だけれども、ものすごく厳しい条件が付くじゃないか、その上に世界遺産になるとなれば一体何重の縛りをかけるんだ、というような意識で世界遺産を見ていた人たちが随分いました。ですから結構反発があったと私は聞いています。それが数年でコロッと変わるんです。我も我も、うちも世界遺産という流れに変わるんです。それはなぜかという、世界遺産になったところ、資産の観光客がどっと増えたんですね。途端に対応が変わる、面白いですね。そういう流れの中で、当初は文化庁が、自分のところを世界遺産にして欲しいというところは手を挙げなさいと言ったら、ものすごい数が出てきた。一方、しばらくするとユネスコの方が、一つの国について1年に一つだ、という縛りをかけてきて、その流れがまた少しトーンダウンするとか、ややこしい流れがあるんですが、盛り上がっているときにまさに平泉。16番目に世界遺産として平泉が誕生することになります。

3) 平泉遺跡群の調査保存から世界遺産登録へ

平泉が世界遺産になった流れは、いろんな形で話されてますから、繰り返すことはないと思うんですが、遺跡ということに関わって、少し年表的に整理しておきました。

この平泉の発掘って私もよく知らなかったんですが、昭和5年に1回毛越寺で発掘されているんですね、基本的には1950年代、例の藤原氏四代の御遺体調査があって、文化財保護委員会による無量光院の調査から始まり、これは多分どこでも語られているのだろーと思います。藤島亥治郎先生が平泉遺跡調査委員会ということで、この調査の中心になって活躍される辺りからずっと断続的な調査が行われ、1970年代にはそれまでの発掘成果に基づいて、観自在王院、あるいは毛越寺の整備も行われていったようです。我々にとっては柳之御所の大規模な調査、本格的な調査が始まったのが非常に大きいです。これも成果が出てくるにつれて、これが平泉館だろうということがだんだんと固まってきて史跡指定になる。そういった発掘調査の成果を受けて、この平泉の世界遺産登録への具体的な動きが始まる。このフォーラムが始まったのは20年前ということですから、たぶん世界遺産登録に向けて、このフォーラムで、いろんな研究発表が行われて、非常に大きな役割を果たしたんだろうと思います。

4) 世界遺産「平泉」誕生の意義

最終的には2011年、平成23年に登録されるのですが、名称が「平泉 仏国土（浄土）を表す建築・

庭園及び考古学的遺跡群」という名前で、登録されたということです。この世界遺産登録に至るまでの流れをざっと見てみますと、やはり地元の人を中心に調査も含めてしっかりとした努力が続けられてきたというのが非常に大きいです。それから、平泉以外の遺跡ではあんまりないんですが、最初から日本全体の視野の中で平泉というのはとらえられているんです。文化財保護委員会もそうですが、なんといっても藤島亥治郎先生が存在は大きかったのではないのでしょうか。先生はあちこちで活躍されてる方ですが、もともと朝鮮総督府におられた方です。私は、奈良国立文化財研究所にいる時に、韓国の慶州文化財研究所と共同研究を始める話し合いをしたんですが、その時に新羅王京の発掘現場のプレハブに行くと、戦前、藤島亥治郎先生が研究された『新羅王京の研究』という立派な本の付図を拡大コピーして壁一面に貼っていたんです。最近の新羅王京の発掘成果によると、戦後の若い人たちが研究して発表したのは全部当たらずで、藤島亥治郎先生が想定した図面に当てはめていくと、よく当たるといいます。だから我々は藤島亥治郎先生の戦前に書かれた本が一番いいと思ってます、ということで壁にずっと貼ってあるんです。びっくりしましたけれども、すごい先生だなと思いました。そういう先生が中心になって調査されたということで、それが平泉の大きな特徴でもある。これが平泉の状況です。

私なりにこの世界遺産「平泉」誕生の意義を考えてみますと、先ほど御挨拶の中でもありましたけれども、奥州藤原氏という非常に日本の中でも限られた地域、限られた時代の資産でありながら、その普遍的価値は、世界的な視点における普遍的価値ですから、大変なことだと思うんですが、それが認められたことがものすごく大きいだろうと思うんです。また、浄土思想というテーマで括られてますが、先ほど一関市の教育長さんが、もう少し広い視野で拡張登録というのを考えている、と仰いましたが、とりあえず浄土思想のテーマで世界遺産になっているわけです。これは京都も奈良も「古都京都」、「古都奈良」の文化財でいろいろな寺院が世界遺産になっていますが、平泉とは大きく異なります。一つのまとまりの中に浄土思想という仏教の世界観が体感できる空間が平泉だと思うんです。これは非常に稀有な場所と思いますが、ここに平泉固有の臨場感みたいなものがあるのだらうと思います。

もう一つ自分が考古学だから言いたいんですけど、ヨーロッパの資産が考古学遺跡でも地上にいっぱい石組みが残っていたりして、可視的である、という話を先ほどしました。日本の場合、埋蔵文化財は地中に埋もれているわけです。ですから建築だとか、あるいは庭園といったものは視覚的に見える遺産ですから、把握しやすいのですが、普段見えない発掘成果が考古学的遺跡群として明確に位置付けられた。これは日本の登録された世界遺産リストを見ていただいたら分かりますが、平泉だけなんです。確かに平城宮跡は世界遺産です、でも「古都奈良」の文化財なので表題としては出て来ないんです。しかも平泉の考古学的遺跡群は複数です。今後、例えば今青森を中心とした縄文の資産群を登録に向けて頑張っておられますが、あれなどは考古学的遺跡群そのものですから、この平泉で考古学的遺跡群という名称を掲げた世界遺産登録がされたということが、今後の考古学遺跡の登録に向けて非常に大きなインパクトを持ってるんだらうなというふうに思っております。繰り返しになりますが、こういった誕生の意義、背景にあるのは、長年の地元での調査研究と同時に、いつも広い視野の中で平泉とらえようとしてきた、こういったことがやっぱり大きな背景としてあります。今日も東アジアから見たというテーマで発表いただくようですが、そういう視点が常にあるということが平泉を鑑みて大変重要だったのではないかと思います。

3. 平城宮跡の調査研究と保存の歴史が語るもの

今後の平泉をどういうふうを考えていく必要があるだろうかというところに移りたいのですが、その前に平城宮です。非常に長い保存と整備活用の歴史がありますので、平城宮がどういう流れの中で、現在に立ち至ったかということ参考までに見ておきたいと思います。

平城宮を取り上げるときにどうしても言っておきたいことは、その地域には、必ずその土地の遺産を大切にした先人がいるはずなんです。平城宮跡でも間違いなく、その人たちの記録がはっきり残っていて、それが我々、現代に平城宮を研究する時の、あるいは一番根っここのところになっています。平城宮の場合、幕末まで遡ります。藤堂藩というのは、三重県の藩です。藤堂高虎の藩ですから、三重県なんですが、なぜか支配地の一部が京都とか奈良に飛地としてあります。それらの飛地を支配するために奉行所が置かれていたのです。山城の「城」と、大和の「和」をとって「城和奉行所」というふうに呼ばれていました。そこの役人をしていた北浦定政（きたうらさだまさ）という人が国学者で、大変な文人でいろんな人と繋がりもっていて、古墳や、当然天皇陵の研究などもしていたのですが、奈良の田んぼの形に古代平城京の形が残っているんじゃないかということに気が付くんです。字名などの地名にも平城京に関わる名称が残っていて、そういうことと合わせて復元していったのです。この人の偉いのは伊能忠敬のような測量者が出てきている時代ですから、彼もそういう技術を持っていたのでしょ、測量するんです。田んぼの形を全部測量して、そして図面を作って、古代の平城京の街の形を復元するんです、そういうことをやった人です。

それを明治になって、東大の建築の先生が受け継いだんです。実は平城宮の初期の研究を主導したのは全部建築屋さんで、考古学者じゃないんです。遺跡の中心が建物ですから。建物の分かる人があの時代は考古学者にいなかったんでしょう。北浦の研究を発展させたのは学者で建築技師でもある関野貞（せきのただし）先生です。奈良に赴任して、奈良の古いお寺の修理とかに関わるんですが、休みの日を利用して、北浦定政がやった研究をたどるんです。北浦がやっていない、例えば平城宮の中心である大極殿がどこにあったんだろうかということについても一生懸命探したんだろうと思います。そうしたら「大黒の芝」という字名が残っていて、土壇があるのに気づいて、大極殿に違いない、と考えた。ちなみにこれはのちに第二次大極殿になります。また、関野先生は文章に書くだけではなくて、市民の皆さんに話をしたり、あるいは新聞に書いたりして、一般の人に分かりやすく伝えたんです。

それを読んだ植木職人である棚田嘉十郎（たなかじゅうろう）という人が大変感激して、現地を訪ねると、大極殿の跡に牛の糞や馬の糞ばかりがいっぱい寄せてありまして、それに憤慨しまして、これではいかんということで、保存運動を始めるとというのが平城宮の保存運動の始まりなんです。ですから、明治末年ぐらいからもう100年以上、北浦定政から言うと調査研究は150年。保存運動が始まって100年。これが平城宮の今日に繋がる歴史なんです。その間に、戦後も色々あり、米軍の基地がつくられて、そこへつなげる軍用道路を拡幅するということで、平城宮の中の道路を広げるために発掘すると、柱の跡がいっぱい出てくるというようなことがありました。

それから現在も奈良に行くと平城宮の中を近鉄電車が走ってます。そこが操車場を作ると言っていた時に、全国的な保存運動が起こります。この保存運動の中心になったのも確か東大の建築学科だったと伺っています。この話を講演会でしたら、講演を聞かれていた方が寄ってきて、「あのとき私は東大の学生で座り込みに来ました」と仰ったその人はユネスコで仕事をしておられました。ただ近鉄さんは強引に平城宮を潰そうとされたのではないんです。操車場を作りたいがいかがですか、という

お伺いを国に立てたんです。当時は文化庁がまだなく、前身の文化財保護委員会でしたが、「いいよ」と言ったんですね。「いいよ」と言ったものですから「それじゃ」と言って、工事を始めようとしたところ、保存運動になり、それで困ったのが当時の文化財保護委員会です。それを見て近鉄さんもさっさと「分かりました。操車場は作りません」と言って別の場所にしました。それで運動が収まり、保存することになったんです。そこまではよかったんですが、そのあと「保存した遺跡を買い取ったりとかする金はどこが出すねん」ということで、それからしばらくもめていたようです。当時の新聞記事にいっぱい出て来ます。国だ、県だ、いや県だ、国だとやってるんですね。最終的に国有地の史跡になったのだから、国が費用を出したんだと思いますが、そんなこともあって収まったんです。

国道24号線というのは、奈良市内を通る国道が混んできたので、バイパスを作りましようとなる。平城宮跡は、江戸時代以来の研究で真四角だと思われて、それを避けるように道路を通そうとしたんですね。そして、念のために発掘したら、東に張り出し、現在は東院、つまり皇太子の住まいだ、というふうになってるのが出てきて、結局曲げることになったんです。この時も大変な保存運動が起きました。いつでしたか、当時の建設省の方がお客さんを案内しているのにたまたま出会い、後ろにくっついて聞いてたら、建設省がいかに文化財を大事にしているか、道路を曲げてまで平城宮を保存したんだと言って、胸を張って説明しておりました。ただ、後で聞いたら、当時の奈良にあった建設省の国道事務所の所長さんがものすごく文化財に理解のある人で、どうもその人が本当に主導して道路を曲げたらしいです。そのことは後で私たちも聞きました。

そういうふうにならうと見ると、開発と保存の対決に見えるんですが、実は、そうではない。先ほどの近鉄の線路も宮跡の中を斜めに通ってるんです。あれは大正時代にひかれた線路をもとにしてるんです。なぜ斜めに通っているかという、まっすぐ通したかったのですが、まっすぐ通すと、先ほどの棚田嘉十郎が保存運動をやった平城宮の大極殿・朝堂院と重なり、そこを壊すんです。だからそれを避けて、当時の近鉄の前身、大軌鉄道と言いましたが、そこが斜めにしたのです。だから、近鉄の文化サロンなんかで話を頼まれてこういう話をする時は、近鉄さんは前身会社も含めて平城宮跡の保存には大変協力をしたと、できるだけ声高に話をするようにしてるんですけど、そうすると喜ばれます。

こういうふうにして平城宮跡の場合はいろんなことを経ながらたどり着いたということで、現在は「NPO平城宮跡サポートネットワーク」という市民団体が、この平城宮跡の中のいろんな部分での管理やアピールをやってくれています。100人ぐらいの方がおられるんですかね。もう広いですから、国の予算で管理費が3000万円か4000万円ついてるんですけれども、こちらから草刈してずっと回って、また戻ってきたらもう草ぼうぼうなんです。管理がなかなか難しいので、草むらの中に自転車が放り込まれていたり、もうめちゃくちゃになってたのを、このネットワークの人たちが全部片付けておられました。ネットワークができて10周年の際に、ちょっと話をしろ、と呼ばれて行ってみたところ、ネットワークの人たちは我々がやり始め、いかに平城宮跡がきれいになったかということ胸を張って話しておられました。平城宮の研究150年、保存運動が始まって100年、ようやく平城宮跡は市民、国民の財産という感じを持ちました。私が若くして平城宮の発掘に参加した時には、全くそういう評価を受けてませんで、「もったいない、何で国の財産を使ってこんな広大な土地を無駄に置いてるんや」ということを盛んに言われたものです。

こういった平城宮跡は平成10年に世界遺産になっているんですが、併せて国営公園にもなったんです。平成20年の辺りから平城宮跡の中の活用ということが非常に盛んになり、遷都1300年祭に大極殿ができた年の様子をみると天平の衣装を着た人たちがウロウロしています。現在は遷都祭というのが

行われて、5月の連休にやっています。東院庭園の観月宴というのは毎年やられるようになりました。このときに関連する木簡の学術的な解説をしたり、あるいは雅楽演奏をしたりしています。これも遷都1300年祭の前の年の前夜祭から始めたんですが、最初の年は遷都1300年祭を取り仕切っている奈良県に設置された遷都1300年祭実行委員会にやってもらったんですが、それが出発点となり、現在は奈良文化財研究所で取り仕切っています。最初の時は、文化庁の当時の長官や、知事さんなんかも全部出席したんですが、当然、観月ですから私はもう酒は出すものだと思って、「酒出そう」と言ったら、実行委員会が「特別史跡で酒飲んでこぼしたらどうするんですか」と仰って、その年は酒を供しなかったんです。そして文化庁長官が来られて「どうですかね、観月宴で酒がないのは」と言ったら、「ささ（酒）のない観月宴はないね」とか言われまして、「来年から酒出しましょう」となって、それから少しずつ「今年は1人1杯」、2年目か3年目になったら2杯とか、最近は4杯か5杯いってるんじゃないかと思うんですが。そういうふうにして、これも活用なんでしょう。

その他に、先年、「東アジア文化都市」というのが開催されました。これは日中韓の文科大臣が話し合いをして、持ち回りで毎年、日本、韓国、中国担当で、それぞれの文化財を発信するイベントやりましたと言って、やるようになったようです。たまたま2016年の担当が奈良だったんですが、各資産、大安寺は世界遺産になってませんけども、芸術家を呼んで、そのそれぞれの資産の中でそのお寺に合った何か芸術作品を作ってください、ということになり、大安寺は「足場の塔」でしたが、感心しました。七重の塔ですから、復元するとめちゃくちゃ金がかかります。足場で塔を表現しましょう、足場を組んでイベントが終わった3ヶ月後にパタパタ倒すという、もう芸術家でないと発想できないようなものです。東大寺は、これは中国のアーティストで有名な人らしいですが、蔡國強（さいこっきょう）さん、御存知の方もいるかも知れませんが、遣唐使船を復元してます。全部中国から材木を運んできて、中国仕立ての遣唐使船。向こうから来るのなら遣唐使船ではなく、唐船ですよ。こんなことも最近はやられています。現在は国営公園になって平城宮跡の周りは、国交省の建物が作られたり、県の建物が作られたり、いろんなガイダンス施設がものすごく作られて、これはもちろん宮跡の外側になりますけど、世界遺産のバッファーズゾーンに入っているはずなんですが、どうなんでしょう。

4. 歴史的文化遺産とともに生きることの意味 ―平泉の今後を考えながら―

以上、平城宮跡の例を見てきますと、繰り返しお話ししてますように、非常に長い時間かけてようやくここまでたどり着いたということがわかります。結局、遺産の維持というのは簡単ではないということが、活用ということが非常に強くなった背景にあるということではないでしょうか。

問題は遺産の保護をしながら、魅力あるまちづくりができるかどうかということが、これから問われてくるだろうと思います。そして観光というのも大事なのですが、観光を取り間違えていけないということを言おうとして、次のことに触れておきます。もともと観光という言葉も、ここに書いてますように人に関わるんです。よく似た言葉で「観風」という言葉もあります。これも中国が語源ですけど、これは土地の風俗とか気風とか、そういうことをいう言葉なんです。いずれにしても、本来、観光とか、観風とかそういうことは全部、その地域とか、その人に関わる言葉だったんです。それこそ平泉を考える上で、今のようなことも含めて考えなければいけないだろうと思います。

もう一つはやっぱり時間がかかりますよ、ということです。だからすぐに結論が出るということではない。どんなに時間がかかっても、きちんとしたものを作り上げていくということが大事で、もう

すでにこの平泉文化フォーラムとか、あるいは県が計画している総合計画とかいうのが、そういう性格を持っていると思うのですが、現在まで繋がる非常に広い視野で、平泉の魅力というのを構築していく必要があります。これはまさに、このフォーラムをさらに一層充実して続けるということと、繋がってくると思います。観光も大事なんですけども、基本はやっぱり地域の人々、みなさんです。平城宮跡サポートネットワークもそうですが、地域の人たちが立ち上がってくれないと維持していくことは難しいだろうと思います。平泉は世界遺産登録された資産が多いですし、広いですから、やっぱり地域の人がしっかりやってくれないといけません。自治体だけに責任というか、やってもらうということでは、多分無理だろうと思います。

そんなことから、拡張登録がどうなるのか心配でしょうけども、その前に、先ほどちょっと御挨拶の中でも出てましたが、都市としての位置づけをできるかできないかということは、随分このところ議論してきていますが、まだ明確な答えが出ていません。それは調査がまだ進んでいないからだとは私は思っています。世界遺産は個別資産で登録されるからしょうがないんですけど、やっぱり地域全体の魅力、位置付けというものをこれから作っていかないと、拡張登録にも繋がって行かないのでしょいうから、そのためには何が必要か。多分、もう少し大きな視野での調査研究、流れを確立していかないといけないのではないかという感じは持っております。大学、あるいはこれからできるガイダンス施設、そして県、市町村が一体となって、ぜひ大きなテーマに取り組んでいただけたらというふうに思います。ちょうど時間ですので終わりにしたいと思います。どうも御清聴ありがとうございました。

平泉文化フォーラム第20回記念大会

日本の遺跡保存と活用、この30年

―世界遺産“平泉”誕生の意義に寄せて―

田辺征夫

(公財)大阪府文化財センター理事長

はじめに

日本の遺跡の保護のための法整備が整ってからおよそ100年になる。その間、遺跡に対する考え方も変化を続けてきた。特に高度経済成長期の激しい開発の波にさらされて続けられた発掘調査と遺跡保存への動きから、平成に入るとその流れも大きく変わってきた。平泉や平城宮跡を例にそのあたりの流れをたどり、今後の遺跡の保護や活用と平泉の進むべき道について考えてみたい。

1. 保存から活用へ

1) 高度経済成長期

- ・激しい開発ラッシュの元、年間1万件を超える発掘が全国各地で行われた
- ・この事態に対処するため、1970年代には全国の自治体に埋蔵文化財センターが設立され、最盛期には、7000人を超える発掘担当調査員が自治体・財団などに所属した。
- ・連日の発掘調査に追われる中、重要な遺跡のいくつかを保存するだけが精いっぱい時代が続いた。
- ・その流れが少しずつ変わり始めたのは、1990年代に入ってからであった。

2) 遺跡(遺物)の保存整備から活用へ

- ・建造物は比較的早くから活用に取り組んできた⇒建物は使わないと劣化する。
- ・遺跡は凍結保存が主流であった⇒地下遺跡の保護を前提にした整備。
- ・活用への意識が高まり始めたのは、平成になるあたりから。その背景として
 - ⇒①保存された遺跡が増え自治体だけでは対応が難しい。
 - ②膨大に蓄積された遺物への対応。
 - ③世界遺産の登録が後押し。
 - ④国交省の進める歴史まちづくり法などの登場。
 - ⑤令和元年の文化財保護法改定により、都道府県への権限委任と活用の明確化。

3) 遺跡活用の意義

- ・日本の遺跡は基本的に地下にうずもれている。発掘によって価値が顕在化してもそのままでは、その価値は理解されない。当然の流れとして、遺跡の整備、復原が求められる。
- ・しかし、せっかく保存された遺跡が、そのことによって、周辺から切り離される。
 - 遺跡の非日常化と呼ぶことができる(かつてはあまり意識されることなく日常に溶け込んでいた)遺跡の整備や活用は、遺跡の日常性を取り戻す作業でもある。
- ・遺跡が、日常の中に生きるといことは、人々が遺跡に親しみ、誇りを持つということ。そのためには、遺跡の価値を十分に知ることが大切である。そのための整備であり活用である。そして良い意味で、活用がされれば、それは、遺跡の安定した保護にもつながる。

4) 点の保存活用から面の保存活用への流れ

遺跡を含む文化財を、広く街づくりの中に生かそうとする動きが出てくる

・歴史まちづくり法 2008(平成20)年～

歴史的風致の維持向上を図ろうとする市町村が策定する歴史的風致維持向上計画を主務大臣(文部科学大臣・農林水産大臣・国土交通大臣)が認定し、その取り組みを支援する制度。認定都市は、現在76都市。

・日本遺産 2015(平成27)年～

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定する。世界遺産や文化財指定と違って、登録・指定される遺産の価値づけを行い保護を担保するためのものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用、発信することで地域の活性化を図る。

5) さまざまな遺跡の活用

- ・遺跡の復元的で、また教育的な活用
 - 遺跡整備の基本で、各地の遺跡でさまざまな整備がされている。
- ・都市公園としての活用
 - 都市域で保存された遺跡は、その空間が都市公園として重宝がられることが多い。
- ・各種イベント会場としての活用
 - 遺跡そのものの性格や価値に直接はかかわりがないが、適度な空間として各種イベントに活用する例が増えてきている。
- ・これらを踏まえて、近年の特徴として、観光資源として積極的に活用しようとする動きが顕著である。

以下、いくつかの活用例を見てみよう。



2. 世界遺産と地域

- 1) 世界遺産とは
- 1960年、ナイル川アスワンダム建設によるヌビア遺跡水没の危機に対する世界的な保存運動。アルシムベル神殿の移築。
 - 1972年、第17回ユネスコ総会で世界遺産条約成立。75年、20カ国が批准。78年、イエローストーンやガラパゴス諸島など12件が最初の登録。
 - 2019年時点で、1121件(文化869、自然213、複合39、危機遺産53、登録抹消2)



- 2) 日本の世界遺産
- 1992(平成4)年に批准。2019年時点で、文化遺産19件、自然遺産4件。



3) 平泉遺跡群の調査保存から世界遺産登録へ

- 古くは1930(昭和5)年に毛越寺で平泉最初の発掘調査が行われた。
- 1950(昭和25)年、金色堂藤原氏4代の御遺体学術調査。
- 1952(昭和27)年、文化財保護委員会による無量光院跡の発掘調査。
- 1954(昭和29)年、藤島玄治郎博士(平泉遺跡調査会)による毛越寺・親自在王院跡の発掘調査開始。以後、中尊寺、柳の御所遺跡などを断続的に調査。1970年代に入ると、発掘成果にもとづき、親自在王院、毛越寺などの整備も始まる。
- 1988(昭和63)年、柳の御所遺跡の大規模発掘調査が始まる。
- 1997(平成9)年、柳の御所遺跡、史跡指定。
- 2000(平成12)年、「平泉の文化遺産」世界遺産暫定リストに登録。
- 2011(平成23)年、「平泉—仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群—」の世界遺産登録。

平泉の歴史遺産は、芭蕉の例を挙げるまでもなく、古くから知られていて、明治以来保護の手立てがとられてきた。昭和20年代からの具体的な発掘調査は、その後の世界遺産登録につながる大きな努力であった。特に地域の人に加え、文化財保護委員会や藤島博士などの主導にみられるように、最初から全国的な視野での調査研究が行われたことも、平泉の価値を考えるうえで見過ごせない。

平泉の資産



＜世界遺産「平泉」誕生の意義＞

- 限られた地域の限られた時代の資産でありながら普遍的価値が認められた。
- 一つのまとまりのある地域で浄土思想という仏教の世界観が体感できる稀有の場所である。
→京都や奈良とは違ったまとまりが平泉固有の臨場感を生み出している。
- 寺院建築や庭園遺跡といった視覚的にわかりやすい資産だけでなく、発掘成果が考古学遺跡群として明確に位置付けられたこと。
→複数の考古学遺跡が含まれたことで、考古学遺跡登録への現実感が生まれた。
- これらを実現した背景には、長年の地道な調査研究があること。地域だけでなく早くから全国的な視点で取り上げられてきたこと。

3. 平城宮跡の調査研究と保存の歴史が語るもの

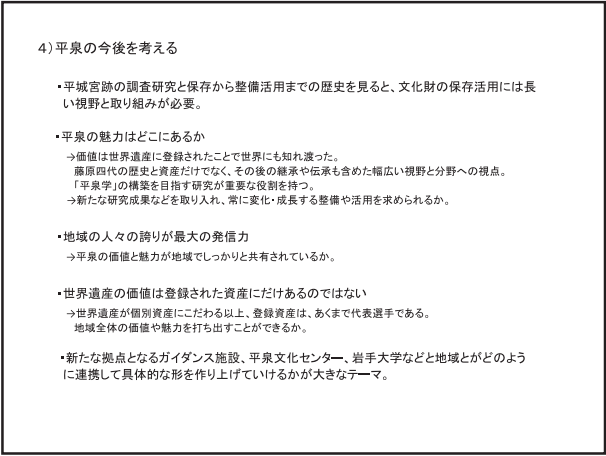
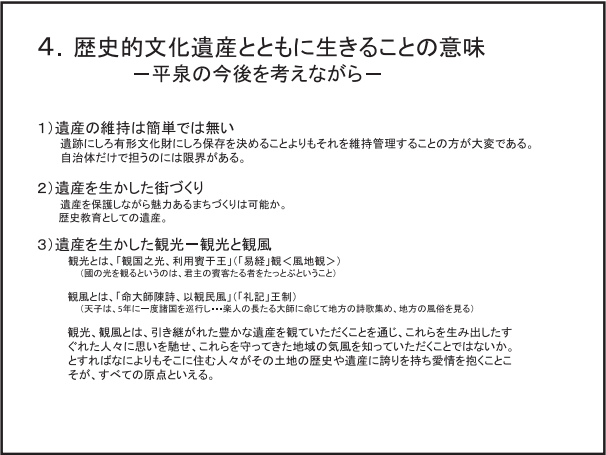
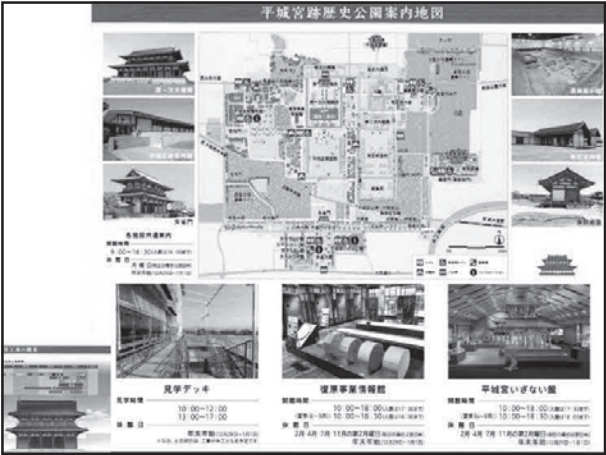
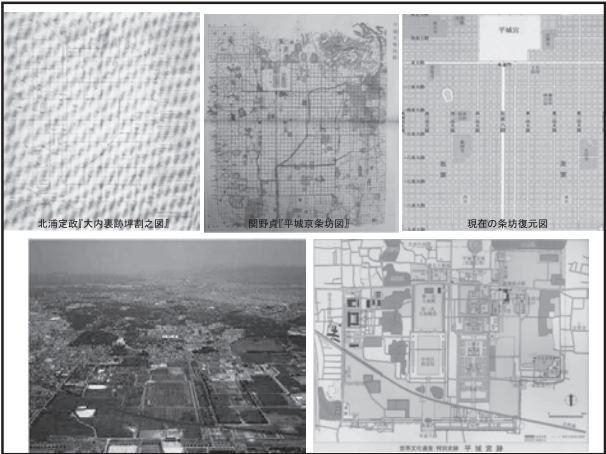
地域には必ずその土地の遺産を大切にした先人があるはず
一たえは平城宮跡では、保存の先駆者、棚田嘉十郎などー

平城宮跡の研究は、幕末の藤堂藩城和奉行所役人北浦定政に始まる。明治に入って東京帝国大学から赴任した奈良県建築技師関野良の研究が発表されると、刺激を受けた植木職人棚田嘉十郎や地元の富農溝辺文四郎らが保存運動を行う。第2次世界大戦後も、米軍軍用道路建設、鉄道停車場建設、国道24号線建設などの諸問題を国民的保存運動で乗り越え、今日に至る。



棚田嘉十郎 溝辺文四郎 北浦定政

今、先人たちの思いは、NPO平城宮跡サポートネットワークなどの市民団体に受け継がれている。平城宮研究150年、保存100年の歴史を通して、今ようやく平城宮跡は市民、国民の共有財産になった、といえる。



報告 1

柳之御所遺跡等の発掘調査成果

北 村 忠 昭

はじめに

柳之御所遺跡等の成果については、第10回で20年間の成果ということで一度紹介をしていますので、今回はその後の10年間の発掘調査によって得られた成果を中心に、堀跡や道路跡の遺構やどのような遺物が見つまっているか等の考古学的内容のお話をさせて頂きたいと思います。内容は、Ⅰ柳之御所遺跡の概要、Ⅱ柳之御所遺跡の遺構、Ⅲ柳之御所遺跡の遺物、Ⅳ遺構の変遷、Ⅴまとめの5つに分けてお話していきます。

Ⅰ 柳之御所遺跡の概略

資料1が柳之御所遺跡とその周辺を東側上空から撮影したものです。白線で囲った範囲が現在の柳之御所遺跡の史跡指定の範囲で、柳之御所遺跡は中央の田んぼが広がる部分の猫間が淵跡と呼ばれる低地部分と、遺跡の北側に流れる北上川に挟まれた部分にあります。

柳之御所遺跡は堀によって大きく2つに区画されています。この堀に囲まれた区域を「堀内部地区」、外側を「堀外部地区」と呼んでいます。柳之御所遺跡の発掘調査は、史跡公園として整備及び保存活用を図るための内容確認調査です。一昨年度までの調査は、主に「堀内部地区」で行われ、遺跡を区画する堀跡の新旧関係と構築時期の確認を目的としています。この「堀内部地区」の成果は昨年度、総括報告書としてまとめられています。このことで「堀内部地区」の調査は一区切りを迎え、昨年度



資料1 柳之御所遺跡範囲

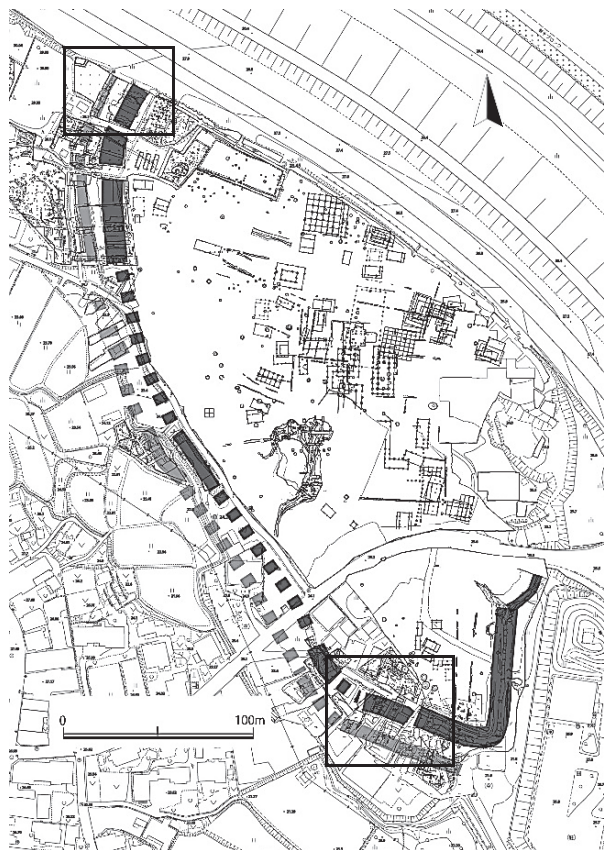
からは「堀外部地区」の調査を行っています。その目的は中尊寺金色堂へと向かうと考えられている道路跡の延伸方向と、構築時期及び周囲の遺構の分布状況の確認です。そのため、今回の内容は堀跡と道路跡中心になってしまいます。そして、最後に総括報告書で報告されている変遷について触れたいと思います。

Ⅱ 柳之御所遺跡の遺構

主な遺構を説明していきたいと思います。

(1) 堀跡

これまで、柳之御所遺跡を区画する堀跡を継続して調査してきました。調査年度によって地点が離れているため、異なる名称になっていますが、基本的には内側の堀跡と外側の堀跡の2条の堀跡が確認されています。資料2の左側の図の濃い灰色で示したのが内側の堀跡、淡い灰色で示したのが外側の堀跡になります。これらの堀跡と北上川によって堀内部地区は囲われていることが分かりました。



資料2 堀跡

資料2の右上の写真は、2条の堀跡の北端部（資料2左図の上の囲い部分）の写真です。南側から撮影したもので、写真上には国道4号と北上川が見えます。右側の幅広な堀跡が内側の堀跡、左側の堀跡が外側の堀跡になります。内側の堀跡は上幅が11～12m、深さが約4mある、かなり規模の大きな堀跡です。堀の下半部はV字状になっているため、底まで下りると、上がるのが非常に大変です。一方、外側の堀跡は上幅が3～4m、深さが0.4～0.8m程になります。二つの堀跡が隣り合っていますので、大きさの違いが分かって頂けるかと思います。

資料2の右下は南端部に近い第76次調査で見つかった2条の堀跡（資料左図の下の囲い部分）の写真です。左側が内側の堀跡、右側が外側の堀跡になります。大きさは内側の堀跡が上幅約11m、深さ約2.5m、外側の堀跡が上幅約7m、深さ1.7～1.9mです。この地点では重要な発見があり、この2条の堀跡と重なる溝跡が見ついています。資料3は2条の堀跡と溝跡が重なる部分の写真です。写真左側が内側の堀跡、右側が外側の堀跡になり、中央の細長い部分が溝跡です。内側の堀跡との差ははっきりしませんが、少なくとも外側の堀跡よりも明らかに溝跡が新しいことがわかりました。



資料3 堀跡と重複する溝跡

資料4の左側の写真は外側の堀跡がどのように埋まっているかをみるために撮影したものです。白っぽい土と黒っぽい土が混ざっている様子が見て頂けるかと思います。このような埋まり方の状況は人の手によって埋められたことを示すものになります。右側の写真は内側の堀跡の写真です。少なくとも半分からは写真左側のような土が混ざっている様子が見られず、堀の形に合わせて、右側もしくは左側から埋まっていった様子が見られます。このような状況は自然に埋まっていったと考えられます。このように2条の堀跡は埋まり方に大きな差があります。この2条の堀跡の埋まり方の違いは堀としての機能を十分に果たせなくなった外側の堀跡を埋め戻して、新しく内側の堀跡を作ったと考えるのが自然な考え方だと思います。

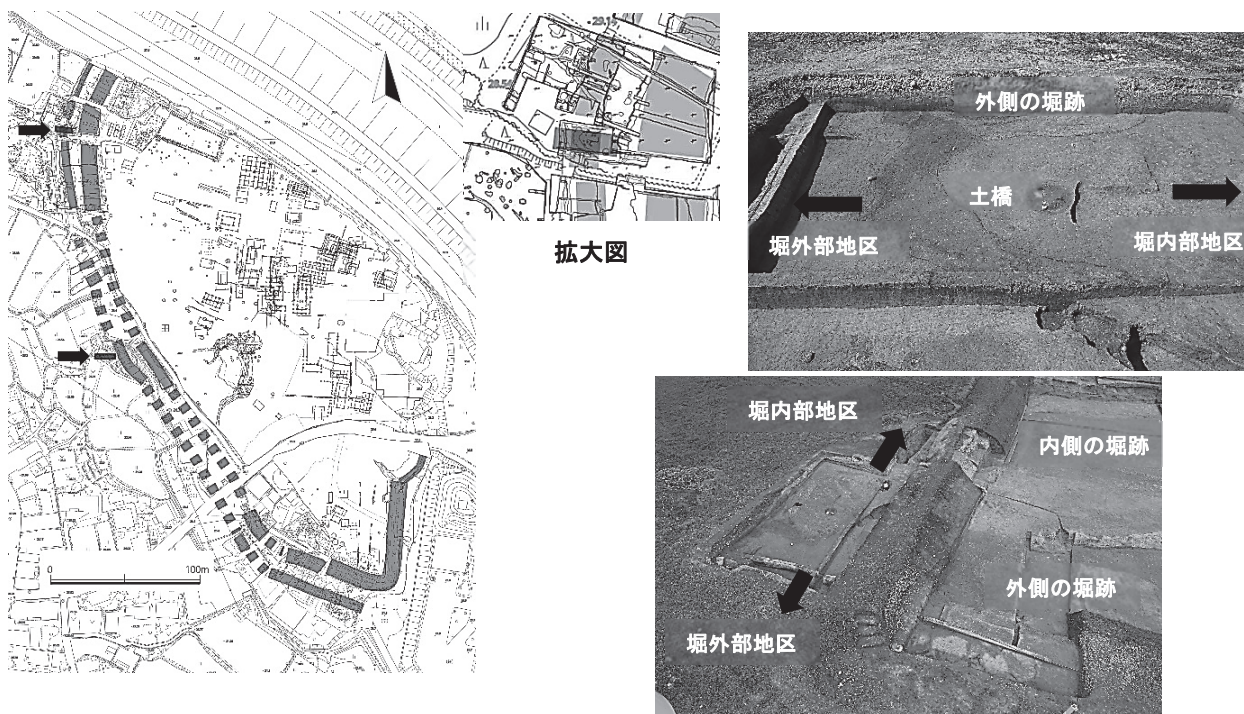
2条の堀跡の新旧関係を示す溝跡が見つかったことや堀の埋まり方の違いから、外側の堀跡が内側の堀跡よりも古いということが分かりました。



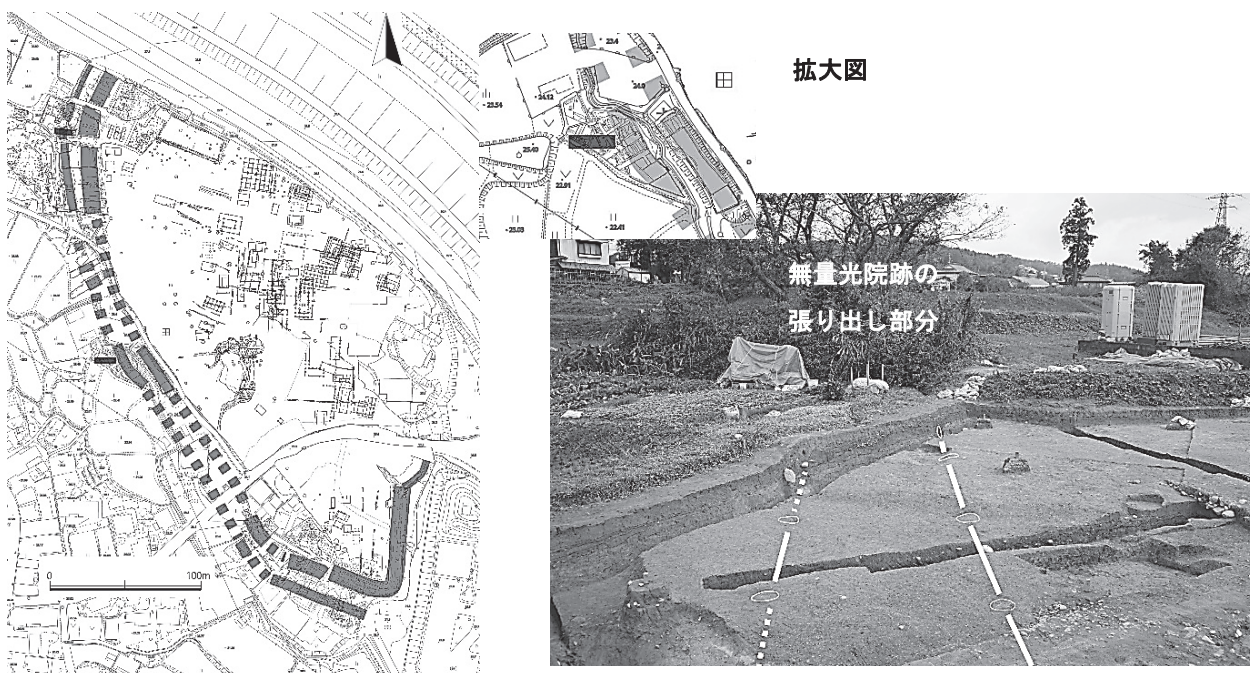
資料4 堀跡の埋まり方の違い

(2) 橋跡（橋状遺構）

堀内部地区は堀跡で区画されているため、その往来には堀を渡る場所、つまり橋が必要不可欠となります。この10年間で見つかった橋跡（橋状遺構）は2箇所、資料5の部分（左側地図の左上と中央の■）になります。



資料5 土橋



資料6 橋状遺構

1箇所は外側の堀跡で見つかった土橋です。堀内部地区の中尊寺方向への出入り口にあたる場所になります。資料5の右上は土橋を南側から見た写真です。中央に12世紀以降の新しい溝があるため、分かりにくくなっていますが、写真中央部分に黄色い地面がそのまま残っているのが確認できました。この部分が土橋になります。土橋の南側が確認されていないため、正確な幅ではありませんが、少なくとも3m、東側の部分で確認すると5mほどの幅になると考えられます。

資料5の右下は土橋を西側から撮影したものになります。文字で示した場所に内側の堀跡と外側の

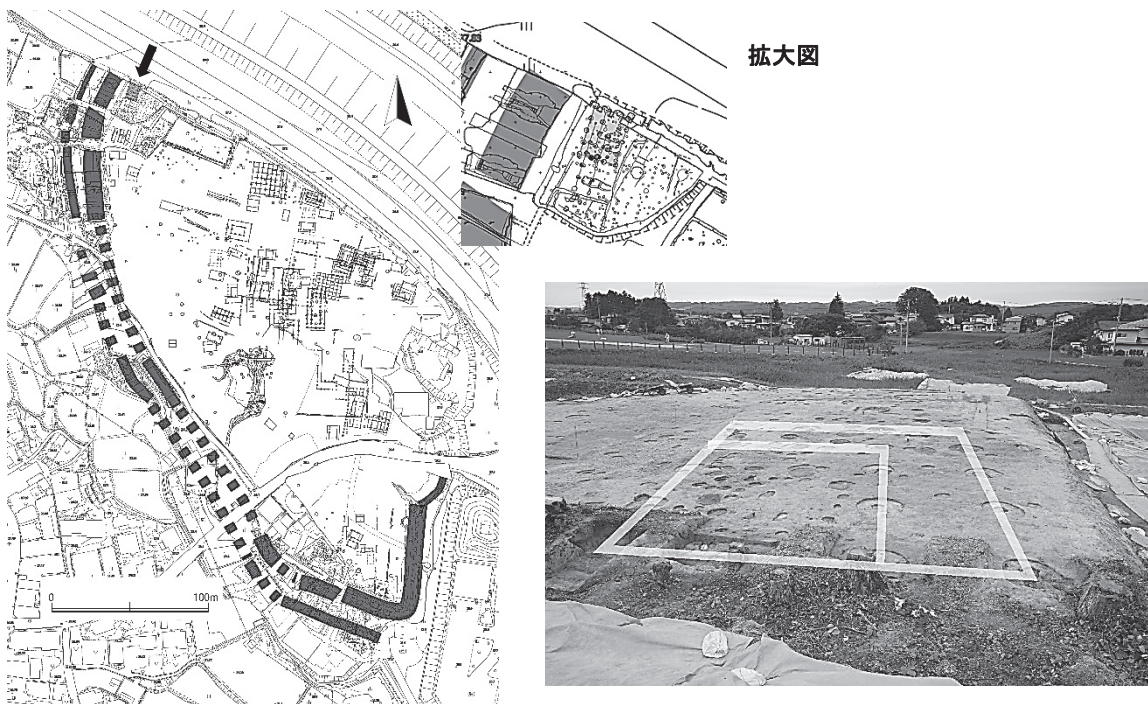
堀跡があります。色の違いがはっきりしているので、土橋の部分が分かって頂けるかと思います。このように堀の一部を掘らないことで通路として利用しています。

資料6が柳之御所遺跡と無量光院跡を繋ぐ位置にある橋状遺構です。堀跡に直接かかるものではありませんが、外側の堀跡のさらに外側で見つかっています。写真手前が堀内部地区側で、中央の木の生えているところが無量光院跡の張り出しの部分になります。丸く示したものは構成する柱の跡です。

この2箇所は、中尊寺や無量光院跡との関連を示す重要な遺構であると考えられます。

(3) 建物跡

資料7は直近の10年間で確認された唯一の12世紀の建物跡です。左側の図に矢印で示しました。この建物跡は地面に穴を掘ってそこに柱を立てる方式の掘立柱建物と呼ばれるものです。写真の外側の線が建物の範囲になり、縦の長さが約10m、横幅が7m程です。現段階において、堀内部地区で最も北に位置する建物になります。



資料7 建物跡

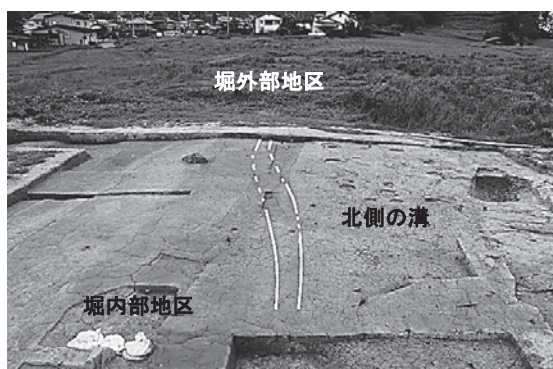
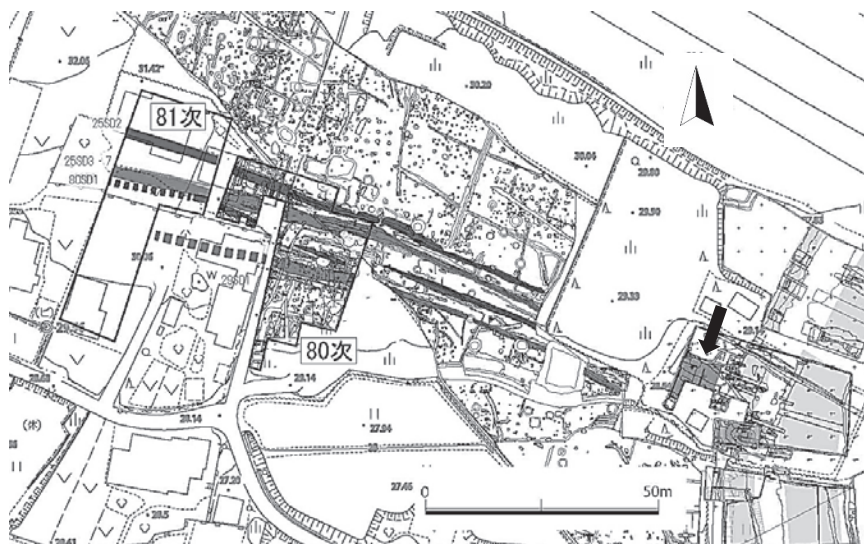
(4) 道路跡

道路跡は堀内部地区への導入部分にあたる場所と、昨年度から実施している堀外部地区で見ついています。ここでいう道路跡というのは、路面そのものが見つかったわけではなく、平行する2条の溝、つまり道路側溝になります。この側溝と側溝の間を道路として考えています。資料8下の2枚の写真は、資料8上の図の矢印の部分で見つかった道路側溝と考えられる溝跡の写真です。両溝を含めた幅は約10mになります。堀内部地区の導入部分に当たり、西方の中尊寺方向へとつながる重要な位置にあります。

資料9は昨年度調査を行った堀外部地区で見つかった道路跡です。この調査で新旧2つの道路跡があることがわかりました。これまでの調査でも、堀外部地区で中尊寺方向へ向かう道路跡が見つかっていましたが、中尊寺方向へさらに延伸することが確認されました。実線で示したものが道路跡1になります。両溝を含めた幅は13～14mになります。新しく確認されたのが破線で示した道路跡2です。

幅は道路跡1より少し狭く両溝を含めた幅は10～11mです。この2つの道路跡は今年度の調査範囲で一部が重なり、新旧関係を把握することができました。資料9右の写真は2つの道路跡が重なる部分の写真です。少なくとも2つの道路跡が重なる部分では、道路跡2にはかわらけ片や炭化物が混在する等の土の違いが見られ、道路跡2が新しいことがわかりました。

これらの道路跡が確認されたことにより柳之御所遺跡と中尊寺がつながっていたということの証拠になるものと考えています。



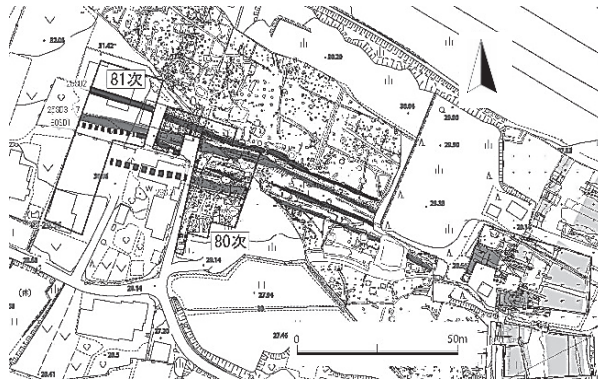
資料8 道路跡



資料9 堀外部地区の道路跡

(5) 塀跡

堀外部地区で見つかった道路跡には、その両脇に塀跡が伴うことが確認されており、道路跡とセットになって周囲を区画していたものと考えられます。資料10左側の写真は道路跡1に伴う塀跡です。発掘調査ではこのように溝のような状態で見つかります。底面には黒い筋がありますが、板材が据えられていた部分になります。幅はほぼ2cmになります。写真奥では10cmほどの長さで断続的に見つかり、粉河寺縁起絵巻で見られるように板材を縦に据えていたものと考えられます。



粉河寺縁起絵巻に見られる
板材を縦に使用している例

(中央公論社日本の絵巻5 粉河寺縁起
絵巻より引用)



信貴山縁起絵巻に見られる板材を横に使用している例
(中央公論社日本の絵巻4 信貴山縁起絵巻より引用)

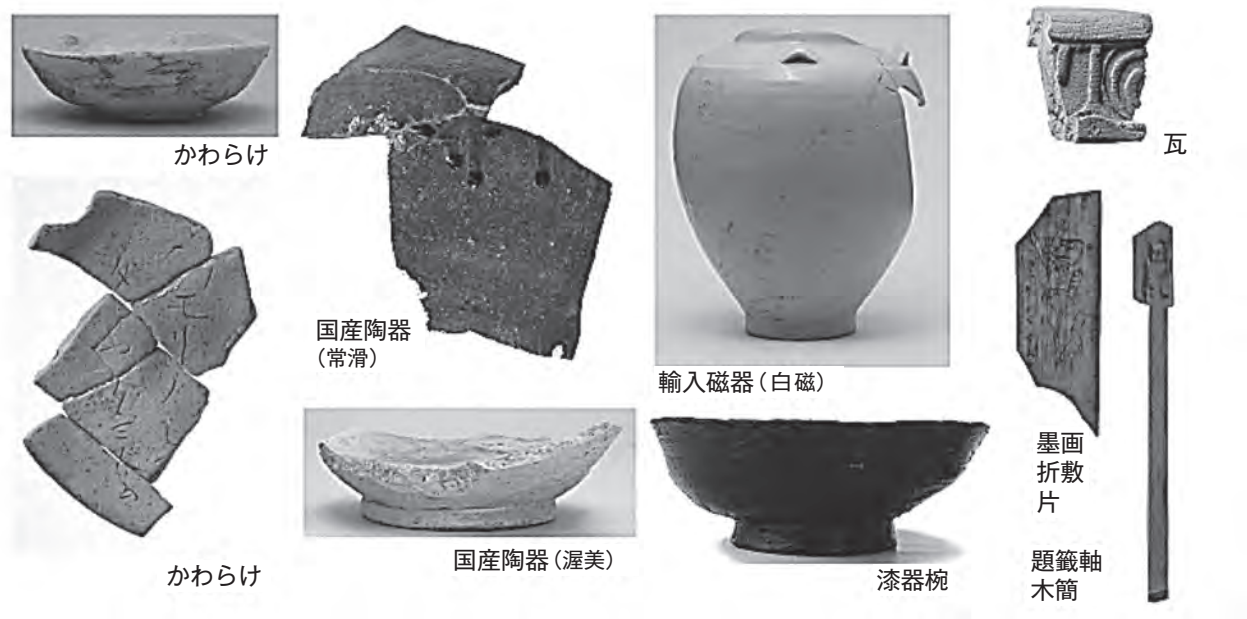
資料10 塀跡と塀のイメージ

Ⅲ 柳之御所遺跡の遺物

資料11をご覧ください。主な出土遺物をあげてみました。発掘調査のイメージとしては、ひたすら地面を掘るというイメージがあるかもしれませんが、史跡整備を目的とした内容確認の調査では、後世の人々へ残し伝えていくためや、後々に内容の再検討ができるようにするため、できるだけ遺構を傷つけないように、必要な部分しか掘り下げることを行いません。そのため、多量の遺物が出土することはあまりありませんが、それでも多種多様な遺物が見つかっています。国内では現在の愛知県である常滑や渥美で作られた甕や壺などの陶器、海外では中国で作られた白磁の壺などがあります。このような遺物のなかで、最も多く見つかったものが素焼きの土器であるかわらけです。このかわらけは日常に使われていた食器ではなく、主に宴会用の使い捨ての食器として使われていたと考えられています。これまでの調査で堀内部地区では、10トンを超える膨大な量のかわらけが出土しています。このことから堀内部地区では、かわらけを使用する宴会などの儀式などがおこなわれる場所であったと考えられています。

この他に注目すべき遺物として、^{ぼくが おしきへん だいせんじくもっかん}墨画折敷片と題籤軸木簡があります。墨画折敷片に描かれている擬人化されたカエルは鳥獣人物戯画に描かれるカエルと類似しています。12世紀の中頃に製作されたとする鳥獣人物戯画に近い時期のもので、奥州藤原氏が当時の京都と密接な関係であったと考えられ

る資料になります。また、題籤軸木簡は書類を巻き付けた巻物の軸部分に使われた木簡で、一方の先端に書類の内容が書かれていました。この題籤軸木簡には「馬」や「日記」と記されており、「馬」の出納に係わる「日記」の内容を持つ文書に伴うものと考えられます。題籤軸の用途と書かれた文字の内容から遺跡内で馬の出納に係わる文書が保管されていたことを示し、出納管理などの行政的な機能との関係を示唆するものと考えられます。このように当時の都である京都との関係や柳之御所遺跡の機能を考える上で重要な発見と言えます。

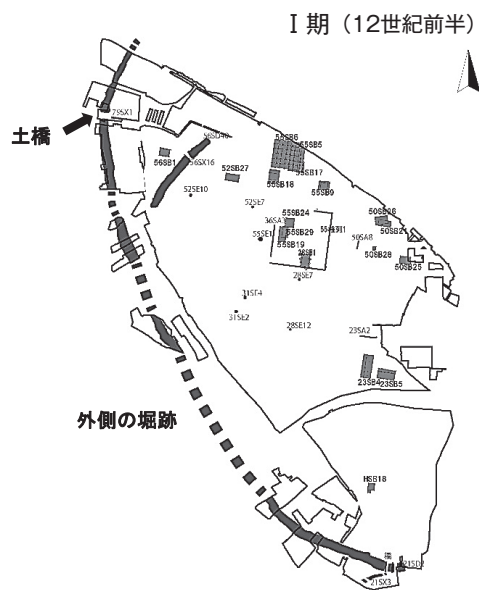


資料11 主な出土遺物

IV 遺構の変遷

これまで紹介してきた遺構のなかでは、ほとんど時期について触れてきませんでした。概略のところでもお伝えしましたが、大きな成果として堀内部地区の総括報告書が刊行されました。そのなかで柳之御所遺跡は3～5期の変遷が想定されています。その変遷に則して、これまでご紹介した遺構の時期を見ていきたいと思います。

資料12をご覧ください。柳之御所遺跡の古い段階になります。外側の堀跡の詳細な構築時期は確定されていませんが、出土遺物の傾向からこの時期に構築されたものと考えられています。中尊寺方面での出入り口にあたる土橋についても外側の堀跡が構築された当初から存在すると考えられていることから、外側の堀跡と同じように考えられています。多様な遺構が見つかった柳之御所遺跡ですが、この後ご紹介する後代よりも散漫な分布傾



資料12 堀内部地区の遺構変遷 I

向が見られます。

資料13は12世紀中頃のものになります。この頃になると堀内部地区は外側の堀跡によって囲われるようになります。資料12にも示しましたが、中尊寺方向への出入り口にあたる部分に土橋があります。少なくともこの時期には存在していたものと考えられます。堀内部地区の北端に位置する建物跡も出土遺物の傾向からこの時期に構築されたものと考えられます。堀内部の中心域では中心建物や池などが構築され、全域に遺構が分布するようになっていきます。

資料14は12世紀後半のものになります。大規模な内側の堀跡が構築されます。この他、外側の堀跡は部分的に埋め戻され、南端部では盛土整地が行われています。近接して無量光院が造営されますが、確認された位置関係から無量光院との関連が想定される橋状遺構はこの段階に構築されたものと考えられています。

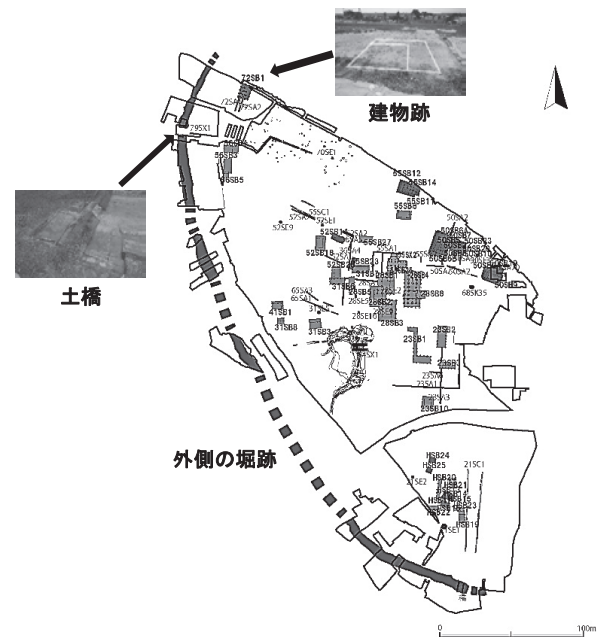
この他に、堀外部地区で見つかった道路跡がありますが、いつ頃構築されたかははっきりしていません。これからの調査でははっきりしていくものと期待しています。

V まとめ

このように堀内部地区の遺構の変遷が考えられ、堀内部地区の様相がわかってきました。その一方で、課題も見つかっています。資料14に橋跡を示しましたが、確認されているのは南側と東側です。中尊寺金色堂や無量光院跡がある西側には橋が確認されていません。無量光院が造営された12世紀後半の柳之御所遺跡と中尊寺や無量光院との関連を考える上でもこの方面の橋の確認が必要となります。この他に、堀外部地区でも課題が見つかっています。一つは、中尊寺方向へ向かう道路跡がいつ頃構築されたのかということ、もう一つは、堀で区切られた空間はどのようなものであったのかということです。これらの課題については、今後の発掘調査で少しずつ解明されていくものと期待しています。

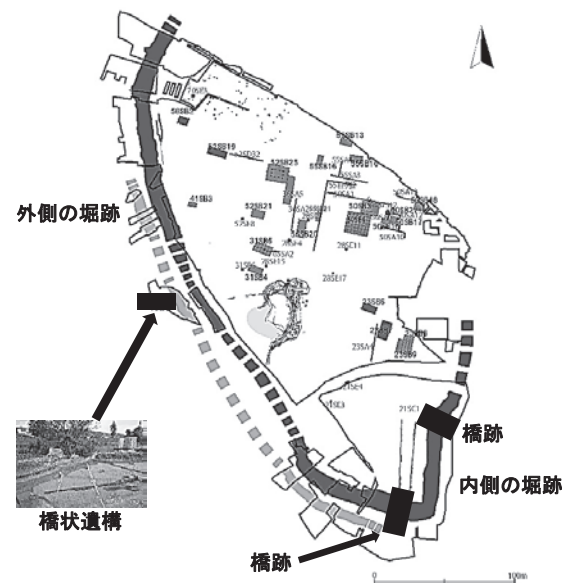
最後になりますが、資料15をご覧ください。今年度から新たに遺跡の南側の堀を中心とした整備が始まりました。遺跡の内容を確認するための調査が終われば、その後には、史跡整備が待っています。そのためにも、規模の大小にかかわらず、きちんとした発掘調査を行うこと、しっかりした報告書を

Ⅱ期 (12世紀中頃)



資料13 堀内部地区の遺構変遷Ⅱ

Ⅲ期 (12世紀後半)



資料14 堀内部地区の遺構変遷Ⅲ

作成することが大切だと考えています。柳之御所遺跡に関しては、これからも堀外部地区の発掘調査が続く予定ですので、これまで先人の方々が行ってきたように、保存活用に向けた史跡整備ができるよう、正確な発掘調査を行っていききたいと思います。



資料15 現在の整備状況（南西部）

報告2

世界遺産 一平泉と宇治一

杉 本 宏

はじめに

私は平泉と京都及び宇治のことについて、30分ほどお話をしていきたいと思っております。まず平泉の文化財として非常に重要なとか特徴的なものに浄土庭園伽藍があります。その京都と宇治と平泉の類似性に、今までいろんな方がご指摘をされてきたことですが、それを現在の調査成果に立ち返って、もう一度踏まえてみようということで、お話をさせていただきます。私は3年前に定年退職して、今は大学におります。33年間宇治市の教育委



員会ですずっと文化財をやっております、その33年間の中の25年間は平等院の調査と整備をやっておりました。そんなことで平泉とは関係をさせていただいております。私が研究しておりますのは宇治を含めての12世紀の京都でして、この12世紀というのは実は平泉の時代でもあるわけです。京都でも、この平泉でも、お互いに響き合いながらいろいろな歴史があります。

この12世紀は、京都でも非常に大きな転換点、時代の変革点でありました。一つは皆さんご存知のように、摂関政治から、いわゆる上皇を中心とした院政に大きく政治体制が変わっていった時ですし、その中で武士の台頭ということもありました。また仏教の方から見てみますと、一般的に平安時代の仏教というのは、顕密体制、いわゆる密教と顕教が両方、どちらかというと密教の方が大きいと思いますけれども、そういう状態で続いてきているものが、ちょうど11世紀中頃から後半ぐらいに浄土教が興隆してきて、それが大きく花開いていった時代というのが12世紀であります。さらに平安京という都市を考えてみますと、それまではずっと古代都城があるわけですが、12世紀にはその周辺にサテライトのように、いろんな衛星都市が出てきて、同志社女子大学の山田邦和先生の言葉で言う、「首都複合体」ができあがります。平安京だけではなくて周辺の都市が一体となって、当時の首都を構成するというような時代でありました。そういうことを踏まえながら、この平泉と京都の浄土庭園についてお話をしていきたいと思えます。

二番目に、浄土庭園がそもそも私のずっとやってることなんですが、そこから派生して、都市形成ということについても興味を持っております、平泉の都市形成というのは大変面白いなと思っております。それは宇治とか京都と平泉の都市を比べてみると、意外とよく似てるところがあって、いわば寺院だけではなくて、都市の形そのものが、京都の中のものと、よく似ているところがあると考えています。そのあたりのことも少しご指摘をしながら、さらに違うところも少しお話をしていくということになります。実は平泉に来てこういうお話をさせていただくのは、このフォーラムで多分2回目かと思うのですが、スライドを作り過ぎまして、すごい勢いで話していくか、途中で話が尻切れトンボで終わるかということが多いです。今回もスライドを40枚ぐらい作ったもので、それを30分で本

当に話せるのかなと思いながら、今から話を進めていきます。所々で話を最後まで行き着かせるために、少しスライドを早くまわしてしまうところがあるかもしれませんが、よろしくお願いを申し上げます。

1. 浄土庭園伽藍のはじまりと平泉の浄土庭園伽藍

平安時代後期の京都でまず見ていきたいものが、平安京の外すぐところに造られた法成寺です。法成寺は道長が造った寺です。また今の平安神宮のあたりが白河殿という街区が造られ、そこに法勝寺があります。それから今の京都博物館とか三十三間堂のあるあたりに、平安時代の後期に造られました法住寺殿という大きな院御所があるんですけども、その最勝光院とか、京都の南の鳥羽の地にあります鳥羽離宮と勝光明院、さらに宇治にある平等院というものが、今日私が取り扱うものになります。さらに、平泉の方ですと、毛越寺と無量光院についてお話をしていきます。京都のこういう寺々と、この毛越寺、無量光院の関係、比較ということが少ししてみたいなというのが前半の話になっていきます。

時間的な流れはだいたい11世紀の前半に京都でいわゆる浄土庭園伽藍というものができ始めて、その一つ大きな流れとして、法成寺、法勝寺、毛越寺という私が「法成寺系」と呼んでいる

大きな伽藍の流れがあります。もう一つが、京都の「平等院系」浄土庭園伽藍と私が呼んでいます、平等院、勝光明院、最勝光院、無量光院というふうに流れていく、一つの寺院の流れがあります。浄土庭園伽藍は今、毛越寺に行きますと、大きな池が伽藍の中にあります。ああいうものが始まっていくのが京都でありまして、その一番最初に造られるものが、この法成寺でした。藤原道長は、皆さんご存知だと思いますけれども、道長は晩年に出家をするんですけども、もともとこの人はすごく病

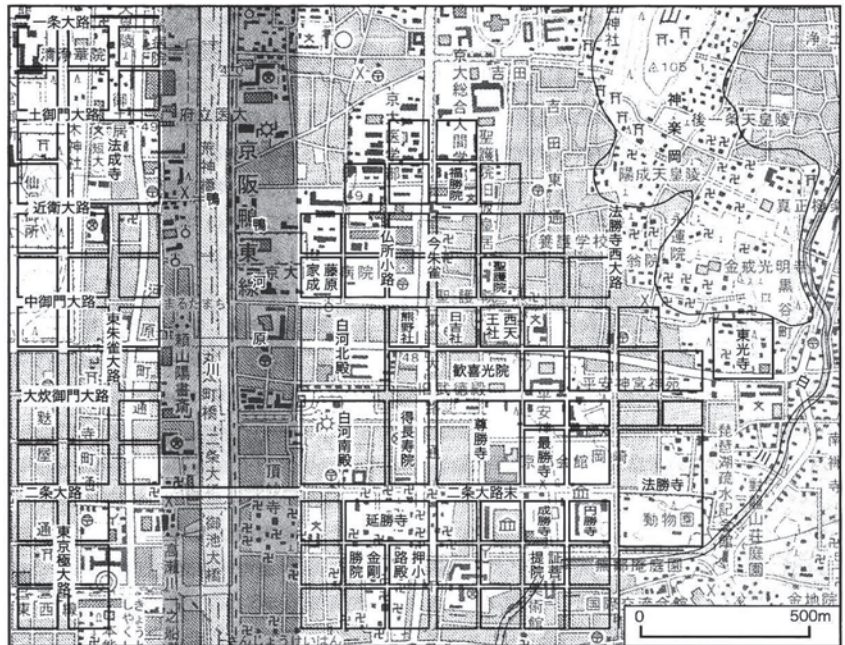


図1 京 12世紀における白河の施設配置 (山田邦和氏作図)

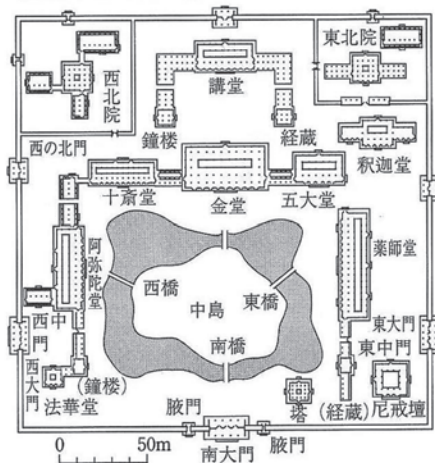


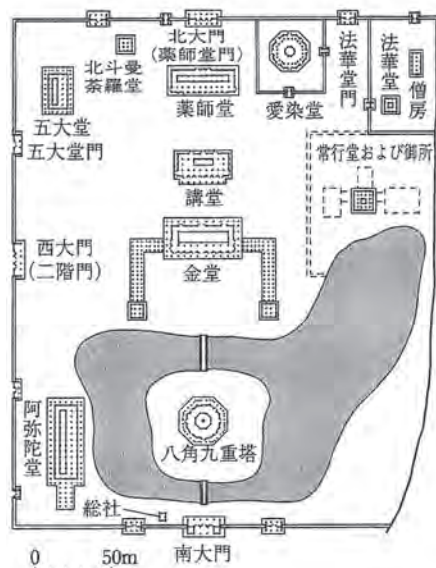
図2 京 法成寺伽藍配置想定図 (藤原道長建立 金堂本尊3丈2尺大日如来 清水擴氏復元)

堂	造営年	安置仏
阿彌陀堂	寛仁4年 (1020)	1丈6尺9寸阿彌陀如来、観音・勢至菩薩、四天王
新阿彌陀堂	万寿3年 (1026)	
十齋堂	寛仁4年 (1020)	1丈6尺十齋仏10余体
金堂	治安2年 (1022)	3丈2尺大日如来、2丈釈迦・彌勒如来・文殊師利・弁伽菩薩、9尺梵天・帝釈天・四天王
五天堂	治安2年 (1022)	2丈不動明王、1丈6尺四大尊
藥師堂	万寿1年 (1024)	1丈6尺七仏藥師如来・六観音菩薩、1丈日光・月光菩薩、8尺十二神将
釈迦堂	万寿4年 (1027)	1丈6尺釈迦如来、6尺梵天・帝釈天・四天王、十大弟子、八部衆、等身釈迦如来100体
講堂	永承5年 (1067)	2丈3尺大日如来、1丈6尺釈迦如来・不動明王・大威徳明王・彌勒如来、延命仏・不動明王

気がちの方で、何回も宮中でパタンと倒れて失神なんかしているんです。そのたびに出家するんですけども、その出家した時に、彼が自分の住居としても使った「無量寿院」という、九体阿彌陀堂を京外に作ります。それが大きく発展したものが法成寺というお寺で、それが実は伽藍の中に大きな池を持ち込んでいく、非常に綺麗な景観を持つお寺の最初になります。現在は、残念ながら高校とか、住宅地になっておりまして、伽藍もはっきりしませんけれども、復元されているのを見ますと中央に大きな池があって、その北側に大日如来を安置する金堂がある。三丈二尺の巨大な大日如来が安置されていたということになっておりますが、両側にも仏堂が建ち、池を取り囲むような形のお寺でした。図2で見るとこのようなもので、だいたい一辺200mぐらいの大きな寺域の中に、たくさんのお堂が建って、この中に丈六以上だけでも50体ほどの顕密仏像が格納されていたというものです。『栄華物語』を見ますと、一つの仏の世界に見えるというようなことが書かれており、当時非常に高く評された寺院なんです。

11世紀の後半になりますと、院政を始める白河天皇によって、それを超えるような寺が白河というところに造られていきます。皆さんご存知の白河の六勝寺の最初になります法勝寺です。場所は、今の平安神宮の辺になりますけれども、平安京の二条大路が京を越えて、鴨川をさらに越えて東にまっすぐ伸びていったどんつきのところですよ。その周りに幾つか、お寺が建ち並んでいまして、全部「勝

という字がつくので、六勝寺と呼ばれています。その最初のお寺が法勝寺でした。図3です。現在、もうほとんど遺跡になっていて、全体がよく分からないんですが、遺跡の発掘調査で、現在はこのような形の寺院であるということが分かってきております。だいたい一辺300m四方の中に巨大な金堂が立ち、池の中の中島に建つ八角九重塔の高さは81m、この81mは現在まで、京都の中で



堂	造營年	安置仏
金堂	承暦1年 (1077)	3丈2尺毘盧遮那仏 2丈多室・圓敷花 無量寿・天鼓雷音・ 9尺六天像
講堂		2丈釈迦如来像・ 1丈6尺普賢・文殊・ 菩薩
阿弥陀堂		1丈6尺九体阿弥陀 1丈観音・勢至菩薩
五大堂		2丈6尺不動尊 1丈6尺四大尊像
薬師堂	永保3年 (1083)	1丈6尺七仏薬師像
九重塔	永保3年 (1083)	8尺大日如来・五 智如来

図3 法勝寺伽藍配置想定図（白河天皇建立 金堂本尊3丈2尺毘盧遮那仏 富島義幸氏復元）
法勝寺八角九重塔は高さ27尺（約81m）。この高さの建物は今の京都にもない。

一番高い建物です。これを歴史的に超えている建物は一つありませんが、そういう巨大な塔を持った法勝寺というものが建てられます。現在も遺跡は一部残っていて、本堂もだいたい基壇だけで一辺50mぐらいありますけれども、それも現在残っておりますし、動物園の中にこの八角九重塔の遺跡が残っています。

実はこの流れが平泉の中に入ってきました、毛越寺が造られていきます。だいたい12世紀の中頃、2代基衡によって造立されたということです。これは皆さんよくご存知のことかと思います。図4が毛越寺伽藍の平面図になりますが、法勝寺の図と比較してみますと、やっぱりよく法勝寺と似ています。まず、この真ん中の部分の本堂部分の翼廊が付くタイプということが大変よく似ていますし、この毛越寺の場合は背後に山が迫っているのも、真後ろに講堂ができなかったからちょっと横にずらし

ていますが、本堂の裏に講堂が付くというところもよく似ています。北東側に常行堂、法華堂があります。これも実は、法勝寺と非常によく似ています。南門から中島を渡って、金堂に行くというこの動線もよく似ていますし、池が北東側に少し張り出してくるというところも毛越寺と法勝寺は大変よく似ていまして、今まで言われている通り下敷きとしたお寺は法勝寺だろうなというふうには思います。ただ、やはり似てないところがいくつかありまして、中島に塔がありませんし、阿弥陀堂がありません。法勝寺の場合は西に九体阿弥陀堂という、非常に大きなお堂があったんですが、それがありません。さらに愛染堂とか五大堂とかいう密教諸仏のお堂も毛越寺にはありません。金堂、本堂の本尊も違います。法勝寺の場合は、毘盧遮那仏、大日如来が本尊でしたけれど、毛越寺の場合は薬師さんということで本尊も違います。よく似ているけど、やっぱり違うところもかなりある、ということを確認をしておきたいと思います。

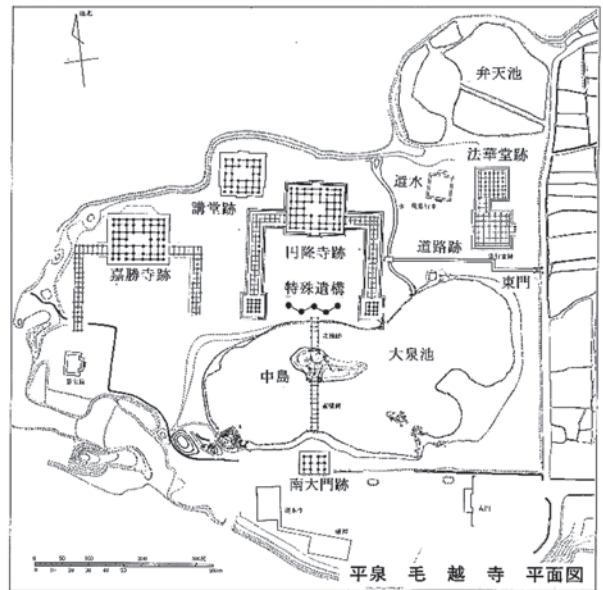


図4 毛越寺の平面図（藤原基衡建立 本尊丈六薬師如来 平泉町報告書より）

2. 宇治の浄土庭園伽藍と平泉

次に「平等院系」を、宇治、京都、平泉の中で見てみたいと思います。宇治周辺は、実は平等院だけがあるわけではなくて、藤原氏によって都市的な開発が行われまして、平等院プラスいろんな別荘が建ち並んでいたところです。全体を宇治殿というような言い方で呼んでいます。平等院鳳凰堂が建ちましたのは、1052年です。先ほどの法成寺を建てた道長の子供である頼通がそれまでの邸宅を寺に変えて、その翌年の1053年に、現在の鳳凰堂が建っております。今、綺麗に色が塗り替えられていますが、これが私

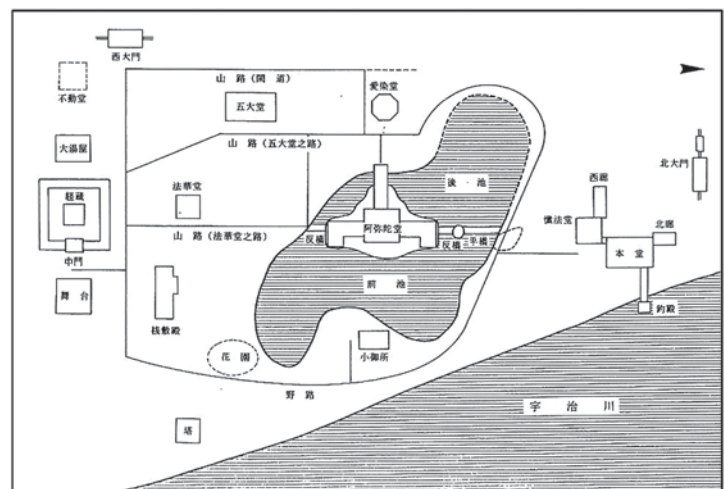


図5 宇治 平等院伽藍配置想定図（藤原頼通建立 本尊丈六阿弥陀如来 杉本復元）

の現職時代の最後の関係した大きな仕事でした。屋根瓦を全部変えたときに、実は平安時代の瓦がまだ1500枚ぐらい現役で使われていることがわかりまして、その中の700枚ぐらいをまた元に戻して葺いています。本尊は丈六の阿弥陀像です。周辺の地形を見てみますと、宇治川に面して鳳凰堂が建っています。対岸に同じく世界遺産の宇治上神社があって、仏と神が向かい合うような形で、平等院の周辺の地形はあります。十何年間の発掘調査をここでしゃべりますと、多分夕方5時から6時ぐらいまでつき合っていましたら、全部お話ができるんですが、とてもそこまでできませんので、か

いつまんでだけ話します。実は調査前、平等院は有名なんですけど、ほとんどどういう実態か分からないお寺でした。平成に入るとともに、考古学的調査が始まりますけど、それまで皆目分からないから、庭園調査のための発掘が行われるようになって実像が分かってきたというようなお寺であります。発掘調査をしてみると、鳳凰堂の周りに玉石敷きの洲浜、毛越寺の庭園にもありますが、あれが非

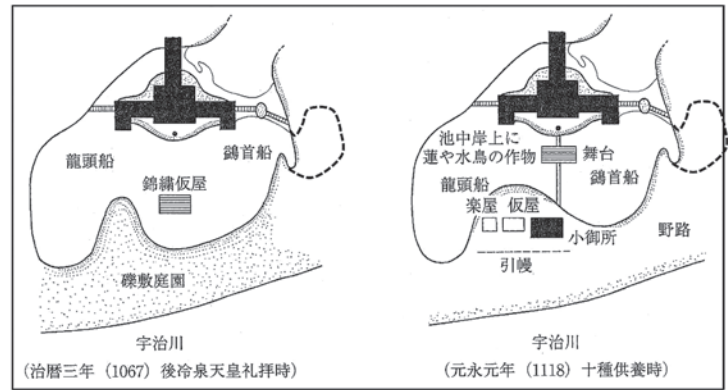


図6 鳳凰堂における法会のしつらえ (杉本復元)

常に綺麗に周っている。そして洲浜に取り囲まれた中に鳳凰堂が建っているというように分かりました。さらに、今の鳳凰堂は建ってから50年後の大改修によって、この形になっているということも分かりました。今は瓦葺きで翼廊も池に張り出すように基壇造というものになっていますが、実は創建された当初は、両翼廊が池にはみ出して池の中から柱が立ってるようなものでしたし、どうも瓦葺きでもなかったようで、中尊寺金色堂の屋根が木の瓦なんですけど、あれと同じような「木瓦（こがわら）葺き」ということが分かっています。12世紀に入ると、大規模に改修がされて今の形になっています。だから平泉の無量光院は平等院をもとにするわけですが、創建時平等院ではなくて、50年後に改修された姿が基になっているんだということが分かっています。発掘調査でも、池の形も今の池より一回り大きくて、おそらく竜頭鵠首（りゅうとうげきしゅ）の船を停めていた広がりがあるようなことも分かりましたし、鳳凰堂に入るには、正面に橋がかかって入るのではなくて、北の方から橋を二つ渡って中に入って、また南へ抜けていくというような動線でお堂に入るということも分かりました。さらに池の対岸、ここには「小御所」という御所が建ってまして、ここから鳳凰堂を見るというようなことがあったということも分かりました。12世紀の宇治というのは非常にたくさんの別荘も建っていた、そういうところなんです。これも平泉に関係するので、述べておきますけれども、実は宇治の街というのは、図10のように何となく碁盤目状のものがあるんですけれども、発掘調査をすると藤原氏の邸宅はこの碁盤の目から飛び出して、周りでも見つけられます。これがどういうことかということ、後から言いますが、いわゆる最初に都市の枠組みが設定されて、その中に建物が入っていくという造り方をしているのではなく、最初に小さな種を作っておいて、そこからスプロール的に街が広がっていく、というような街の造り方になっておりまして、古代的な計画都市ではなくて、自由に広がっていくような都市構造を持っているということが分かっています。

鳳凰堂と同じような仏堂は、鳥羽離宮の勝光明院を発掘調査すると、見つかりますし、12世紀の後半、ちょうど今の三十三間堂のあるところなんですけど、そこがもともと法住寺殿という後白河上皇の御院所で、そこに平清盛によって三十三間堂が建てられ、平清盛のいとこが後白河の奥さんになっておりましたので、その人が最勝光院という平等院の鳳凰堂と非常によく似た建物を建てておられます。これは平等院を見に行き、それから建てているという記録も残っているものなんです。実は12世紀前半から後半、平等院が建ってから、100年ぐらい経った時に、京都の中で平等院鳳凰堂というものが再評価されて、同様な建物が建てられているということがあります。

今度は無量光院を見てみましょう。皆さんご存知のように、『吾妻鏡』の中には秀衡が建てたというお寺で、それは宇治の平等院を模したんだということが、記録に残っているものです。京都で「平等院鳳凰堂を模す」というお寺は勝光明院、最勝光院がありましたし、平泉では無量光院がそんな

だということです。無量光院本堂と平等院鳳凰堂と平面的な形は確かによく似てるんですけども、それよりもすごいな、こんなところもちゃんと一緒にしてるんだというところが、建築的には一つあります。実は鳳凰堂の中堂というのは少し変わった建物でして、建築的なことで申し訳ないですが、母屋が三間二間の仏堂です。これに庇はつきません。普通、本尊の後ろ側を行(ぎょう)のために回らなきゃいけないんです。三間二間で本尊を入れてしまうと、本尊背後に壁ができるから、後ろに回れないんです。だから、母屋が三間二間の仏堂というのは造りません。これに庇をつければできますけど、庇がない三間二間の建物が平等院鳳凰堂の中堂です。それを解決するために、ここに裳階(もこし)という付け庇をつけて背後の部分だけを室内に取り込むことによって、本尊後ろの空間を確保しています。これは鳳凰堂だけがやっているやり方でして、実はこれと全く同じ構造をとっているのが、無量光院の本堂になります。要は外観が本当に鳳凰堂と一緒にあったのだろう、ということがよく分かる特徴になっています。最近平泉町さんが発掘調査をしてい

くと、いろんなところがよく似て参りまして、舞台跡が見つかったり、一番僕が驚いたのは、この本堂への入り方もそっくりでした。これはもう平等院の庭園の造り方と全く同じということで、いろんな細かいところに、気を配って造られていることが分かりました。でも、平等院と比べると、少しずつ、ちょっと違うところもある、ということでもあります。とりあえず今まで、浄土庭園の似ているところ、似てないところを比べながら、今ご報告を申し上げましたけれども、2番目の話に、もう時間もあまりありませんので移っていきたいと思います。

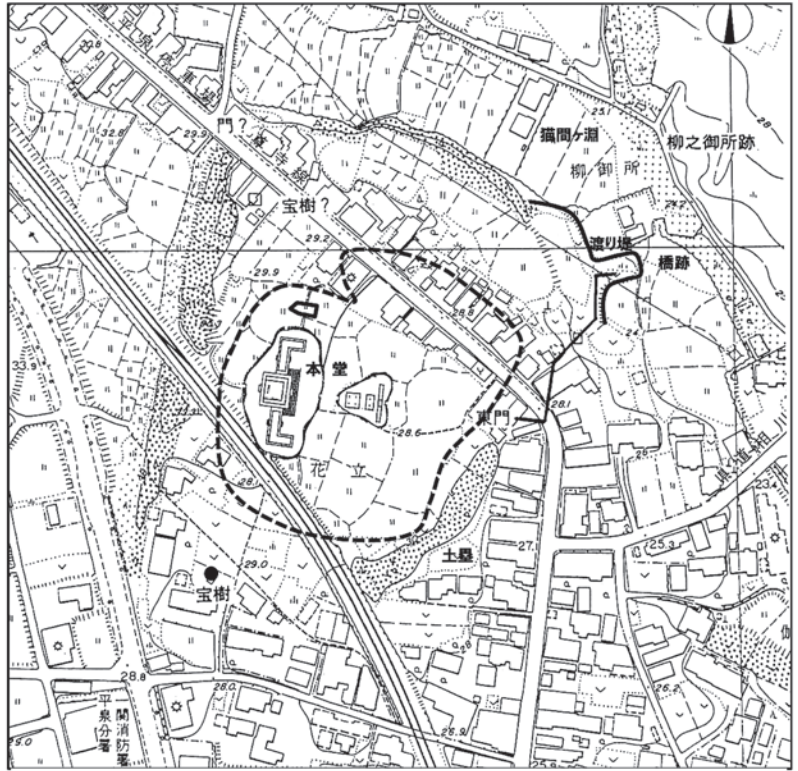


図7 無量光院跡の地形図(平泉町報告書に加筆)

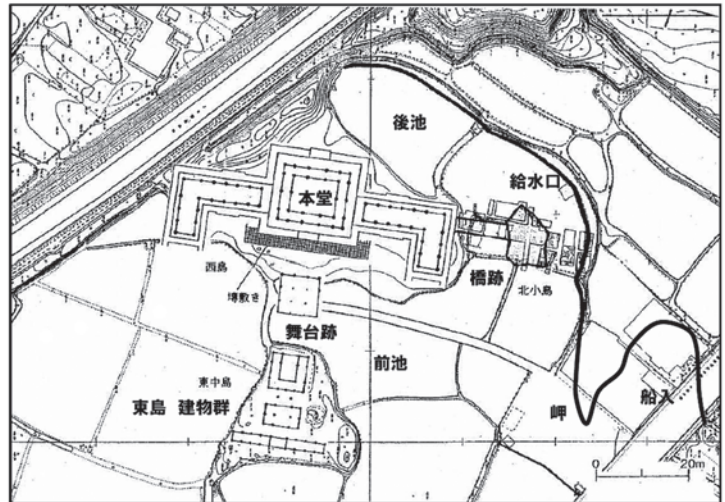


図8 無量光院跡(藤原秀衡建立 本尊丈六阿弥陀如来 平泉町報告書に加筆)

3. 平泉の都市形成と京都・宇治

実は平泉の都市形成がどのようになされたかというのは、この浄土庭園伽藍の比較をしながら、多分こんなようなことだったんじゃないか、と私が今思っていることがあります。図9は都市の発展について、羽柴直人さん（（公財）岩手県埋蔵文化財センター）が描かれた図面を引用させていただいてますが、この部分にちょっと注目してください。毛越寺前には大きなまっすぐな道路があって、そこに幾つか縦に区切られた道路があって、観自在王院があります。図1の白河殿の三条大路末と比べてください。これを東西を逆にひっくり返してみると、実は三条大路末のまっすぐ行ったら、法勝寺があって、白河殿には、今朱雀大路、法勝寺西大路という大きな縦2本の道路があります。その中に、自分の娘たち、あるいは子供たちの建てたお寺があって、さらに12世紀になると、その中に貴族たちの邸宅も建てられていった、そういうところなんです。ここの二条大路末というのが、京都から東国に出ていくときに、非常に重要な道でして、昔の人たちは三条大路末を通



図9 秀衡期の平泉想定図（羽柴直人氏作図引用）

て、法勝寺にあたって、こちらから栗田口を経て東国へと続いていくわけです。この部分が平泉とめっちゃめっちゃよく似てませんか？東西ひっくり返しただけです。観自在王院もポイントです。これは二代基衡の奥さんが建てた、要は一族の寺が、この毛越寺前の大通りのドンつきのところに集まっています、その周りに貴族たちの邸宅が集まっています。大きな道と、そこに直行するものと寺が混在している姿。法勝寺の伽藍と同じような伽藍を持った毛越寺もそこにある。白河殿と平泉と大変似ているんじゃないかということがあります。もう一つ、今度は無量光院のところですが、ここもよく見てみると、猫間が淵が入っていて無量光院があって、柳之御所があって、伽羅の御所があります。宇治の姿と非常によく似ています。お堂を模すとか、寺院を模すということだけではなくて、参考になっているのは、それぞれ浄土庭園伽藍がある白河殿とか宇治殿の空間構成が、実は平泉の中に移されているんじゃないかというようなことであります。これはどういうことかといいますと、法成寺・法勝寺と毛越寺の間には、70年ぐらいの時間差がありますし、平等院と無量光院だけを比べますと100年近い時間差があって、余りにも実は時間差があります。けれどもこれはこう考えてみると、時間差がありません。法勝寺から六勝寺の最終的な完成を迎える円勝寺は1149年、すなわち毛越寺が造られる時、六勝寺は街並みが造営されていました。その最初の寺院、法勝寺を参考に毛越寺が平泉の中で造られていくということでありまして、無量光院も、鳥羽殿あるいは法住寺殿で平等院を模した勝光明院、最

勝光院が造られている時代層の中で、模されていた。昔日を模しているのではなくて、都の中で行われているトレンドを平泉に導入しているのではないか。かつ、それは当時上皇たちが行っていた活動を良く見てたのではないか、というふうに思います。

これを少しまとめてみますと、毛越寺の部分が平泉の中だと、白河殿をイメージした都市空間が造られていっているのではないか、ということを思いますし、3代秀衡の時に

なると、鳥羽殿とか宇治殿を模した形で、実は無量光院、柳之御所のある空間が造られていくのではないか。前者は、まさに都市空間でして、住宅建物が今までの発掘調査で見つかっています。後者だと、自分の邸宅、持仏堂、政権の執行機関であるような、どちらかという家政的な感じの施設が充実していく、そういうゾーニングがされながら、当時都市形成がされているのではないかというふうに思います。西側には聖なる山稜があるというようなことではないかと思います。

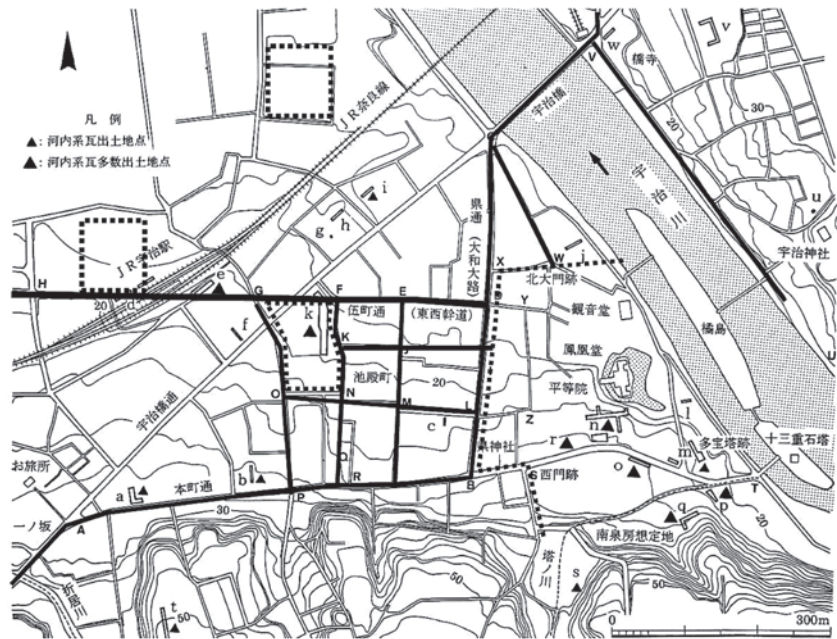


図10 宇治における11～12世紀の邸宅等遺構と街区（杉本作図）

まとめ

最後にまとめになりますけれども、今日の話の中でちょっと注意しておきたいことがあります。それは計画都市と都市計画を区別しましょう、ということです。平泉は計画された都市ではありませんけれども、都市計画はあります。都市が発展していく過程の中で、ゾーニングがちゃんとされながら、発展を続けている。要は都市開発がバッティングしてぐちゃぐちゃにならないということです。これは明らかに、その社会の中で都市計画、いわゆる調整する力があったということだと思います。

二つ目の気になる点ですが、これは京大の富島義幸先生が以前から言っておられますけれども、平泉の中には密教堂が見つかりません。京都には普通にあります。不動堂とか愛染堂とか普通の密教のお堂がありますが、平泉にはありません。もう一つ、12世紀の京都は、塔が林立した時代でした。法勝寺にも大きな塔がありまして、六勝寺にも大きな塔がありまして。平泉の中には本当に塔が少ない。京都と平泉の仏教の違いは、密教が見えないということと、塔が見えない。12世紀京都は「百塔巡り」といって、京中の百の塔を巡るほど塔が林立している景観にありました。でもそれは、平泉の中では獲得されていない、或いは選択されてない、というようなことであります。

というようなことで、平泉のこれからの研究も、全部がまだまだ分かっているわけではなくて、京都・宇治と平泉の比較をもっと進めていかないといけないんじゃないかなと思っています。ということで、ちょっと駆け足になりましたけれども、私が思っていることをご報告させていただきました。どうもありがとうございました。

報告3

書き換えられた東北の古代・中世
—平泉（柳之御所）30年の成果—

吉 田 歓

はじめに

米沢から参りました吉田と申します。最初にちょっと個人的な思い出を話しますと、この平泉文化フォーラム、今回で20回目という記念の会になりましたけども、思い起こしますと、第1回目が私たちがやった会でございまして、あれからもう20年経つのかと思うと本当に愕然とするといえますか、私もあの頃は若かったんですが、今は山形の山のように白いものが髪についておりますけれども、その20年間を、あるいは30年間を振り返って、平泉、あるいはその関連遺跡を、振り返ってどうですか？というテーマを今回、事務局さんからいただきましたので、その辺りを少し私なりに振り返ってみたいと思っています。タイトルは「書き換えられた東北の古代・中世—平泉（柳之御所）30年の成果—」という大変大きなテーマをいただきましたので、今日お話しする内容も、先ほどの杉本先生と違って精緻な内容ではなくて、かなり大ざっぱなお話になるかと思います。それで20年30年を振り返ると一口に言いましても、先ほどの杉本先生じゃありませんが、三日三晩位かかりますので、今回は二つのテーマにちょっと絞らせていただきたいと思います。一つは、まず平泉の核になっている政治拠点「館」と言いましょうか、柳之御所遺跡あたり、あの辺の成果、あるいはその研究状況について振り返りたい。それからもう一点は平泉を中心とした都市空間についてどういうふうに考えられるのかという事を少し考えて述べたいと思っています。



基本的に平泉、あるいは奥州藤原氏に関わるイメージというのは、それこそ30年前以前は蝦夷の末裔で、この東北の野蛮な地で何やら、やんちゃのし放題をしていた人たちの子孫なんだということで、最後は源頼朝によって滅ぼされてしまうという、そういったある意味、イメージが強固にあったかと思います。そういうどちらかというマイナスといった後ろ向きのイメージとは裏腹に、中尊寺の金色堂、ああいう華麗な文化遺産、お堂を作る、そういう経済力、あるいは文化力、ハイセンスなものを持っていたんだと、そういった黄金文化に代表されるようなプラスのイメージもお持ちになっている方が多かったかと思います。ですから、ちょっと後ろ向きのイメージと、それから、いやいやそんなことはなくて、すごくハイセンスなんだ、という両極端を同時に持ちながら結局どっちなのかな？ともやもやしていた部分があったわけです。そういったところで近世以降もやはり文化人が引き寄せられ、皆さんご承知の通り松尾芭蕉さんなんかもお出でになって、句を読まれたり、「奥の細道」に紀行文をお書きになっている訳です。ですが、こういった切り口から、どちらかという詩情豊かな歴史ロマンに彩られた町と言いましょうか、空間？そんなようなイメージを持たれていたのが30年以上前位かと思っています。そして同時に源義経と弁慶のヒーロー物あたりがあったりなんかしまして、かなり歌舞伎的に面白いところだったわけです。そういう中で都市平泉というのも何となくイメージが

形づくられてきたわけです。ですから例えば近世に描かれた復元的な絵ですと、近世の城下町のようなお城と、それから碁盤目状の町割を描いたような想像図が描かれたりしてきたわけです。ところが、そういう中で事態が少しずつ変わって参ります。戦前も調査はあったんですけども、一番大きくぐっと変わってくるのが戦後の発掘調査だと思います。

第1章 戦後すぐの発掘調査

発掘調査が戦後間もなく大変な時期に行われます。そこでは、先ほど来、お名前が出ている藤島亥治郎先生を始め、岩手大学の板橋源先生始め、皆さんが一生懸命発掘調査をされて参りました。そういった先生方、グループが発掘をされたのが、中尊寺、それから毛越寺、無量光院、観自在王院といったところでした。こういういわゆる寺院群が眼前に姿を現してきたわけです。これはかなりビックリするところで、藤島先生のお書きになった本の中の前書きに書かれていましたけど、最初に見た時には、これはすごいぞ、ここをちゃんと調査させていくと、次々いろんな事が分かるんじゃないかという期待感をその時、持たれたというふうにお書きになっておりましたけども、その期待を裏切らない成果が次々と出て参りました。例えば毛越寺です。これは先ほどの杉本先生のお話の通りで、都、京都にある法成寺、あるいは法勝寺、それをいかにも模倣したようなそういう大きな池と大伽藍が見つかったわけです。これも驚くべきことで、観自在王院でも同じような伽藍と池が見つかって参りまして、その西側には「車宿り」の遺構ではないか？というものまで見つかって参りました。当然、車宿りがあるという事は牛車を使っていた、そういう生活が行われていたということが推測できるわけです。そして無量光院も先ほどのお話の通りで、まさしく宇治の平等院を模した、吾妻鏡にある通りの遺構が見つかるわけです。翼廊の部分はちょっと大きめになっておりますけれども、本堂部分については先ほどのお話の通りそっくりに造っておるわけです。そう言いましたけども私のような下種な者は、どうやって柱と柱の間を測ったんだろうと気になりますけれども、いずれにせよ、そういう形で全く同じものが平泉にも造られているということが

文献だけではなくて、遺構という形で確認できてきたわけです。ですから、ここまでの成果から、いわゆる蝦夷の地だという事で、蝦夷の末裔であるだろう奥州藤原氏が、平泉にこういう黄金、あるいは都の最先端の寺院建築を模したものをこの地にも作っていた。そういう貴族にも引けを取らない、そういう生活、あるいは文化を享受していたんだ、そういうイメージが構築されてきたわけです。そういう中で、さらに大きく変わってくるわけですが、先ほどの毛越寺と観自在王院の図は皆さんも見なれたものかなと思います。こういう形で、そっくりなものが出てきたわけでございます。そういうふうに関東の文化をかなりダイレクトに取り入れた高い文化が花開いていたイメージ。そして奥州藤原氏も貴族的なイメージといいますか、そういうイメージを持たれるように変わってきたわけです。

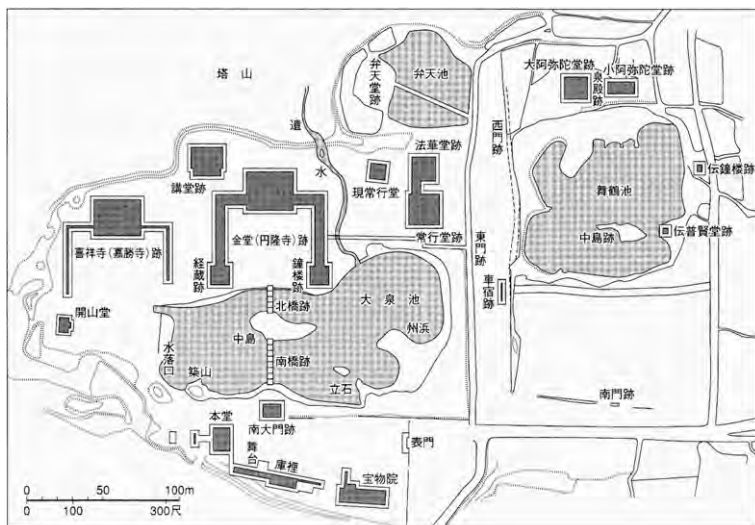


図1 毛越寺と観自在王院

も確認できてきたわけです。ですから、ここまでの成果から、いわゆる蝦夷の地だという事で、蝦夷の末裔であるだろう奥州藤原氏が、平泉にこういう黄金、あるいは都の最先端の寺院建築を模したものをこの地にも作っていた。そういう貴族にも引けを取らない、そういう生活、あるいは文化を享受していたんだ、そういうイメージが構築されてきたわけです。そういう中で、さらに大きく変わってくるわけですが、先ほどの毛越寺と観自在王院の図は皆さんも見なれたものかなと思います。こういう形で、そっくりなものが出てきたわけでございます。そういうふうに関東の文化をかなりダイレクトに取り入れた高い文化が花開いていたイメージ。そして奥州藤原氏も貴族的なイメージといいますか、そういうイメージを持たれるように変わってきたわけです。

第2章 柳之御所の発掘調査－1980年代

そういう中で、新しい展開が今から30年前に起こるわけでございます。それが「第2章 柳之御所の発掘調査」ということになります。つまり今までは、中尊寺、毛越寺、観自在王院、無量光院という、いわゆる寺院建築、寺院跡は、調査の主たる対象として行われてきたわけです。そこから貴族的な京都文化が花開いたような、そんなイメージを持たれるようになってきたわけです。ただし、これはあくまでも寺院建築、寺院跡を掘っているわけですので、お寺はこうだということなんですけれども、では奥州藤原氏、当の本人たちは当然どこかで生活を日常の暮らしをしていたか、物を食べたり、酒を飲んだり、色んな事をしていたんだろーと思いますけども、そういういわゆるライフゾーンが分からなかったわけです。それが今から30年前の柳之御所遺跡の発掘調査がスタートすると共に我々、みんなも予想もしなかったものが、地下遺構として現れたわけです。多分、一番当時大きなインパクトだったのは、やはり二重の巨大な堀。あれは今も復元整備されているのをご覧になっても迫力がございします。ああいうものが掘りたてのところを我々、見る事ができたわけです。ですから、あんなに華麗な寺院群を作っている藤原氏の住んでいた場所が、猛々しい巨大な堀を持っていた。そういうかなり衝撃を受けたわけです。そして、その堀の内部、外部もですが、調査されていますけども、大量のかわらけがいっぱい出てくるわけです。これはいわゆる皆さんもご存知の通りでお酒を飲んだりする、その宴会儀礼で使うお皿といいましょうか、お碗といいますか、入れ物でございします。これがいっぱい出てくるということは、宴会儀礼をかなりやっていたということが分かります。そして掘立柱式ですけども、建物跡も累々と見つかる、そして池跡まで見つかる。そして、折敷（おしき）という板やお盆がいっぱい出てきますけども、その中の1枚にご覧のような建物を描いたものまで、出てきたということになります。そうしますと、今まで出てきたかわらけ、これは宴会で使います。これはどういう人たちが使うかという、まさに京都の貴族たちが宴会をする時に使っていたものということで、そうすると奥州藤原氏たちも、京都の貴族たちと同じように、かわらけを使った宴会を繰り返しやっていたというイメージに繋がるわけです。そして、池跡も建物跡も見つかるし、そして建物を描いたようなこういうものも出てくる。しかも、絵巻物に出てくる寝殿造の絵と、かなり類似している似たような絵になります。ですから、こういうものが平泉の柳之御所に出るということは、ひょっとするとこういったものが、内部にもあったんじゃないかというイメージに繋がってくるわけです。そうすると、貴族と同じような酒を飲み、貴族と同じような池を愛で、そして貴族と同じような建物に住んでいたというふうになりますと、奥州藤原氏というのは、やはり蝦夷の末裔と言われましたけれども、貴族と同じような文化を享受していたんじゃないかと、そんなイメージに繋がってきたわけです。ただ、こういう形で30年前の調査が始まって以降、大変全国的にも衝撃を与えた予想もしなかった事がいっぱい分かった訳です。それが保存運動にも繋がって行っ

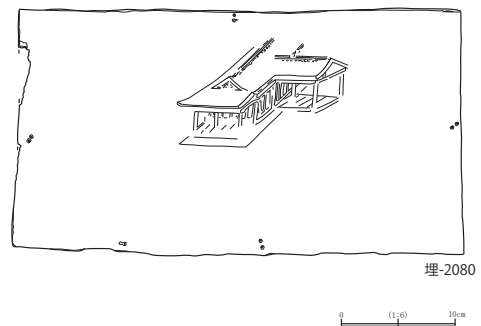


図2 折敷に描かれた建物

たんだろーというふうに思いますけれども、そういうふうに大きくイメージが転換したのがまさに30年前の調査だったという事です。それでは、その内容ですけども、一気に進展をしたわけです。まとめてみますと、4点程度になりますでしょうか。まず、従来の研究というのは、寺院を対象としたものが中心で、結局、実は奥州藤原氏の実態というのはよく分からなかったわけです。それが発掘調査

によって遺物も遺構も、そして絵画まで出てきて、これで一気にイメージが具体化したわけです。この功績たるや、かなり大きいものであらうと思います。ちょうどその頃、全国的にいわゆる中世考古学というのが、盛り上がっている時期でもあって、お亡くなりになった網野善彦さんたちを始め、一生懸命されてたのにもちょうどシンクロしたというのもあったかと思います。そして古代からの系譜を研究する必要性というのが、改めて持ち上がりました。それはその堀の系譜でございます。ああいう、かわらけで酒を飲んでる人たちが、なんであんなに堀を一生懸命作ってるのか。これがひょっとしたら、前の時代にさかのぼる系譜を引くんじゃないかということで、安倍氏、清原氏、そういったものを再点検といひましようか、見直していくきっかけにもなったんだらうと思います。そして当然、奥州藤原氏が平泉に移る前の状況も興味を持たれるわけで、それが衣川地区の長者ヶ原廃寺跡。これも調査自体は古くからされてるわけですが、やはり見直しする必要があるだらうと思います。そして宴会や建築の実態というのが具体的に分かってきたわけです。こういう形でいろんなことが分かって参りました。そういうふうによりイメージが大きく変わる転換点に位置しているのが30年前の調査、今日まで続くものだということになります。ただその後、文化フォーラムも含め、関係機関のご尽力で長期間にわたって研究が継続されてくるわけです。

そういう中で果たして、奥州藤原氏は貴族的な生活を本当にしてたのかどうか？ということ、やはり点検する段階へと入って参ります。例えば奥州藤原氏の柳之御所の建物です。最初の一つ目のテーマ、館の部分について見直しが始まって参ります。最初の発掘調査の成果の図にもありましたが、発掘調査をして建物は出てくるんですけど、先ほどの折敷の絵のような典型的な寝殿造と同じ平面をした建物というのはなかなか見出せない。現状でも見出しがたい状況にあります。掘立柱の建物があって、四面庇の建物だったり、庇が無かったり、色んなことがあります。こういうものは寝殿造とは違うようだけど、どうなのかという事で、例えばご覧の画面のような上浜田遺跡という遺跡がございます。神奈川県海老名市にある遺跡です。この図は鎌倉時代の遺構ですが、おそらくこの土地の地頭か在地の武士の館跡を掘り当てたわけです。ご覧いただくと、柳之御所遺跡で出ている、何となくちょっと寝殿造にはならなそうな、小ぶりなものとちょっと似ている印象をお受けになるかもしれ

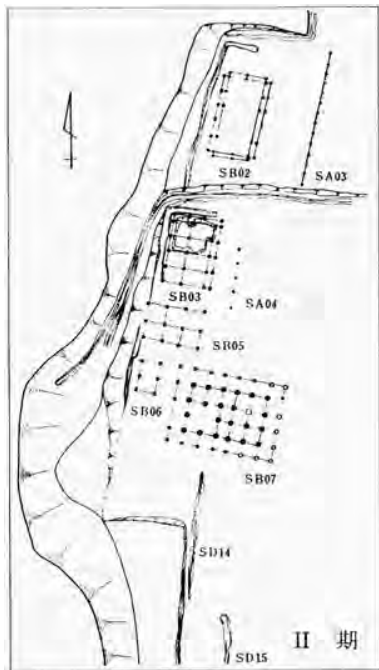


図3 上浜田遺跡

ません。やはり掘立柱の建物で構成されております。そしてこういう上浜田遺跡なんていうのが、実は神奈川県にもあったりします。そして京都府の福知山市ですけども、大内城跡というのがございます。大きな内側の「内」で、大内城というのもありまして、これも12世紀の武士の館跡と思われる遺構が出てまして、やはりこのような母屋と附属するような建物がいくつか周りを囲むように出ております。こういうものを考えますと、地方の武士の館の何となくスタンダードが見えてくるのかなという事が分かってまいりました。こういうふうにより平泉だけで考えると袋小路になりますけれども、全国規模で類似するようなものを探し始めると、実は幾つかあったんだという事にならうかと思ひます。こういう形で少しまた揺り戻しが始まるわけです。

そして奥州藤原氏のイメージも二転三転して行くんだらうと思ひられます。例えば、先ほど申しましたように、京都風の華麗な寺院群を作っているのと反対に堀で囲んだ柳之御所などというものを造っている。そういう軍事的な要素も持ち合わせているという事が分かつ

たわけです。そして日常生活でも宴会儀礼なんかをやっていて、貴族的な生活を多分していただろうという事が分かるわけです。ただし実際に彼らが生活していた建物はどうか、という事なんです。やはり発掘調査だけでは寝殿造に住んでましたとは言いがたくて、神奈川の上浜田とか京都の大内城、そういった各地の類似したような地方の武士と似たような建物、居館に住んでいたんじゃないかなという事が見えて来る訳です。

どうしても我々は、こう思うと「わー」って走ってしまうんですけども、そうではなくて、少し冷静に見ていきたいと思います。ということで、この20年30年、熟成されてきたんじゃないかなというふうに感じています。そうすると奥州藤原氏のイメージというのは結局どうなのかということ、単に貴族的な生活を享受していただけではなくて、やはり地方武士としての側面も持っていたという事、これは忘れてはいけないのかなという事です。寺院群とは象徴的な要素として奥州藤原氏の実像が見えてきた、これが30年前から今日に至るまで、大きな成果の一つじゃないかと思われまいます。これ以前はどうしてもイメージ先行で考えていたんですけども、遺物、遺構でもって語れるようになって来た訳です。こういう形で、一つ目の居館については、いろんな成果が上がってきたかなと思います。

第3章 中世都市論と平泉

では二つ目の都市としてどうかという事です。これも「中世都市論と平泉」と題をつけて、第3章とつけてますけども、これもちょうど、やはり30年前、中世都市というのが一つブームになっておりまして、都市研究というのが大きく進んだ訳です。中世都市としてどうかという事なんです。が、当然平泉はその中世都市として、注目をされて参りました。そして、これもイメージではなくて、実物として、一つ目の道路や宅地、こういったものがだんだん分かってきたわけです。先ほどの杉本先生のスライドの毛越寺前の区画割りのようなものが現れてきたわけです。そして当然、平泉100年弱ございますから、時間の経過期間の中で、変遷があるんじゃないかという見方も現れます。そしてそれが清衡期、基衡期、秀衡、泰衡期へと変遷して行くんだと、そういう見方が現れます。それに応じて平泉の中も大きく変革して、再開発されてくると、そういうような事が考えられてくる訳です。そういう中で今度は、前の時代とどう繋がるかというのが、もう一つのテーマとして、この20年ぐらいで現れた訳ですけど、つまり古代都市から中世都市へ、どういうふうに繋がるのかという事です。古代都市は先ほどの、田辺先生のお話の通りで奈良の平城京、平安京、ああいう都城制、あるいは地方においては国府、そういったものをモデルに地方都市もできるんじゃないかと何となく思われる訳ですけれども、果たしてどうか。そして古代史的にはその地方都市である国府、地方の都市が国府なんですけれども、実はこの国府も発掘調査が進めば進むほど、あんまりまとまり感がなくて、いろんな施設がバラバラに点在している。あんな碁盤目状にはきれいには造られてないって事が、だんだん分かってきた訳です。ですから古代史の都市理論も大分変わってきている、それと平泉の中世、あるいは鎌倉にどう繋がるのかというのが一つ問題になってきます。そこでご覧の図のように、これが岩手県教育委員会さんで、最近出された報告書のまとめの図ですけども、最初の左側、あるいは清衡期でございますが、ご覧のように柳之御所と中尊寺、その間を多分結ぶ道路がある、そういうシンブルなスタイル、それが最終的には右側の、その南側に碁盤目状に近い町割りができたり、無量光院あたりが開発されたりと、そういうような形で都市の要素を現してくるという事がずっとこの調査の積み重ねで分かってきた訳です。ですから平泉ではどうかということ、赤字のところをご覧いただくと、計画的な道路、それから宗教施設等の計画的な配置、それから3つ目としては、経済的な機能、こう



図4 平泉Ⅰ期



図5 平泉Ⅱ期

いったものも当然あっただろう。そしてその周辺には、白鳥館遺跡ですとか、骨寺地区といった、そういう生産、経済それから信仰に関わる空間が、バラバラとくっついている。そして衣川地区には、前史である長者ヶ廃寺跡というのが、ちゃんとある。そういう形で、だんだんイメージができてきました。そうすると、結局日本的な都市というのがまさにこの平泉から現れた、分かるようになったという事です。古代はもう都城制という、カチッとしたものがあるので、迷いはないんですけども、鎌倉との間に何があったかが実は分からなかった訳です。それが今回の平泉の長期間にわたる発掘、それから皆さんの調査、研究によってイメージが出てきました。ご覧のように、一見バラバラなんですけれども、全部で機能を上手く果たしている。ですからバラバラに見えるんですけども、機能的に構築されている。そして代ごとに徐々に展開していくというそういう時間軸、それから空間軸、そういったものを読み取れるようになってきた、というわけで、平泉というのはまさに古代都市から中世都市への橋渡し、中世都市の先駆的形態と言えるのではないかと思います。しかもこれは都城、平城京、平安京は中国の都城を真似て持ってきたものです。それに対して平泉というのは、まさにこの土地から湧いて出たものです。ですので、日本的な都市の形なのではないかという事が、分かって参りました。

まとめと課題

ちょうど時間になりましたので、まとめの所は、こんなような形で、今言ったような事を、繰り返して書いておきますので、後でご覧いただければと思います。最後に申し上げるとすれば、中世都市の形が分かっただけではなくて、日本的な都市のモデルをも提示しうる、そういう成果が平泉であったのではないかということが、一番大きい所かなというのが私の感じているところでございます。時間がオーバーいたしました失礼いたしました。これで終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

報告4

アジア史の新たな展開
ー平泉の歴史的意義ー

渡 辺 健 哉

本報告の本体部分については別稿として公表を予定しているため、本稿ではシンポジウムで報告した内容の要点を紹介する。

これまで報告者は（渡辺2018）と（渡辺2019）を公表した。前者では、（岩手県教育委員会ほか〔編〕2016）を利用しつつ、平泉＝辺境の都城、柳之御所遺跡＝為政者の居住空間、達谷窟＝境界を示す象徴、長者ヶ原廃寺跡＝都市内の寺院、白鳥館遺跡＝交流拠点、骨寺村荘園遺跡＝寺院の資産、とそれぞれを見立てて、東アジアのほかの遺跡と比定しながら、その歴史的意義を明らかにした。一方後者では、平泉研究において先駆的な役割を果たした藤島亥治郎の、研究の動機とその研究の背景にある「東アジアの視点」を明らかにした。いずれも、自らの研究テーマである、元の大都の都城研究を敷衍した研究と、常盤大定に代表される史学史的関心から展開させた研究といえる。

本報告では、平泉と同時代の東アジアの諸都市との比較を行った。

ただし、すでに「平泉を東アジア史のなかで記述する試みは新しい」と佐藤嘉広氏が喝破しているように（佐藤2013）、こうした視点は藤島亥治郎の研究でも言及されており（渡辺2019）、とりたてて目新しいものではない。

しかしながら、2011年6月の「平泉の文化遺産」の世界遺産一覧表への登録によって、平泉が改めて注目を集めたのは疑いないことであり、平泉を東アジア史のなかに改めて位置づけ、考察を加える意義が薄れるとは考えにくい。

そこで本報告では、妹尾達彦氏の述べた「境界都市（境域都市）」という概念に着目し、ユーラシア東方の「境域」で活動し、近年になって急速に研究が進展してきた遼・金時代の都市に注目し、そこから抽出される特徴を平泉に位置づけながら比較・検討を行った。

そのうえで、境界に都市が生まれる背景やそこに析出された特徴を整理し、そうした諸都市を中心に対する辺境と捉えるのではなく、むしろ相対化する視点の重要性を説いた。

【参考文献】

- 岩手県教育委員会ほか〔編〕（2016）：『アジアにおける平泉文化 資料集』岩手県教育委員会
 佐藤嘉広（2013）：「平泉の「都市」計画と園池造営」藪（2013）所収
 妹尾達彦（2018）：『グローバル・ヒストリー』中央大学出版部
 藪敏裕〔編著〕（2013）：『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
 吉田歆（2014）：『日中古代都城と中世都市平泉』汲古書院
 渡辺健哉（2017）：『元大都形成史の研究ー首都北京の原型』東北大学出版会
 同（2018）：「東アジアにおける平泉遺跡群の歴史的な位置づけ」『平泉文化研究年報』18
 同（2019）：「平泉研究の展開と藤島亥治郎」同上19

パネルディスカッション

テーマ 「平泉研究 ―平成から令和へ、課題と展望―」

- ・コーディネーター 佐藤 嘉広氏（岩手県文化スポーツ部文化振興課世界遺産課長）
菅野 文夫氏（岩手大学平泉文化研究センター副センター長）
- ・パネリスト 杉本 宏氏（京都造形芸術大学教授）
吉田 敏氏（山形県立米沢女子短期大学教授）
渡辺 健哉氏（大阪市立大学准教授）
北村 忠昭氏（公財岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター文化財専門員）
鎌田 勉氏（前岩手県教育委員会生涯学習文化財課文化財課長）

●自己紹介

●パネルディスカッション

テーマ1 「“平泉”の発掘調査の成果を振り返る」

- (1) 昭和～平成初期の発掘調査の思い出と平泉との関わりについて
- (2) 平成30年間の平泉遺跡群の発掘調査の成果について振り返る。

テーマ2 「世界遺産による新たな平泉の発見」

- (1) 「平泉」が世界遺産登録された経緯について
- (2) 世界遺産登録によって拓かれた研究の視点について

テーマ3 「世界へ発信すべき平泉」

今後、研究の進展に期待する点や、今後の調査計画や展望、そして「平泉」を世界へ発信していきたいことについて

〈菅野〉 ただいまより第3部のパネルディスカッションに入りたいと思います。進行はわたくし、岩手大学平泉文化センターの菅野と、岩手県文化振興課世界遺産課長の佐藤嘉広さんで担当させていただきます。ディスカッションのポイントは、テーマ1ということで「平泉の発掘調査の成果」を振り返り、テーマ2が「世界遺産による新たな平泉の発見」、テーマ3が「世界へ発信すべき平泉」。この三つのポイント、キーワードでここにいらっしゃる先生方にご議論いただきたいと思います。なお、会場の皆さんからも色々と非常に興味深いご質問をいただきました。なるべくご質問等も盛り込んでのパネルディスカッションにしたいとは思いますが、すべてを尽くせないことについては何卒お許しください。では最初に、ディスカッションに入る前に改めて、今日ご報告になった先生方、さらにパネリストの方々も若干増えましたので、それぞれ自己紹介といたしますか、ご自身がそもそもどういうご研究をなさっていたか、また平泉の研究に関わられたきっかけなどを、簡単にお話下さい。



【自己紹介】

〈杉本〉 京都造形芸術大学の杉本と申します。歴史遺産学科で教えているんですが、3年前までは宇治市で文化財の専門職員を33年間やっておりました。平泉との出会いは、平成元年から平等院の調査をして、復元整備をするというプロジェクトが始まりまして、平成元年に試掘をしたら、綺麗な洲浜が出てくるわけですね。洲浜っていうのは小石がバラバラ撒いてあるだけで、なかなか発掘調査しづらいし、京都でもそんな良い洲浜が発掘されてこなかったのが、どういう調査をしたらいいのかなあということに迷っていたら、当時、調査委員をやっておられた牛川先生が、ちょうど今、毛越寺を掘ってるから君見に行きなさい、ということで来させていただいたのが、平泉との最初の出会いです。その時は東北新幹線がまだ東京駅じゃなくて上野から出ておりまして、上野から乗ってこっちにやってきたことを覚えています。先ほど申しました通り、平等院の調査も大変長かったので、年に1、2回は平泉を訪れていますので、通算で40～50回くらいはこちらの方にはお邪魔しております。

〈吉田〉 山形県の米沢女子短大の吉田と申します。私ももともと古代の都をやっておったんですが、先ほど申し上げた通り、平泉文化フォーラム第1回目から関わらせていただきまして、20年経ちまして、できればこれで卒業させて欲しいなと思っておりますが、そうもいかないかもしれませんけども、そんなことで勉強させていただいております。よろしくお願いいたします。

〈渡辺〉 大阪市立大学の渡辺健哉です。今、報告させていただいた通りですが、私の研究は二つテーマがあります。一つは、今日お話をした遼と金とその次の元の時代の北京の歴史の研究をしています。それともう一つは、明治、大正、昭和にかけての日本と中国の学術交流史を研究していたということもあって、平泉の東アジアの位置付けについて研究をして、次いで藤島亥治郎先生の研究をしました。平泉との関わりは、僕は生まれが仙台だったものですから、中学校の遠足でジャージを着て、中尊寺を登ったのが思い出です。研究に関しては2015年度の共同研究員として、藤原崇人（現在、龍谷大学）さんと一緒に資料集の編纂に当たってから、15年度、16年度、17年度、18年度と来て、そして19年度ということで、まさか自分が子供の頃に遠足で行ったところの研究をすると思いませんでした。そういった形で研究を続けさせていただいております。

〈北村〉 午前中に発表しました岩手県埋蔵文化財センターの北村と申します。私はこれまで、埋蔵文化財センターで発掘調査を主に担当してまして、今年度から柳之御所遺跡の調査事務所に来て、柳之御所の発掘調査に携わるようになりました。神奈川県出身で、大学の調査を北海道で行った時の帰りに青春18切符で、平泉の駅に降りて平泉の駅前まで野宿したというのが岩手に来たときの最初の経験です。岩手で最初に訪れた平泉に、20年経って調査を担当することになり、フォーラムで発表をさせて頂くことになり、不思議な縁を感じております。よろしくお願いいたします。

〈鎌田〉 4月に再任用職員となりまして、県の教育委員会に採用されました。現在、埋蔵文化財保護の仕事をやっております鎌田と申します。ここで初めて登場した人間です。現役時代は、教員から始まって、埋蔵文化財センター、県立博物館、あと県教委と9年くらいずつ色々と仕事をして、発掘調査とか、あるいは柳之御所と平泉関係の展示、あるいは文化財保護行政等の仕事に従事してきました。平泉との関わりという点では、埋文センターに来て、初めての遺跡が柳之御所遺跡の緊急発掘調査、平成4年、今から27年以上前になりま



すが、これを機会に平泉との関わり、特に出土品の中で瓦というのがありまして、柳之御所、あるいは中尊寺で出てくる瓦の研究をずっとしつこくやっているというようなところなんです。そのあと何年かして、紫波町の山屋館経塚という12世紀の経塚遺跡の調査をたまたまやることになりまして、やはり奥州藤原氏の関係で、この経塚の勉強もするようになったわけです。久しぶりに試掘調査で県内回ってるんですが、一昨日から無量光院の工事立ち会いに来ておりまして、東稲山の景色を見ながら、懐かしく思っていたところです。

〈菅野〉 はい。ありがとうございます。それでは早速、本題に入りたいと思います。テーマ1に関しては進行を佐藤さんにお渡しします。

【テーマ1 平泉の発掘調査の成果を振り返る】

〈佐藤〉 岩手県文化スポーツ部の佐藤といいます。どうぞよろしくお願いいたします。先ほど菅野先生の方でも、ご紹介いただきましたように三つのテーマで討論を行って参りたいと思います。まずテーマ1としまして「平泉の発掘調査の成果を振り返る」というところから、5人の先生方にお話いただきたいというふうに思っています。まず会場のご参加の皆様からいただいた質問がございますので、ちょっとご紹介をさせていただきながら、それぞれの中でお答えいただければ、というふうに思うんですが、まず柳之御所の関係で幾つかご質問をいただいております。「橋が幾つか見つかったというんですが、どこに、どのようにあるのか」というようなご質問と、それから「道路がどうして作り変えられたのか」、というご質問です。それからもう1点は、堀の内部と堀の外部の関係というのはどういうものか、というご質問をいただいておりますので、この3点を踏まえながら、「ここ10年あまりの柳之御所遺跡の成果」について、もう一度ご説明いただければと思います。よろしくお願いします。



〈北村〉 宿題をいただいたようなので、そちらをお答えしながら、進めていきたいと思います。まず橋についてですが、柳之御所遺跡で確認されている橋は、午前中の報告の中でもお話した4つあります。資料の12頁の図（※本年報ではフォーラム時の説明資料は不掲載）をご覧ください。堀内部地区の図ですけども、図の下の方に76次・77次とあると思いますが、その右側に南に向かう橋があります。その北側の内側の堀が南北方向にあります。内側の堀に架かる東に向かう橋があります。外側の堀跡の東側は、地形的に落ち込んでおりまして、堀跡の続きが確認できない状況にあります。柳之御所遺跡の南東側には内側の堀跡に2つの橋跡があります。それと、午前中にもお話ししましたが、75次のところに、橋状の渡る施設があります。また、同じ図の左上に79次とありますが、土橋があります。この他に、79次の下に74次とあると思いますが、この部分で、橋とは断定できないんですけども、内側の堀跡に柱の痕跡が見つかりまして、橋の可能性がある場所が一つ見つかりました。それと、74次と書いてあるところから、斜めに細長くなっているところがあるのですが、そこにさらに古い段階の堀跡がありまして、そこにも土橋があります。あともう一つ、真ん中のところに池があるのですが、池にも橋が架かっておりますので、橋もしくは橋状の施設というのを含めると、全部で7ヶ所あることになります。外側の堀跡に関しては、79次で見つかった土橋があるのですが、内側の堀跡に関しては、中尊寺金色堂方向、無量光院の方向に向かう往来施設、要は橋とか土橋というものが見つかった

ていないというのが大きな課題としてあります。それと、道路についてです。昨年度の調査で二時期あることが分かりました。なぜ道路を作りかえる必要があったのかわからない状況です。今後も発掘をできるかという問題はあると思うのですが、道路跡の続きを探していき、この課題が解明できるようにしたいと考えています。

そして、堀内部地区と堀外部地区の関係ですが、堀内部地区が政庁、役所的なものだということが分かってきています。堀外部地区については、はっきりとしたことはわかっていません。これまでも断続的に発掘調査を行っていますが、堀外部地区の様相、堀内部地区との関係を解明する上でも、今後も調査をしていく予定です。堀外部地区には、堀内部地区と中尊寺金色堂を結ぶと考えられる道路があるということは調査結果としてありますので、堀外部地区には、堀内部地区と関連する何かしらの施設があると思います。見つかることを期待して、今後の調査を行いたいと思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。午前中の報告と合わせまして、特にこの10年で特筆すべき事項ですとか、柳之御所の遺構ですとか、遺物ですとか、何かもう少し補足等あればお願いします。

〈北村〉 遺構に関しては、午前中でもお話ししましたが、成果として次の3点になるかと思います。一つは、寺院関係の中尊寺金色堂や無量光院と結ぶ土橋などの往来施設が見つかったこと。二つ目に、中尊寺金色堂へ向かう道路跡が見つかって、時間差があること。そして最後に、第10回で報告した時に指摘はされていましたが、この10年間の調査成果によって、内側の堀跡と外側の堀跡に時間差があり、外側の堀跡が古く、内側の堀跡が新しいということがわかった、ということが挙げられるかと思います。それと、遺物に関しては、特異な遺物にはなるかと思いますが、「鳥獣人物戯画」に描かれているような擬人化されたカエルの絵が書かれた折敷片が見つかって、京都と結びつきのある文化があったということが挙げられますし、「題箋軸（だいせんじく）」と言って、今の日記という形で柳之御所の機能を説明できるような遺物が見ついているということが大きいかと思います。



〈佐藤〉 ありがとうございます。柳之御所遺跡は毎年度1000㎡ぐらいずつ調査を進めており、成果というのが単年度で見ると、それなりなんですけど、やっぱり10年積み重ねると、一気にいろんなことが分かってくるというようにお話をいただいたのかなというふうに思います。続きまして、ご質問いただいております。「長者ヶ原廃寺跡について分かっている部分について教えて欲しい」というご質問なのですが、発掘調査につきましては柳之御所遺跡だけではなくて、平泉町内あるいは衣川の流域、それから太田川の南、さらにちょっと離れたところで、いろんな平泉文化の関連、特に北上川流域の日詰などでも最近では色々出ているところですが、この10年で平泉遺跡群でどういう調査や、特に注目すべきものというようなことで、先ほどの長者ヶ原廃寺跡の分かっている部分も含めまして、鎌田さんの方からお話しいただければと思います。

〈鎌田〉 私が個人的に成果だと思っていることをお話したいと思います。まず一つは志羅山遺跡、泉屋遺跡です。平泉駅から毛越寺に向かう毛越寺街路があるんですが、街路の関連の発掘調査で埋文センター、町、教育委員会が調査したことで、かなりこの道路状遺構や区画溝という東西大路を中心とした町の区画が分かってきました、しかも杉本先生のお話にもありましたように基衡の区画、秀衡の区画という二つの区画がありそうだということが、平泉の街作りの様子から分かって来たということ

です。次に花立遺跡の調査です。花立廃寺という平泉文化遺産センターから、さらに南の方に行く一帯が花立遺跡というんですが、この遺跡の調査で瓦が大量に出て、私も瓦が好きなので、非常に関心を持ったんですが、これが何と法勝寺、杉本先生のお話にもあった通り、後白河天皇が造った御願寺で、この法勝寺にかなり技術的に近い、おそらく瓦の工人さんがやってきて、作ったのだらうと思うのですが、そういう法勝寺系の瓦から花立廃寺のあたりに12世紀の初め頃のお寺跡があったと考えられます。あと三つ目ですが、無量光院跡の調査が進みまして、無量光院の内容が分かってきたという大きな成果と、さらに無量光院の前進施設、この無量光院がおそらく秀衡がある程度晩年を迎えた時期に造ったということは推測されていたわけですが、その前に何があったのかということが、少しずつ無量光院の整備に係る発掘調査で分かってきました。今後の課題ではあるわけですが、関連しまして無量光院の近くにあります「伽羅の御所跡」という遺跡、秀衡らの常の居所とも言われている場所なのですが、毛越寺街路に共同の大きなパイプを入れる共同溝の工事に伴う発掘調査で「伽羅の御所」関連の、「伽羅の御所」ですかね、堀とか建物跡が出てきたということです。あとは中尊寺の「伝大池跡」という池跡があります。ここの調査がやはり進んでまして、2時期があり、それぞれ清衡期、秀衡期というのが二つあって、この状況が少しずつ解明されつつあります。こういう中で、平泉全体の居館の様子、神社、お寺の様子、町の人々の生活の様子、あるいは志羅山遺跡の中では銅の鑄造工房等も見つかっていますので、そういう工房等の平泉の全体像が少しずつ明らかになってきたことで、全体的な姿が明らかになりつつあるということです。

長者ヶ原廃寺の話ですが、特殊な礎石の建物の構造をしていまして、ひょっとすると古代から中世に繋がるお寺の構造を持っているのではないかという、解釈です。この孫庇（まごひさし）的なものは、礼拝をする施設というものが礎石の中に含まれているのではないかということで、類例等を検討してからさらに、長者ヶ原廃寺の特殊性、特徴というものを明らかにしていければいいのではないか、というふうに考えています。

〈佐藤〉 ありがとうございます。北上川の中流域、上流域の話をもう少し、つけ加えていただくことができますか。

〈鎌田〉 私も山屋館経塚という遺跡の調査をしましたが、やはり北上川流域に経塚遺跡が非常に多い。これは全国的に見ても、経塚が非常に集中している場所というふうに言うことができるわけですし、あとはここの仏像です。12世紀の仏像というものの見直しがされていまして、近年ですと、一関市の大東町洪民の東川（とうせん）院の仏像が昨年重要文化財になったんですが、この仏像というのが、金色堂の仏像と非常に似ているということ、文化庁の調査官が評価しました。今まで鎌倉期というふうに考えられていた仏像が12世紀だというふうに考えられてくるように、経塚とかあるいは仏像の見直し等を含めて研究されていくことと思います。北上川流域に、平泉文化の影響、直接の文化の影響を受けた遺跡が点在している可能性が非常に高くなって、平泉文化の広がりというもの、これからの課題ではあるのですが、もう少し広い広がりを持った、さらに豊かなものであったのではないかと考えられます。

〈佐藤〉 ありがとうございます。発掘からさらに仏像等も含めたお話をいただいて、平泉文化の広がりというものここ10年で、また分かってきたというようなお話をいただきました。続きまして杉本先生からお話しいただければと思うのですが、10年と限らず、20年、30年でも構わないんですが、発掘成果で特に印象に残ってることを一つ、そしてもう一つ質問にも1点お答えいただきたいですけれども、「発掘調査などの成果の中で、平泉の庭園は京都の浄土庭園を導入したと言われておりますが、庭園の流派には、作庭記流と仁和寺流があった旨の記述を目にしました。仁和寺流真言宗系の庭園の

特徴について、また京都での実例があれば教えていただきたい」というようなご質問をいただきましたので、合わせてお願いできればと思います。

〈杉本〉 まずここ30年間ぐらいの平泉を見ていて、それはやっぱり柳之御所が見つかったときの、インパクトが大きかったです。私がちょうど来た時も発掘調査をしておられて、発掘をしている柳之御所を案内していただきました。保存問題も非常にホットなもので、すごくよく覚えています。それと自分の興味も含めて考えると、やっぱり無量光院の調査がすごく進んだというのが、30年間の中の思い出深いものです。それは「悉く宇治の平等院を模す」と書かれている実態がはっきりしていったわけです。当時の平泉の考え方は、京都と似ていることをポジティブにとらえて、そこにフォーカスしながら平泉を評価してゆく、という平泉文化のとらえ方だったと思うんですけども、実は無量光院を調査していくと、ここも似てる、あそこも似てる私も言いましたけど、実は似てないところの方が多くて、似てるところを探すと、こういうところがあるね、という話なんです。ポイントは、似てはいるんだけど全体で見るとどこまで似てるのかが実はよくわからない、ということなんですね。これは、平泉の選択が働いて、そういう形になっているということです。ということは、無量光院の調査の中で明らかになってくるものは、何をもって「宇治の平等院を悉く模す」と言わせるのか、という平泉の主体性というものなんです。そういう部分が非常に明確になってきたなと思っています。だから、今は京都と似ていることをポジティブにとらえるよりも、どの部分が実は京都から来ていないかという平泉の主体的な選択をとらえるところにフォーカスするように変わってきたところがあると思っています。私個人からすれば、無量光院の実態が分かってきたということは非常に大きなことだと思っています。

当時の作庭がどのような形で行われたかというのは、仁和寺流とか何とか流というのは、ちょっと私はあまりよく知りませんが、それはもう少し後の時代の流派のことだと思います。実は平安時代の中で、作庭実務者の実像はほぼ見えませんが、誰が作ったかは分かります。大体こういったものは、名前が先に出てくる。大体あの建物系の人達の、いわゆる大工の棟梁の名前の方が先に出てくることが多いかと思いますが、作庭者が名前を出してくるというのは大体中世以降であります。平安時代ですと、橘俊綱が『作庭記』というものを書いていて、あたかも彼の書いたことが広く、当時の中で一般的に作庭者として、流派的なものとして語られることがありますが、それ自体もよく分かりません。実は平安時代の作庭者がどのような形で、どのようなことをしていたのかという実像は、これから、平安時代の状況のよい庭園遺跡を具体的に調査していく中でしか、おそらく明らかにならないのかなと思っています。そういう意味で、実は平泉の庭園調査というのはとても有意義だと思います。残念ながら京都の中で、平安時代の庭園を大きな面積で発掘するということは、平等院もほぼもう無理でして、やっぱり部分的な発掘しかできないとか、平安京内の例えば法勝寺も、法成寺も小さなトレンチでの、池の片隅を捕まえている程度のことで、どのような景観を当時作り上げていたかというその技術的な部分は分かりません。これから、そういうことに向かっていかなきゃいけないのかなと思っています。

〈佐藤〉 ありがとうございます。作庭については、まだまだ課題が掘らなければわからない部分が多い、というようにお話をいただいたのかなと思います。続きまして吉田歓先生にお願いしたいと思います。やはり同じように、ここ10年20年30年で、発掘成果で特に印象に残られていることが一つと、あとご質問をいただいております、「藤原氏の初代、2代、3代と発展してくるわけですけども、その全体としての都市計画のようなものをどう考えたらいいか」というようなご質問ですので、それも含めてお願いできればと思います。

〈吉田 敏〉 まずこの20年30年の調査の印象ということで、最初にざっくりお話しさせていただきますけれども、私の関心からいうと、やはり藤原氏の実態というのが、本当に積み重ねで分かってきたというのが、やはり大きいのかなと思います。私も文献史学の端くれなんですけど、どうしてもこの文献史料に描かれてるもので、すべて分かった気になってしまうんですけども、やはり実物どおりで、実態が見えてくると、先ほどのかわらけですとか、堀ですとか、あとは志羅山あたり、毛越寺の前の区画割りの町割りの様子なんかは、ああいうのはもうまさに文献史料では分からない部分だったわけですので、研究上大きかったのかなというふうに感じています。

あと、ご質問いただいた都市計画についてですが、杉本先生もご講演の中で、「都市計画と計画都市では違う」というお話で、私も全く同じことを感じておりまして、つまりグランドデザインを出して作る都市と、それから個別に計画を積み重ねながら最終的に大きくスプロール的に大きくなっていくという、ざっくり言えば二通りあるのかなと考えます。もちろん何となくできたというのものもあるんじゃないかと密かに思っていますが、おおよそ為政者たるもの、何となく、というのはないという前提に立てば、そういうことなのかなと思います。そうすると、平泉の場合どう捉えるかということなのかなと思います。先ほどは初代、2代、3代にかけて、だんだん広がって、あるいは計画的に作られてくるという話を紹介しましたが、最初の柳之御所と中尊寺の間を道で結んでいることは大体調査上分かってきておるようですが、あれもある意味、道路自体を計画的に通してるんだという前提に立てば、それなりの計画的な造形物、おそらく道路の両側に何らかの施設が、あるいは家来たちが住んでいる可能性もあるでしょうし、そういうことを考えると、あれもミニマムな意味では計画都市ともいえると思います。ただ、先ほどから言っているように、つまり完成形があるのかなのかというのがありますし、グランドデザインをもって行なうかどうかという点が、一つ見分けるところかなというふうに考えております。段階に応じて見方、評価も変わるんだろうなと思っております。

〈佐藤 隆〉 ありがとうございます。平泉の都市を考える上ではいろんな見方が必要だというふうなお話をいただいたということかなと思います。続きまして渡辺先生でございます。やはり修学旅行で来られていると、平泉をずっとご覧いただいた方かと思いますが、特に印象に残られている発掘調査などをご紹介いただくとともに、もう一つ、ご質問いただいております、「平泉の発掘で中国陶磁器などが出ていたり、陶磁器以外にも色々中国の文化というのは見受けられてるわけでございますけれども、これは直接入ってきていたのか、京都などを經由して入ってきていたのか」というご質問でございますので、あわせてお願いできればと思います。



〈渡辺 隆〉 質問の部分、ちょうど僕が言いたかったことと重なります。ここ30年の平泉の研究の進展と平行に、中国史もここ20年ぐらいの間に非常に大きく変化を迎えます。それまで中国の王朝、中国の歴史というと、例えば絢爛たる貴族文化の唐王朝とか、あとは最後の清朝とか中国を一つの王朝として、単体として考えることが多かったんですが、この20年ぐらいの間に、9～13世紀の研究は、ただ中国にとどまるのではなくて、ユーラシア東方とか東部ユーラシアという言い方で、ある種中国を相対化する形で、今日お話をしたような遼とか金といったものの研究が深まりました。その中の一つのジャンルとして、海域アジア史という分野が大きく進展したのもこの時代の特徴だと思います。

この30年の大きな研究、発掘成果という点で、私自身が色々読ませていただいたり、見せていただく中で、中国史なので、見ていて、へえと思うのは、輸入磁器、または磁器のかけらがかなり出てきています。浙江省の杭州の近くの龍泉というところの龍泉窯のものだと思いますが、今日の岩手大学の学長の岩渕明先生のごあいさつにもありましたが、岩手大学でその磁器の成分分析ということをして、それがどこから出てるのかということの研究した本が、ちょうど今年出版されております。今日も来られておられます藪敏裕先生を中心とする、岩手大学平泉文化研究センター監修の『貿易陶磁器と東アジアの物流と平泉、博多、中国』という研究書で、いろんな角度から研究なされています。僕がすごく面白かったのは、やっぱり文理融合といいますか、岩手大学で文系と理系の力を結集して研究をされたということです。

先ほどの質問の磁器がどこから来たかということ、それは博多を経由してきているわけです。博多から平泉にきてるということが、そのルートの解明などもすでにこうした研究でされていて、他にも銅銭も発掘で出てきておりますので、磁器が出てきたり、その銅銭が出てきたり、中国のものが海をつたって、この平泉に来ている。加えて磁器の効果についても、それを例えば、柳之御所のお座敷に飾って、どうだすごいだろう、という形で見ながら、そしてかわらけでお酒を飲んだわけです。そこに宴会儀礼が発生する。つまり君主が中心となって、臣下がお酒を飲んだりする中で、君臣関係の、いわば秩序というものがそこできちんと編成される。こうした一つのものを通じて、世界が形づくられていくというのが分かると思います。それが近年の発掘の中で、中国産のものが出てくるというのは、僕自身非常に興味があるので、これがまたどういう形で、もっと出てくるのかなというのは、白磁、青磁、そして銅銭、そういった中国産のものが出ている点は非常に興味があるので、これからも見ていきたいと思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。やはり平泉、及び周辺域も含めまして発掘を日々続けておられて、そして成果が色々な形で分かって積み上げられてきているというようなことをお話いただいたなと思います。

【テーマ2 世界遺産による新たな平泉の発見】

〈佐藤〉 それでは続いてテーマ2の方にいきたいというふうに思っております。テーマ2というのは「世界遺産による新たな平泉の発見」というテーマでございます。午前中に田辺先生の方からもお話をいただいたところでございますが、2011年、平成23年に平泉の世界遺産登録が実現したというところでございます。簡単に少しだけ経過を私の方から紹介させていただきたいと思います。付属資料に簡単な年表をあげさせていただいておりまして、世界遺産の関係等、柳之御所遺跡との関係を対比して見るように書いているところでございますけれども、「世界遺産登録に向けた取組」というところで、まさに柳之御所遺跡が「平泉館」にあたるという、そして保存するというような辺りが決まった頃から、世界遺産登録に向けた取組が始まったというのがご覧いただけるかと思います。今世紀、21世紀に入りまして、平泉の文化遺産が世界遺産の暫定リストに登録されたというところでございます。世界遺産の正式名称は「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」というふうに日本語では言ってるんですが、岩手県内ではそういう長い本文をほとんどの方はあまりご存知ないと思います。一般には、この「平泉の文化遺産」というようなことで、通っているところでございます。その後、2007年、専門機関「イコモス」が現地調査をして、登録に備えたのですが、2008年、第32回世界遺産委員会では登録延期という決定がされました。そこで再チャレンジということで、もう一度推薦書を出し直して、またイコモスの現地調査を受けて、2011年に登録が決定した

というところでございます。なお今後も取組を続けるというところで、また再び暫定リストに登載されて、今その取組を進めているというところでございます。

前置きが長くなってしまったのですが、世界遺産の取組が、そのような形でほぼ20年続けられてきて、その間、いろんな各学問分野の先生方からアシストをいただいていたというところでございます。例えば今回、パネリストとしてお出でいただいている3人の先生方にも、このフォーラムという場のみならず、世界遺産に関わる会議、専門家としての会議にもご参加いただいたところございまして、その中でテーマ2としましては、世界遺産の動きとともに、その気付かされた平泉、あるいは発見された平泉、というようなものにつきて、それぞれの専門のお立場からお話いただけるといいかなというふうに思っております。最初に吉田先生よろしいでしょうか。それでこれもまた質問をいただいています。「藤原氏は、宗教儀式の際、貴族的であったかどうか」というご質問と、それから「院政と平泉の開始というのが、ほぼ同じなんだけれども、そうした社会背景、あるいは相関というものをどう考えたらいいか」というような二つの点を含めまして、日本史、日本都市史のお立場からお話しいただければと思います。

〈吉田〉 世界遺産との絡みということを先に感じているところをお話させていただいた後に、ご質問等も答えたいと思いますけれども、世界遺産をそれ以前とそれ以後、どう変わったかということですが、基本的には変わらないでは思っておるんですが、ただある種の段階差はあったかなというふうに思っております。研究の幅がやはりかなり大きくなったといいますか、どうしてもそれ以前は、全国に目を配るとか、あるいは中国、場合によっては北方の世界、あるいは西南諸島等の関係でどうかという視点が一つ潮流としてあったかなと思います。その成果というのは大変実り多かったし、それをベースにしているからこそ今日があるんだというふうに思っておるんですが、世界遺産っていうものをちょっと意識し始めた段階で、今度はもうちょっとワールドワイドになってきたと言えると思います。例えば、私でしたら都市を考えるにしても、東アジア、あるいはひょっとしたら欧米との都市の比較、あるいは植民地のそういったものをちょっと意識するようになったりして参りましたし、そういう意味でもかなり視野が本当に広がって、それに合わせて研究に携わる皆さんも本当に多士済々になっています。先ほどの渡辺先生の話がありましたけれども、本当に遼・金、それからあとは理系の知識も活用させていただいて科学分析にまで及んでくるわけです。そういった意味では、大変私も勉強させていただきましたし、研究状況としてはかなり格段に上がってるんじゃないかなというふうに感じております。

その上で質問2点いただいております。藤原氏の最初は宗教儀式の際に貴族的か、ということなんですが、これがなかなかちょっと例によってよく分からないところです。文献資料だと、例えば千僧供養と言いまして千人のお坊さんを供養したり、あるいは中国に物を送って、供養させたり、あるいは中尊寺に、お坊さんの僧房ですね、住宅が300、毛越寺に500ぐらい、合わせて800。だから、千人近いお坊さんがそこにいた可能性があるわけです。そのお坊さんたちがただ何となく暮らしていたとは思えないので、事あるごと、仏教行事のときに一肌脱いでもらってたはずなんじゃないかなと思われます。そういった意味では、都で行なっているような宗教儀礼、仏事なんかも似たようなものを行っている可能性はあるかなと思います。『吾妻鏡』以降の資料でも何々会という齋会、法会をやっている資料がありますのでそういうものはしてるのか、など。ただ、これももう斉藤利男さんたち、菅野成寛さんも言ってらっしゃる通りで、全く都と同じものを持ってきてるかと言われると、大分やっぱり違って、先ほどの密教系のものがないとか、塔がないとか色々ご指摘いただいております通りで、都の貴族がやってる、あるいは院が、上皇がやってる儀式と同じものをそのままやってないという側

面もあるので、その辺をどう評価するかというのが、一つあるかと思っております。

二つ目のご質問が、院政期と平泉のスタートがほぼ同時だということで、これも私などよりも、それこそ大石直正先生、入間田先生あたりにご解説いただいた方がいいのかなと思うんですけど、これもちょっといろんな考え方があるかと思います。いろんなタイミングがあって、ご存知の通り前九年、後三年合戦というのを経てくるわけです。今までですと、どちらかという初代清衡が源義家を体よく都に追い返して、陸奥、東北地方の最終的な勝利者として治めたんだというイメージが強いかなと思うんですが、やはり20年、30年の研究で、そう単純でもなさそうで、貴族の日記だと、清衡が何やら悪だくみをしているから気をつけなきゃいけない、という記事なんかもあったり、そうすると必ずしも清衡ひとり勝ちというわけでもないし、上皇、院政とべったりくっついてたかどうか。その辺りもう少し検討していく必要があるのかなとは思っております。ただ私個人の考え方ですが、もちろんやはり偶然に見えても、意外と因果関係があるのが、歴史の面白さなので、たまたま一緒にスタートをしてるには多分それなりのコネクションがあったのかなと思っており、清衡は平泉から一歩も出てないのか、清衡自身が京都に行ってるかどうかは別にして、使者が行っても不思議はないわけですし、文献史料にも出て参りますので、そういう意味では完全孤立して、ここに閉じこもっているわけではないでしょうから、我々が考えてるようなものではない、何かルートを持っていて、それが上手くマッチして、平泉の歴史に繋がったんじゃないかなと、無責任に考えてるんですけども、その辺は諸先生方にご議論いただきたいなというふうに思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。続きまして鎌田さんをお願いしたいんですが、やはり平泉世界遺産への歩みの中では、従来以上に平泉の仏教というものが強調されて評価されたと思いますけれども、先ほどテーマ1と少し関連するかもしれませんが、それから発掘で、柳之御所でもいろんな仏教関係の資料とか出ていて、そうしたものと、先ほどいただいた吉田先生には文献の立場から主にお話いただいたんですが、ここは考古学の立場から、仏教儀式、宗教儀式というんでしょうか。そういったあたりで少しお話いただければなというふうに思います。

〈鎌田〉 柳之御所遺跡の中の仏教的な遺構とか遺物、あるいはそういうものの関連するものということなんですが、一つには火舎、鉄でできた火を燃やす器ですが、火舎と花瓶（けびょう）、花瓶のことなんですが、仏具としては「けびょう」と言います。火舎と花瓶は高さが20cm、30cmぐらいある大きなものなんですが、柳之御所の穴の中から一括して出てきたという事例がありまして、これは私もかなり考えてみたんですが、なかなか難しい。柳之御所内部だけで、あるいは堀内部地区の中だけで考えるのは非常に難しいのではないかいうふうに感じています。位置的に言いますと無量光院がちょうど一直線上に見える場所でもありますし、この柳之御所遺跡と無量光院との関係の中で、こういう仏具的なものが穴に埋められて出土していたというようなことなんだろうなというふうには解釈しています。その目的というのが一体何なのかというのは、難しいところだと思います。この輪宝というもので銅の円形の板に「楸（けつ）」という真ん中に打ち込んだものがありまして、これも地鎮遺構というふうに言われてるんですが、その近くには大きな建物が柳之御所遺跡内にはないこと。一体何に対する地鎮なのかというふうに考えてみますと、これもやはり無量光院との関係であると思われる。実は無量光院の張り出し部分があるんですが、そこに柳之御所側には大きな柱を立てた遺構が三本見つかってまして、三本分と一つに直接結びつくような遺構がありました。これもやはり柳之御所遺跡では、内部だけで説明できない。無量光院との関係の中で説明できるということで、柳之御所遺跡内では、ここに仏像があるとかそういうことではなくて、やはり無量光院との一体性というのが強く意識されていた場所、遺跡だろうというふうに思います。いずれ柳之御所遺跡の中で言いますと、

宴が頻繁に行われた遺跡ではあるのですが、同時に、常に綺麗でいようと、清浄な空間でいようとした意識がかなり見受けられます。例えば井戸状遺構、井戸遺構というのが、堀内部地区で最新の総括報告書では70基くらいある。堀内部だけで3mから4mの深さの井戸が70基もある。これは頻繁に井戸を作り変えている。しかも使い終わったものはどんどん埋めてしまう。その埋める過程の中で、宴会で使われた瓦だけを捨てているというようなことで、やはりこの宴会で生じた穢れを井戸の中に封じ込めるといような意識があって、そういうのも一つの当時の柳之御所に住んでいた人々の精神のあり方を示してるんじゃないかなという気がします。堀も一方では軍事目的、武士の居館としてふさわしい立派な堀ではあるんですが、もう一つの見方としては、この空間の中に穢れを入れない。そういう外部と、この内部を隔てるこの清浄な空間でいようとするような意識がこの中にあるのではないかと、柳之御所遺跡の内部だけではなくて、平泉遺跡群全体でもそういう遺構が幾つかあると思いますので、そういう祭祀的な、あるいは呪いのものを再検討してみると、平泉の都市のあり方というか、街のあり方というのが見直されてくるんじゃないかというふうな気がします。

〈佐藤〉 ありがとうございます。ただいまお話を伺いますと、堀内部は浄土みたいな綺麗、清浄浄土、清浄な意味での浄土というような感じにもお聞きしました。続きまして、世界遺産はやはり日本の中だけではなくて、世界の視点から評価されなければならないということで、特にアジアの中でどう見られているかというふうな辺りについても、今までも色々あったんだと思うんですが、世界遺産とともに、発展してきた部分の一つなのかなと思うんです。渡辺先生の方からお話いただきたいと思います。また、一つ質問も来てますので、実はこの質問は杉本さんの方にいただいているんですが、渡辺先生の視点から、「なぜ平泉は塔の文化を受け入れていないのか」ということについて、渡辺先生は白塔、慶州の白塔のご紹介もしていただいたんですが、そういった辺りも含めて、少しお話いただければなというふうに思います。

〈渡辺〉 世界遺産になってからというか、その前後あたりでの大きな変化といいますと、やっぱり決まったことによって起爆剤になっただろうと、すなわち研究領域が多分拡大したということと、それと併せて研究が進化したということ。具体的には、例えば、いわゆる劉海宇先生がされるような仏教の仏典に関する研究や、そして藪先生やこちらの佐藤さんと劉先生もされたような園池に関する研究。そして横におられる吉田さんがされたようなアジアの中での「都市としての平泉」といった形で、研究領域が大きく拡大したというのは、やはり2011年がきっかけだったんだろうと思います。その一つの到達点といいますか、一つの成果が2013年に汲古書院から出た藪先生編の『平泉文化の国際性と地域』です。これは実は別な大型のプロジェクトいわゆる「寧波プロジェクト」と呼ばれるものの成果ではあるわけですが、タイミング的にそれまでの成果が大きくまとめられたという意味では、アジア史の中の平泉という点で、エポックメイキングになるのだと思います。研究領域の大きな拡大、そして、これまであったものについてもう一度掘り下げてみるという、研究の深化というのは、世界遺産にこの平泉が登録されたことによって、新たに学術的に大きく変化したことだと思います。

その唐の文化っていう体制、日本の人のある種の憧れとしての唐の文化とあるわけですが、この時代はもうすでに唐は減んでるわけですので、どちらかっていうとよく言われるのはその後の呉越です。中国の南の方の、呉越の文化なんか受け入れてる。ですから唐風というか…

〈佐藤〉 すいません。タワーの方の「塔」です。

〈渡辺〉 なぜ「塔」の文化を受け入れていないか、そっちですか。すいません。そっちは僕は分かりません。平泉がなぜ塔の文化を受け入れてないか、それはちょっと…。今日、白塔を紹介しましたが、遼王朝が支配した地域では、今日の白塔は目立ったものとして紹介しましたが、じゃあなぜ

平泉に「塔」はないのかというところ、宗派の問題にもかかわってくるんじゃないかと思うので、これは別な方に答えていただいた方がいいと思います。

〈佐藤〉 ありがとうございます。それでは杉本先生からお話いただきたいのですが、実はもう一つ、平泉というのは京都よりも宗教勢力の影響が少ないような印象がある。特に密教の影響が少ない印象があるというようなこともございます。それから、もうすでにお話いただいたところでございますけれども、平等院と無量光院、あるいは平泉との違いというような辺りも、少し含めていただきまして、世界遺産と平泉、そして杉本先生はご紹介ありましたように、もうすでに1994年に京都、宇治が世界遺産になってございまして、世界遺産にも携わられていられています。そういったことも含めて、少しお話いただければというふうに思います。

〈杉本〉 何を話そうかなと思って今ずっと考えてたんですが、実は平泉が世界遺産を目指していく中で、平泉の世界遺産の目指し方というか、そもそもその構成資産がそうなんですけれども、景観にウエイトを置きながら進んでいったというのが一つの大きな特色だと思っています。この背景にあるのは、構成資産の中に浄土庭園があって、毛越寺もそうですし、無量光院もそうですし、大池もそうなんですけど、要は極楽浄土の姿を景観的に再現していった伽藍というものがあるわけです。そういうものを取り扱うということは、通常の遺跡を取り扱うのと大分違うということなんです。通常の遺跡を取り扱っていく場合、我々は発掘調査した遺跡を平面図として二次元的に理解をして、これがこうなってる、ああなってる、というようなことで大体物事を考えていくんですが、実は浄土庭園を取り扱う場合というのは、もう完全に立体的に考えないとだめということです。平面的に考えるのではなく、やっぱりその場所の中で、その遺跡がどのような立体景観構造の中にあるか、どんな景観的雰囲気の中にあるかということがとても重要なんです。平泉は、実はそこに大きく注目しながらやってきている、ということがあると思います。それは単に浄土庭園だけにとどまらず、この都市そのものがいわば仏国土を表わしているということですから、平泉の自然景観の中に宗教、すなわち仏教思想を景観仮託していくわけです。自然景観の中に、その思いを仮託していくわけです。そういうことも含めてそれは全部立体的に見ていく、現在の景観の中でそれを感じ取っていくとか、見ていくという作業になっていくわけです。これが大きいことだと実は思っています。学術面からちょっと離れますけれども、結局、立体的に見るということは、過去の景観というのは分からないので、現在の景観で見ていくわけですね。ということは、結局、歴史というものを現在に引きつけてくる動きにもなっています。すなわち浄土庭園のような景観を構成要素とする遺跡を見ていくということ、それはそのまま現在の景観って、じゃあどうなの？と我々に問いかけてくる。いい景観なのかどうなのかも含めて、我々に突きつけてしまうようなことなんです。平泉を見ていて思うのは、浄土庭園とか浄土の景観から始まっていて、現在の我々が住んでいる景観そのもののよさとか、それをいかに継承させていこうかということ、計画としては景観計画として立てられているわけだけれども、我々の生活の中にやっぱり引きつけて来る、その景観をとらえたことによって、現在のまちづくりの具体的な姿に結びついていったところが、私は平泉の場合は非常に大きいかなと思っています。なかなか他にないんじゃないですかね。ちょうどいいことと言ったら語弊がありますが、文化財保護法が改正されて、文化的景観というものが新しい文化財のカテゴリーになったときに、骨寺が日本で2番目だったと思いますけど、重要文化的景観地区に選定されています。そういう大きな動きも、平泉が世界遺産を目指していく時に、平泉にあった構成資産のそのものが、その景観に着目しながら、やっぱり動いていくものであったので、ああいう本寺の重要文化的景観にもきちっと波及をしていったというような広がりを持ったんだろうと思っています。それが実は私が見ている平泉のことの一つです。

ご質問なんですが、平泉に宗教勢力が少ないかどうか分かりませんが、密教色が少ないというのは以前からいろんな先生方がおっしゃられてるし、私もそもそも毛越寺、無量光院を法勝寺とか、平等院と比べた時にも全然違うなというふうに思っています。平等院にもかつてたくさんの密教堂がありました。五大堂も愛染堂も不動堂もあります。塔もあるんですけど、塔の中に安置されているのは、密教関係の諸仏というようなことで、大体密教色が強いんです。だから密教色が平泉の諸堂、お堂の中にないからといって宗教勢力が弱いのかといったらそういうことではなくて、私も宗教思想を専門にしているのではないので分かりませんが、一般的に貴族の宗教に対する考え方は、「現世安穩、後世善処」で「現世安穩」を密教でやって、「後世善処」を浄土教でやる、という感じなんだと思います。ということは平泉は、「後世善処」がとても大きくなっているということで、「現世安穩」を何でやったかということだと思います。「後世善処」は顕教の部分が大きく、「現世安穩」まで顕教でやっているのか、違う形になっているのかというのは、ちょっと私には分かりませんが、その辺をこれから色々考えていただけたらいいんじゃないかなと思います。平等院、無量光院の差というところも、実はそもそも平泉が持っている仏教のあり方と京都での仏教のあり方、あり方という表現の仕方なのかもしれませんけど、その部分をもう少しきちんと比較する中で考えていけたらいいのかなというふうには思っています。

〈佐藤〉 ありがとうございます。やはり京都、あるいは宇治と平泉を両方見た場合に、その宗教性、あるいは庭園も含めて平泉と京都の違いというようなものも色々具体的なお話をいただけたらなあとこのように思っているところでございます。今、最後に杉本先生がまだまだ研究すべきところがあるというお話をされましたが、県では「平泉世界遺産」柳之御所のガイダンス施設の建設を現在進めておりまして、ちょうど2年後の令和3年度中にはオープンできると思います。場所は前に柳之御所資料館があった場所でございます。今、道の駅があるところの向かいになるわけですが、そういった新しくできた施設で、今いただいたような課題も続けて検討をできればなというふうに思っているところでございます。それではここからの司会は、菅野先生と変わりたいと思います。

【今後の平泉研究への期待】

〈菅野〉 少し今までの論点、先生方からいろんな話いただいたわけですが、ちょっと私なりに整理させていただきますと、今日の最初の田辺先生の基調講演からでもそうですけれども、30年と20年、それから先ほど10年という10年刻みの言葉がしばしば使われました。考えてみると、30年というのは柳之御所遺跡の大規模発掘調査から31年、1988年、昭和63年に始まった調査ですね。あれが非常に大きなインパクトを与えたというのはもう先生方、この会場にいらっしゃる皆さん、よくご存じのことと思います。それからの10年というのは、前半は保存のための、後半は保存が決まってからの様々な動きがありました。それが一段落して今年20周年をむかえるこのフォーラムが始まった。これは世界遺産に向けた、一連の動きでしようが、非常に全国的にも珍しいですね。毎年1回、雑誌を出してフォーラムを開催するのは。この20年の研究は何だったのか。30年をまとめるというのも大変だし、この20年をまとめるというのも大変ですが、ただその世界遺産にむけた議論のなかで、一つ仏国土という問題が出てきた。それからアジアの中での位置づけという問題が出てきた。この仏国土の問題、あるいは浄土の問題や



アジアの中でという問題意識は、30年前は必ずしも、明確には出てなかった論点なのかなと私は回顧しております。全くの私事ですけれど、昭和63年が大規模発掘ですが、私が岩手大学に来たのが昭和61年ですので、何か私自身の30年史を今伺っているような気持ちです。非常に感慨にふけりながら、先生方のお話を伺っております。改めて、今後の平泉研究に対する期待などありましたら、お願いします。今までの繰り返しでも結構です。これが今日における最後の発言の機会だと思って、思いのたけを語ってください。

〈杉本〉 本当に平泉は世界遺産に取り組むことによって、深い研究、広い研究が可能になった分だけ、結局、課題はたくさん出てきたというか、分からない部分がたくさん析出されてきている、というまだ過程の中にいるんだなということがあります。これからいろんな研究をされていく中で、解明もされていくんだろうと思っています。

それとは全然違う視点で平泉の、今後というんですかね、学術研究から少し外れるかもしれませんが、思いを述べさせていただきますと、私もかなり昔に「古都京都の文化財」で世界遺産に少し関わらせていただきました。あの頃は結構楽でして、今みたいな大変な感じで世界遺産になるわけじゃなくて、文化庁さんから「次は宇治も世界遺産になるからね、準備しといてね、お金幾らだよ」と言われて、「はい分かりました」です。お金を予算に盛り込んだというぐらいのことで、意外と昔は簡単だったんですけれども、実はそれが今から考えると、あんまりいいことじゃなかったなと思っています。要は世界遺産に何のためになるのかとか、なっってどうするのか、とかという議論はほぼないまま、実は世界遺産になった。宇治は特にでした。平等院と宇治上社が世界遺産になっていくんですけども、議論もないし、研究もないんですよね。要はレポートを書いて、コンサルさんが英語に訳してくれて、みたいな話。そういうことなんです。やっぱり世界遺産に何でなるのか、何でなりたいたいのか、どうするのかという問いはちゃんと持っていないと、取組自体の意味というものが分からなくなるわけです。学術的に進めていくということだけではなくて、それが実際生きている、この土地に生きている皆さんの、何に、どのような形で作用して、利益としてもたらされるのか、ということなのだと思います。私はだから観光ということを言いたいわけではなくて、それはある一面にしか過ぎないと思います。平泉を見ていると、平泉の世界遺産の特性は、やっぱり浄土教の世界、今から900年ほど前にこの土地で平泉という都市を造った人たちが、仏教を大きく評価する中で仏の救済を求める。そういう意味合いの都市を造っていったわけです。仏の救済は人間側から見てみれば「現世安穩、後世善処」ということになるんですけれども、やっぱりそれは、現代的に言い換えると、「平和に暮らしたい」という言葉に行き着いてゆくと思います。平泉は、実はコンセプトの中に持っているものはそういう精神の部分が含まれているものだろうなと思っています。よく考えてみますと、戦後すぐにユネスコができたときに、ユネスコ憲章の前文というのがありまして、皆さんよくご存知かもしれませんが、なぜ世界遺産なのか、というのはこの前文の中のあるフレーズに非常に大きく依存しておりまして、「戦争は人の心に起きるものだから、人の心に平和の砦を築かなければならない」という言葉があるわけです。要は世界の人たちがお互いに分かり合うことで、これからの戦争を回避していく。全人類が平和に生きていけるということを希求したわけですね。そういうことで考えてみると、平泉の世界遺産というのは、そことすごくよく響き合うことができる。コンセプトの中にあるんだろうなと思っています。それは、どんどん言っていかなきゃいけないんじゃないですかね。世界の宗教都市とか、たくさんあると思いますが、そういう都市も自分たちが平和に生きていくということを中心にしながら、宗教施設を造っているわけですね、やっぱりそういうところを、表に出していくということとはとても実は重要なことだと思います。当時の平泉の実態は学術的に調査研究していくということ

になると思いますけれども、そういう発信というものが、もう世界遺産になってるわけですから、必要なかなと思っています。比べてみると京都はあんまり発信してないんですよね。世界遺産の発信は低調です。何かそういう問いがないというのはちょっと寂しいのと、そういうことを少し期待をしながら、背景になっている部分を学術的に深くいろんな方が今後も続けていただければいいなと思っています。

〈吉田〉 続いて私も簡単にコメントだけさせていただきたいと思いますが、やはり、20年30年スパンでやって参りましたけども、一番思うのは、月並みですけど、継続は力だなということです。我が身に引きかえても、例えば20年、これを毎年この会をやって、作り、発行し、ということを考えただけでも、ちょっと私の細身であと3年が限界かなと思うわけですけども、そういう意味では本当に頭の下がる思いです。そういう形でだからこそ、本当に多種多様なジャンルの研究が積み重なって、新しい課題もどんどん出来てくる。さっきの塔の話じゃありませんけども、初代清衡が中尊寺を造る時に、ご承知の通り一基の塔を関山に建てたというところから、そもそもスタートするわけですが、そのあと、その塔がどう作られてどうなっていったのか、よく分からない。ああいうメンタリティー、宗教面、彼にとってどういう仏教像があったのか、あるいは、そばにどういうお坊さんたちがブレンとしていたのか、という辺りが大変問題になってくるでしょうし、今までももちろん議論を重ねられてきてるわけですから、そういう意味でもまだまだ課題がいっぱいあるかなと思っております。私の町割り絡みに引き付けると、やはり毛越寺から東に伸びる、碁盤目状に近い町割のあたりも、調査次数は随分なさってて、報告書も分厚いのが出ていたりいたしますけども、そういう成果も大量にありますので、これからはまたそういうのを少し見直すのも一つの手かなというふうには感じております。

今までこの文化フォーラムを20年やって参りましたけども、ちょっと感じてるところを申し上げると、私みたいな者が、山形くん dari からやってきて、あることないこと20分ぐらいしゃべって、山形に帰れば私はそれで済むんですけども、ちょっともったいないなと思います。いつも来て思うのは地元の、調査、発掘調査なり、研究に携わってる皆さんが、なんかもっと伸び伸びと発言できる環境、あるいは雰囲気、伸び伸びされてる方もいっぱいいますけども、例えばこういう考古学的なデータを取り交ぜると、こういう像が描けそうです、というような発信しやすい雰囲気というのも一つあると、もうちょっと盛り上がってくるのかなあという気がいたします。もし、今後そういう何か大きな研究所を作っても、今更箱物になってしまうでしょうけれど、何かそのようなもっと伸び伸び自由に発言いただけるような環境、雰囲気作りがあると一皮むけてくるんじゃないかなと思います。あまりこれ以上言うと、お前が全部やれと言われそうなので、これで終わらせていただきます。

〈渡辺〉 僕はこれまで言ってきたことの繰り返しなんですけど、簡潔にちょっと一点だけ述べますが、これまでのこの平泉研究というもののの中で、今日の杉本先生、また吉田先生のお話の中にもありましたけども、例えば他のところと比べた時にここは似てるっていう部分は確かにある。ところが、実はここは似ていない。やっぱりここは全然違うという部分もやっぱりいっぱいあるわけです。つまり、同質性と異質性というものが、だんだんやればやるほど明確になってくる。とりあえずそのアジアの中の平泉といった中で比較をしようと思った時に、何か同じような要素を探そうと思ってやっていったわけで、ここの部分は似ているんじゃないかということを、探したと言えば探した。でも、やっぱり向こうは違うな、ということも分かってきました。とりあえずその種をまきました。風呂敷はとりあえず広げるだけ広げてみましたということは言える。ただ、そうするとどこかでその風呂敷を閉じなきゃいけない。一つにまとめるっていう作業が、どこが同じで、どこが異なるのか、その中から抽出

される、今日の午前中の質問の方にもありましたが、ある意味の日本の特質、またはその平泉の特質というものが、抽出されていくのではないかなと思います。それを閉じる作業は今やるべきなのか、もうちょっと先にやるべきなのか分かりませんが、広げっ放しはよくないので、どこかでまとめることもしなきゃいけないなと思いました。

〈北村〉 私は、主に発掘調査を担当するものとして、きちんとしたデータを採り、成果を上げられる発掘調査を行うよう心がけております。そして、研究者の方々をはじめ、利用される方に使って頂けるようなデータを提示していきたいと考えています。

それと、大きなテーマとしてずっと思っていることなのですが、今後を担っていくのは子供たちだ、と考えています。そのためには、遺跡に訪れてくれる子供たちを大切にしたい、興味を持ってもらえるようにしたいと思っています。そして、10年20年もしくは30年と、遺跡を守っていく人たちに育てていってほしい、という思いがありますので、地域の子供たちに是非とも発掘調査を行っているところを見たり、体験したりしていただきたいと思っています。そうすれば、世界遺産になっても、遺跡を守っていく人たちが延々と繋がっていきますので、大切な郷土の遺産を受け継いでいけるよう次の世代に引き継いでいけるよう心がけたいと思います。

〈鎌田〉 先ほど菅野先生が、平泉には塔はないけども、経塚がある、という話を聞いて、私も「そうだ」という感じに強く思っていたところです。平泉周辺には幾つか経塚があるんですが、とりわけこの中心にある金鶏山経塚、本格的な発掘調査はやられてなくて、盗掘に近い形で、遺物は現在、東京国立博物館と奈良国立博物館に行ってます。内容はよく分からないんですが、私、27年ぐらい前に東京国立博物館に行ってちょっと見せて欲しい、いやいや倉庫の底の方にあると言われて、でも強くお願いして見せてもらったんですが、もう相当な常滑や渥美の壺がたくさんあって、その中で渥美の「袈裟たすき」だけが展示されていると、奈良の方には経筒があるということで、やはり金鶏山というのは、規模も何も違う、北上川流域のセンター的な経塚なんだなあという思いをあの時したわけであります。同時に北上川流域にはたくさんの経筒があって奥州藤原氏の思い、平泉文化を広げていくという中で、やはり経塚の果たした役割というのは、単なるお経を56億7000万年後に伝えるというだけではなくて、この北上川流域を、平和な清浄な空間にしていこうというような、意識や願いが働いたんだらうと。それを人々が受け入れていったんだらうなというようなことなんだらうと思います。宮沢賢治の「雨ニモマケズ」の手帳の中に、「経埋むるべき山」ということで花巻周辺の山々に、経を埋めるように、というふうに、お父さんに託したというような話もありますが、やはり単なるお経を埋めただけじゃなくて、この地を平和な場所にしたいという思いが込められてるんだというふうに思いました。いずれ平泉の仏教文化ということを考える上で、私が思ってるのは、やはり9世紀、胆沢城、志波城ができたあたりに、仏教が本格的な形で入ってきて、この地で独自の発展を遂げていくということで、国見山廃寺とか白山廃寺とか、たくさんのお寺跡が残っていますし、仏像も残っている。こういう仏教文化の発展の過程の中で、成果の形として、集大成として、平泉文化、仏教文化があるんだなということを裏付けていきたい。これは自分自身がやっていきたいというふうに考えていることですし、かつて藤島亥治郎さんだけでなく、司東真雄さんという方がいらっしゃって、そういう研究をなさっているので、そういう成果をさらに発展させるような研究が必要なのかなというふうに思っています。あと、その中で思うのはやっぱり十一面観音と毘沙門天の信仰が非常にこの地方では強い。仏像が残っているということで、こういう信仰のあり方というのが12世紀になって、どういうふうになっていったのか、受け入れる側の方のことも考えていったらどうなのかなというふうに思っています。あと私、文化財愛護協会の機関誌の「岩手文化財」という雑誌の表紙に、平泉関係の出土

品の紹介をやってたんですが、内耳鉄鍋（ないじてつなべ）とか、あるいは火舎・花瓶とか人面墨書土器とか、呪符（じゅふ）とか色々書いたんですが、色々調べていくと全くよくわからないんですね。先行研究がほとんどない。ということはやはり、一つ一つの資料の個別の研究がまだ十分に成されてないのではないかと。それぞれやっていると、全国各地の交流とか物の交流とか、工人の動きとか、使っている人たちの思いというのが分かってくるということで、今後、都市平泉とか、アジアとの関わりという大きな話だけではなくて、出土したそれぞれの資料の個別研究を深めていくということ、これは自分自身もやっていきたいと思ってますし、こういう研究というのを深めていったらいいんじゃないかなというふうに思います。

〈菅野〉 どうもありがとうございました。進行の不手際で、まとまりを欠いたかもしれませんが、それぞれの方々から有益なお話をいただけたと思います。それでは、ディスカッションの結びということで、本日、基調講演いただいた田辺先生にご感想をいただきたいと思います。

〈田辺〉 皆さん、どうもお疲れ様でございました。それから、壇上の先生方、大変ご苦勞様でございました。ずっと、お伺いしてまして、大変勉強になりました。

充実した発表と講演とパネルディスカッションと、ありがとうございました。30年にわたる柳之御所遺跡をはじめとする調査によって得られた成果が、研究の膨らみや広がりをもたらしたということをご皆さん、異口同音におっしゃっておられました。そして世界遺産になることによって、さらにその研究の範囲や、領域、ジャンルが広がった。考古学とか歴史だけではなくて、理科学系にまで広がったことなども。その中で3人の先生方からは、いくつかの具体的なテーマの、例示をしていただきました。30分ぐらいの話でしたから、もっとたくさん話したいことがあったんだろうと思いますけども、計画都市ではないけども、都市計画はきちっとあったんだとか、それがまた段階的に造られていた話とかですね。それから、これは都市論を随分やってきてたんですけども、古代から中世に移ると中世型都市の先駆、それは日本的な都市への展開じゃないか、みたいなお話とかですね。それから、境界型の都市という見方もそうですね。面白いですね。そういった具体的なテーマのお話もございました。それから、逆にテーマも広がりじゃなくて、個別の研究も不足しているんじゃないかという話もあって、これからの文化フォーラムが、ますます新しい展開を見せて、ぜひ研究面では発展していただきたいという印象を強く私は持ちました。平泉の特色について、皆さんが異口同音に仰っていたのは、これまでは単純に京都と比較してどうのこうのということだったけども、平泉の独自性が見え始めてきたのではないかとということです。そのあたりは、今後、平泉を発信していく上で、ものすごく重要な内容だと思います。研究面でのこれからのフォーラムというのは、大変期待の大きいものがありますので、3年でも続けるのが大変なのに、というお話もありましたけども、ぜひ装いを新たに、次の21回以降に向かっていていただけたらありがたいなという感想を持ちました。

最後に、何人かの方が仰ってましたけども、むしろ



ろこれから発信ということになったら、要するに専門の枠を超えていかないといけないんだろうと私も思っていて、一般の市民をどういうふうに巻き込んでいくのか、あるいは一般の市民の方に平泉をどういうふうに支えていただくのか。午前中の話もその辺、強調したつもりだったんですけど。それから、子供たちにどうするか、いう話がありました。多分これはこのフォーラムの役目ではないかもしれませんが。そんなことへの期待も持ちながら、皆さんのお話を伺っております。どうも、ありがとうございました。

〈菅野〉 どうもありがとうございます。それでは短時間ではありましたが、有益な討論ができたというふうに思います。これでパネルディスカッションを終了ということにさせていただきます。どうもありがとうございました。

第20回 平泉文化フォーラム

付 属 資 料

目 次

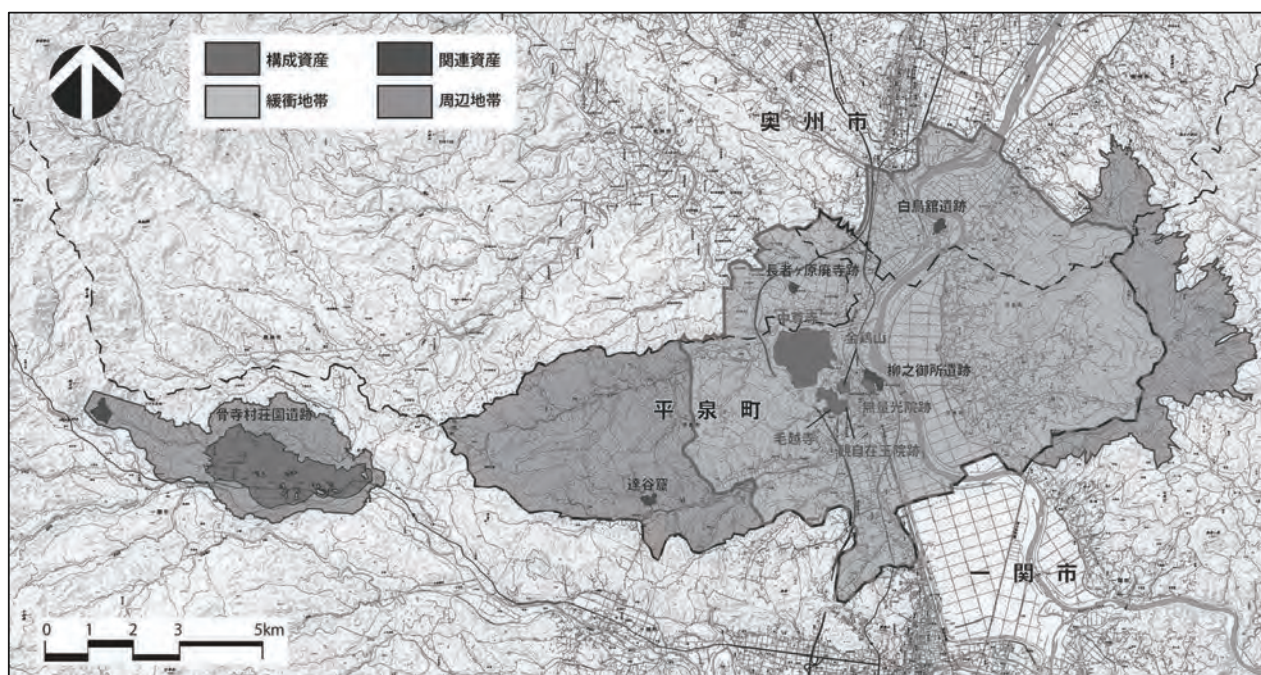
資料1	地図（「平泉の文化遺産」の概要・平泉町中心部）……………	61
資料2	年表（世界遺産「平泉」及び柳之御所遺跡～平成年間のあゆみ～）…	62
資料3	平泉文化研究・平泉文化フォーラム20年のあゆみ……………	63
資料4	平泉遺跡群に係る調査報告書一覧……………	65
資料5	平泉研究参考文献一覧……………	72

令和元年（2019）11月30日

例 言

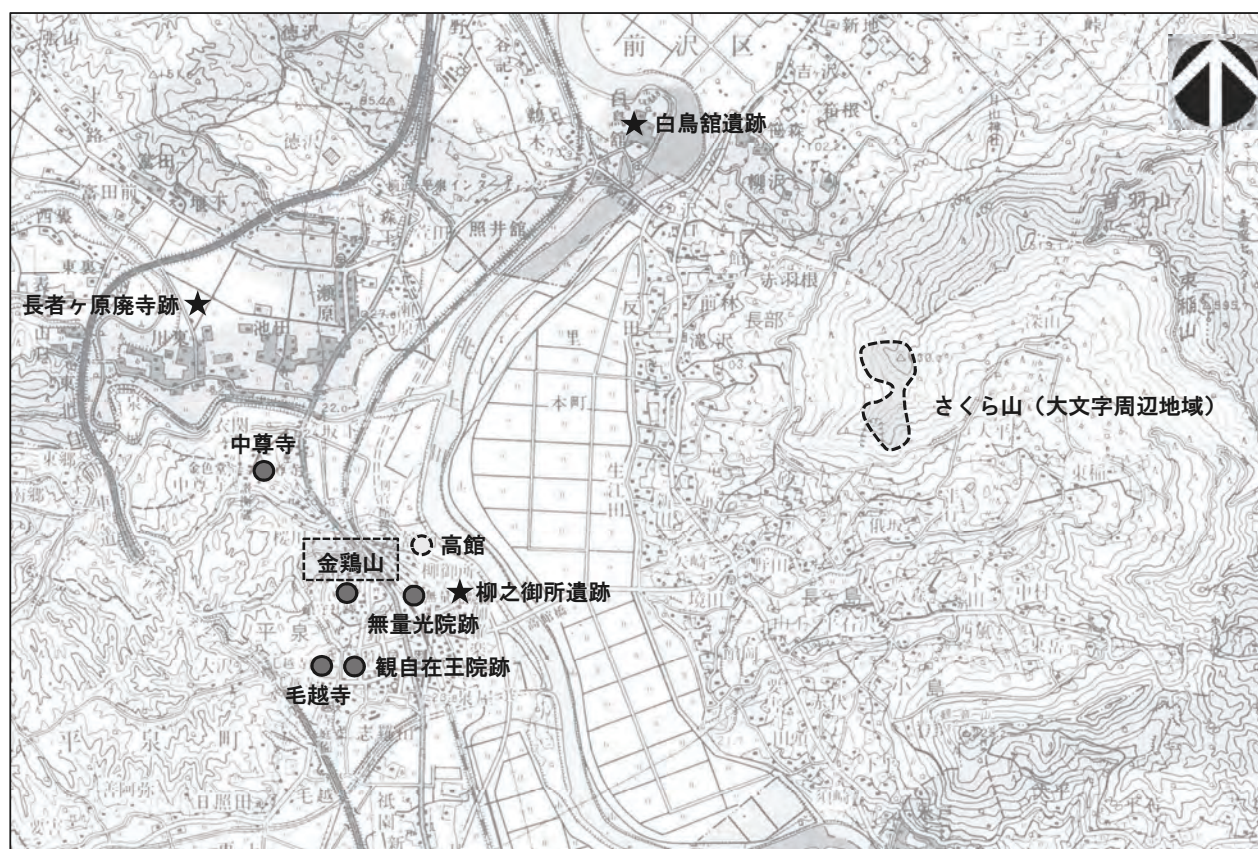
- 1 当該付属資料は、令和元年11月30日(土)に開催した「第20回平泉文化フォーラム」に合わせて作成したものである。
- 2 本資料集は、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課（柳之御所担当）の下記担当が作成した。
 - ・上席文化財専門員 半澤 武彦（総括）
 - ・主任主査 作山 雄一
 - ・文化財専門員 大道 篤史
 - ・文化財専門員 大関 真人
 - ・文化財専門員 菊池 貴広
 - ・文化財専門員 北村 忠昭

「平泉の文化遺産」の概要（資産・関連資産・緩衝地帯・周辺地帯）



出典：平泉の文化遺産－包括的保存管理計画（概要版：2019）

平泉町中心部



【凡例】 ● 世界遺産の構成資産 ★ 追加登録を目指している遺跡等 ○・□ 名勝「おくのほそ道の風景地」

出典：平泉町管内図（平泉町）に加筆

世界遺産「平泉」及び柳之御所遺跡 ～平成年間のあゆみ～

年度	おもな事項	
	世界遺産関係	柳之御所遺跡関係
1988 (S63)		・平泉遺跡群調査指導委員会（事務局・平泉町）を設置 ・一関遊水地・平泉バイパス建設関連で柳之御所遺跡の大規模発掘調査開始（～1993年）
1990 (H2)		・中尊寺から遺跡保存に関する請願署名20万人分が提出される
1992 (H4)		・岩手県及び平泉町教委による内容確認調査が開始
1993 (H5)		・第5回平泉遺跡群指導委員会において、柳之御所跡は『吾妻鏡』に記載されている「平泉館」にあたるとして、保存の必要性が指摘される ・岩手県知事と建設省（現国土交通省）東北地方建設局は「遺跡の保存と治水事業の両立を図り、事業計画を変更する」との基本方針に合意
1996 (H8)	・世界遺産登録に向けた取組み開始	・『柳之御所遺跡整備基本構想』策定 ・国指定史跡『柳之御所遺跡』として告示
1998 (H10)		・県教委が平泉町に柳之御所遺跡調査事務所を開設 ・史跡整備のための内容確認調査を開始（堀内部地区中心） ・「柳之御所遺跡調査研究指導委員会」設置
1999 (H11)		・国土交通省による柳之御所資料館の設置 ・銅印「磐前村印」、白磁四耳壺が井戸状遺構から出土
2000 (H12)		・第1回平泉文化フォーラム（一関文化センター）開催 ・国道4号平泉バイパス暫定供用開始
2001 (H13)	・「平泉の文化遺産」が世界文化遺産の暫定リストに登録	・柳之御所遺跡調査整備指導委員会へ改称 ・『柳之御所遺跡整備基本構想』改定 ・県による史跡地内にある民有地の公有化事業開始
2002 (H14)	・世界文化遺産登録推進協議会（国、県、平泉町）を設置	・『柳之御所遺跡整備基本計画』策定
2003 (H15)	・協議会委員に一関市長、前沢町長、衣川村長を追加	・平泉遺跡群調査整備指導委員会へ改称 ・『柳之御所遺跡整備実施計画』策定
2004 (H16)	・「平泉の文化遺産」世界遺産登録推薦書作成委員会を設置	・史跡公園整備開始
2005 (H17)		・史跡名称変更（『柳之御所遺跡・平泉遺跡群』）
2006 (H18)	・景観条例を制定・施行（関係市町） ・ユネスコ世界遺産センターに推薦書提出 「平泉－浄土思想を基調とする文化的景観－」	・平泉町が「史跡柳之御所遺跡保存管理計画」を策定
2007 (H19)	・イコモスによる現地調査	
2008 (H20)	・第32回世界遺産委員会で登録延期決定	・国道4号平泉バイパス供用開始
2009 (H21)	・ユネスコ世界遺産センターに改定推薦書提出 「平泉－仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群－」	・平泉文化フォーラム第10回記念大会（平泉小学校）開催 ・柳之御所資料館を県管理とする
2010 (H22)	・イコモスによる現地調査	・史跡公園暫定公開（柳之御所資料館をリニューアルオープン） ・柳之御所出土資料が国重要文化財に指定
2011 (H23)	・第35回世界遺産委員会で登録決定（柳之御所遺跡除外） ・「平泉の文化遺産」世界遺産拡張登録検討委員会を設置	
2012 (H24)	・世界遺産暫定リストに「平泉」拡張が記載（柳之御所遺跡、達谷窟、骨寺村荘園遺跡、長者ヶ原廃寺跡、白鳥館遺跡を想定）	・墨画折敷片（カエル板絵）が堀内側から出土
2017 (H29)	・「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究 総括報告書刊行	・『柳之御所遺跡整備基本計画』改定
2018 (H30)	・「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）基本計画 策定	・堀外部地区の内容確認調査着手 ・「柳之御所遺跡－堀内部地区内容確認調査－図版編／本文編」報告書刊行
2019 (R1)	・「平泉の文化遺産」ガイダンス施設（仮称）建設工事開始（～R3）	・遺跡南端部の地形復元整備開始（～R3） ・平泉文化フォーラム第20回記念大会開催（一関文化センター）

平泉文化共同研究・平泉文化フォーラム20年のあゆみ（1）

第1期研究（平成12年度～平成21年度）

研究テーマ：「12世紀東アジアにおける平泉文化の意義」①都市平泉の構造と平泉藤原氏の支配基盤・②世界遺産としての平泉文化・③国家と異民族の関係性

平泉文化共同研究				平泉文化フォーラム		
	共同研究者	研究テーマ	成果品	基調講演者	発表者	会場
第1回 平成12年度	前川 要 八重樫忠郎 吉田 敏 前川 佳代	中世平泉における都市性の成立と展開 時間軸としての遺物 日中市の比較研究に向けて 平泉の園池	平泉文化研究年報 第1号	斉藤利男 本中 真	平泉町教育委員会 一関市教育委員会 紫波町教育委員会	一関文化 センター
第2回 平成13年度	前川 要 八重樫忠郎 吉田 敏 降矢 哲男	平泉の土器の「いろ」を考える 平泉藤原氏の支配領域 白河・鳥羽・平泉 平泉における貿易陶磁器	平泉文化研究年報 第2号	西村幸夫	岩手県立博物館 （御岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター）	毛越寺レス トハウス
第3回 平成14年度	前川 要 八重樫忠郎 吉田 敏 淵原 智幸	考古学から見た東北北部における中世社会の確立 日本史の中の平泉 武士の館の構造 歌枕の用例分析からみる平安中期東北支配の推移	平泉文化研究年報 第3号	杉本 宏	岩手県教育委員会 平泉町教育委員会	岩手教育会館
第4回 平成15年度	富島 義幸 岡 陽一郎 羽柴 直人 井出 靖夫	平安時代後期における浄土のイメージと建築造形 中世都市周縁部の歴史を探索(1) 安倍氏の「柵」の構造 平泉成立前後における土器様式の変遷	平泉文化研究年報 第4号	大石直正	岩手県教育委員会 衣川村教育委員会 前沢町教育委員会	前沢町ふれ あいセン ター
第5回 平成16年度	富島 義幸 岡 陽一郎 羽柴 直人 野中奈津子	平安時代後期京都の伽藍と毛越寺・嘉祥寺 中世都市周縁部の歴史を探索(2) 安倍氏の「柵」の構造(2) 柳之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道痕跡の検出	平泉文化研究年報 第5号	入間田宣夫	岩手県教育委員会 （御岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター） 平泉町文化財センター	江 刺 市 総 合 コ ミ ュ ニ テ ィ セ ン タ ー
第6回 平成17年度	富島 義幸 岡 陽一郎 羽柴 直人 木本 拳周	平安時代後期京都の伽藍と毛越寺・嘉祥寺 中世都市周縁部の歴史を探索(3) 安倍氏の「柵」の構造(3) 柳之御所遺跡出土の瓦	平泉文化研究年報 第6号	田中哲雄	岩手県教育委員会 （御岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター） 一関市教育委員会	一関市ダイ ヤ モ ン ド パ レ ス
第7回 平成18年度	磯野 綾 前川 佳代 関根 達人 鳥山 愛子	中世平泉の市街地形成 「聖地」平泉 清衡の平泉創造 平泉文化と北方交易 12世紀柳之御所における掘立柱建物の研究	平泉文化研究年報 第7号	林 士民 保立道久 入間田宣夫	岩手県教育委員会 （御岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター） 過年度の共同研究者	一関文化 センター
第8回 平成19年度	磯野 綾 前川 佳代 関根 達人 鈴木 弘太	中世平泉の市街地形成 「聖地」平泉 清衡の平泉創造 平泉文化と北方交易 平泉と鎌倉	平泉文化研究年報 第8号	※「平泉文化研究会」を別開催 共同研究者、事務局の研究発表を実施		
第9回 平成20年度	磯野 綾 前川 佳代 関根 達人 鈴木 啓司	平泉の市街地形成～周辺景観からみた中世平泉の市街地形成～ 都市平泉の成立－飛鳥から平泉へ－ 北奥の12世紀－堂ヶ平経塚の検討－ 12世紀奥羽における陶器の研究－平泉柳之御所遺跡を中心に－	平泉文化研究年報 第9号	村井章介	岩手県教育委員会 （御岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター） 奥州市教育委員会	奥州市文化 会館
第10回 平成21年度	パネルディスカッション 研究報告	「平泉文化研究の今まで、そしてこれから」 「柳之御所遺跡の調査成果」西澤正晴 「平泉遺跡群の調査成果」島原弘征 「柵と居館から見た平泉」羽柴直人 「都市史の中の平泉－都市史のかたちから－」前川佳代 「宗教から見た平泉」菅田慶信	平泉文化研究年報 第10号	玉井哲雄 河原純之	岩手県教育委員会 （御岩手県文化振興事業団 埋蔵文化財センター） 平泉町文化財センター	平泉町立平泉 小学校

第2期研究 (平成22年度～平成30年度)

研究テーマ：「平泉文化の総合的研究基本

		共同研究者		研究テーマ		成果品	基調講演者	発表者	会場
		平泉文化共同研究				平泉文化フォーラム			
第11回 平成22年度	松本秀明 敏 岡田陽一郎 吉田敏 中村和之・劉海宇 菅野文夫	平泉とその周辺地域の河成地形についての自然地理的研究 東アジアにおける都市遺産と平泉の比較研究 中世都市平泉関連資料の再検討・再調査 中興文化と平泉の成立 平泉藤原氏と「東国」-「吾妻鏡」平泉記事の再検討-		平泉文化研究年報 第11号	田辺征夫 「遺跡を活かし、今に伝える - 平城宮跡の復原整備と柳之御所遺跡 -」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化財センター 平泉文化遺産センター	胆沢地区勤労者教育文化センター		
第12回 平成23年度	岡田陽一郎 敏 菅野文夫 菅野文夫	平泉出土文字資料の再検討 (1) 西国金文に見える宛池について 日記としての「給聞日記」 12世紀前後における奥州藤原氏文化と北海道の関連について 平泉の特殊性		平泉文化研究年報 第12号	五味文彦 「世界遺産登録後の平泉を考える」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	一関文化センター		
第13回 平成24年度	岡田陽一郎 敏 菅野文夫 菅野文夫	平泉出土文字資料の再検討 (2) 出土資料に見える商代の宛池 日本中世仏教の源と平泉 平泉文化の源と平泉 中国の地方都市と平泉		平泉文化研究年報 第13号	坂井秀弥 「平泉の文化遺産の可能性—今後の調査・活用への期待—」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	奥州市文化会館		
第14回 平成25年度	吉田敏 敏 菅野文夫 菅野文夫	四国庄建物からみた平泉の都市景観 平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究 (1) 平泉の食文化 平泉文化と北海道 平泉文化の歴史的性格に関する文献資料学的考察 「平泉」思想と藤原清閑		平泉文化研究年報 第14号	清水 謙 「仏教建築にみる平泉文化の特質」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	一関文化センター		
第15回 平成26年度	吉田敏 敏 菅野文夫 菅野文夫	地域・時代別にみた四国庄建物の特徴 平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究 (2) 12世紀平泉のくらし 平泉藤原氏における陸奥国の位置づけ 平安京藤原氏と平泉の関係 平泉文化の歴史的性格に関する文献資料学的考察 「平泉」思想と藤原清閑		平泉文化研究年報 第15号	小野正敏 「平泉、鎌倉、一乗谷」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	水沢グランドホテル		
第16回 平成27年度	吉田敏 敏 菅野文夫 菅野文夫	平泉の四国庄建物と古代官衙遺跡との比較検討 平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究・報告 (3) 11世紀における陸奥と京都 平泉の都市景観 平泉文化の歴史的性格に関する文献資料学的考察 「平泉」思想と藤原清閑		平泉文化研究年報 第16号	佐藤 信 (東京大学大学院教授、平泉遺跡群調査総指揮委員) 「考古史上の平泉の位置 - 古代国家から中世への変換 -」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	一関文化センター		
第17回 平成28年度	中澤寛賢 佐藤健治 渡辺健成 菅野文夫 菅野文夫	北東アジアからみた平泉文化の特質 平安京後の京都と平泉 前九年平治の乱と平泉 平泉の都市景観 平泉文化の歴史的性格に関する文献資料学的考察 「平泉」思想と藤原清閑		平泉文化研究年報 第17号	佐川正敏 (東北学院大学大学院 教授) 「考古史上の平泉の位置 - 古代国家から中世への変換 -」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	奥州市文化会館2ホール		
第18回 平成29年度	佐藤健治 渡辺健成 菅野文夫 菅野文夫	平泉の景観と変遷 増幅するイメージ-西行「衣川」詠の成立と享受について- 藤原氏治政と平泉のルーツについて 中興文化と平泉の成立 平泉文化の歴史的性格に関する文献資料学的考察 「平泉」思想と藤原清閑		平泉文化研究年報 第18号	西山良平 (京都大学名誉教授) 「平泉を運ぶ - 平泉を運ぶ -」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	一関文化センター		
第19回 平成30年度	佐藤健治 渡辺健成 菅野文夫 菅野文夫	平泉の景観と変遷 増幅するイメージ-西行「衣川」詠の成立と享受について- 藤原氏治政と平泉のルーツについて 中興文化と平泉の成立 平泉文化の歴史的性格に関する文献資料学的考察 「平泉」思想と藤原清閑		平泉文化研究年報 第19号	清水真一 (徳島文理大学文学部教授) 「世界遺産平泉の保存管理に向けて - アジアの都市遺産・仏教遺跡の課題と取り組みから -」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	江刺体育文化会館		
第20回 令和元年度	佐藤健治 渡辺健成 菅野文夫 菅野文夫	平泉の景観と変遷 増幅するイメージ-西行「衣川」詠の成立と享受について- 藤原氏治政と平泉のルーツについて 中興文化と平泉の成立 平泉文化の歴史的性格に関する文献資料学的考察 「平泉」思想と藤原清閑		平泉文化研究年報 第20号	田辺征夫 「日本の遺跡保存と活用、この30年 - 世界遺産・平泉・誕生の意義に寄せて -」	岩手県教育委員会 岩手県平泉市歴史博物館 平泉文化遺産センター 平泉文化遺産センター	一関文化センター		

平泉遺跡群に係る調査報告書一覧

(註) 下表は「市町村名、遺跡名、発行年」の順に優先して並べたもの

No	市町村名	遺跡名	回数	報告書名	シリーズ名等	発行者等	発行年
1	一関市	骨寺村荘園遺跡		『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』	岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第6集	一関市教育委員会	2005
2	一関市	骨寺村荘園遺跡		『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書(第7集)』	岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第1集	一関市教育委員会	2006
3	一関市	骨寺村荘園遺跡		『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書(第8集)』	岩手県一関市埋蔵文化財調査報告書第2集	一関市教育委員会	2007
4	一関市	骨寺村荘園遺跡		『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書』	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集	一関市教育委員会	2008
5	一関市	骨寺村荘園遺跡		『骨寺村荘園遺跡確認調査報告書(第10集)』	岩手県一関市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集	一関市教育委員会	2009
6	一関市	河崎の柵擬定地		『河崎の柵擬定地発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第371集	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2001
7	一関市	河崎の柵擬定地		『河崎の柵擬定地発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第474集	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2006
8	奥州市	長者原廃寺跡・胆沢城跡		『長者原廃寺跡・胆沢城跡(第二報)』	文化財調査報告第六集	岩手県教育委員会	1959
9	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		岩手県胆沢郡長者ヶ原廃寺址	日本考古学年報 11	日本考古学協会	1962
10	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第6次調査－』	岩手県衣川村文化財調査報告書第8集	衣川村教育委員会	2005
11	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『衣川流域における古代末期遺跡調査報告書－長者ヶ原廃寺跡第3次・第5次・第7次発掘調査報告書－』	岩手県立博物館調査研究報告書 第21冊	岩手県立博物館	2006
12	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第9次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2007
13	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第10次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2008
14	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第11次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2009
15	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第12次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2010
16	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第13次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2011
17	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第14次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2012
18	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－総括編－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第20集	奥州市教育委員会	2013
19	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第15次調査－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第22集	奥州市教育委員会	2014
20	奥州市	長者ヶ原廃寺跡		『長者ヶ原廃寺跡発掘調査報告書－第16次調査－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第38集	奥州市教育委員会	2019
21	奥州市	衣川柵		衣川流域における古代末期遺跡の分布調査(1)	岩手県立博物館研究報告 第20号	岩手県立博物館	2003
22	奥州市	接待館		衣川流域における古代末期遺跡の分布調査(1)	岩手県立博物館研究報告 第20号	岩手県立博物館	2003
23	奥州市	接待館		『六日市場・細田・接待館遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第523集	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2008
24	奥州市	接待館		『接待館遺跡発掘調査報告書』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第35集	奥州市教育委員会	2018
25	奥州市	衣の関道		『衣の関道遺跡第1・2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第550集	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2010
26	奥州市	白鳥館		『町内遺跡発掘調査報告書』	岩手県前沢町文化財調査報告書第7集	前沢町教育委員会	1999
27	奥州市	白鳥館		『白鳥館遺跡発掘調査報告書－第2次・第3次調査－』	岩手県前沢町文化財調査報告書第19集	前沢町教育委員会	2005
28	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書－第4次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室(旧前沢町教育委員会)	2006
29	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書－第5次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2007
30	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書－第6次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2008
31	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書－第7次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2009
32	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査報告書－第8次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2010
33	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査概要報告書－第9・10次調査－』		奥州市世界遺産登録推進室	2012
34	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査概要報告書－第11次調査－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第21集	奥州市世界遺産登録推進室	2013

(註) 下表は「市町村名、遺跡名、発行年」の順に優先して並べたもの

No.	市町村名	遺跡名	次数	報告書名	シリーズ名等	発行者等	発行年
35	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査概要報告書－第12次調査－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第24集	奥州市世界遺産登録推進室	2014
36	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査概要報告書－第13次調査－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第27集	奥州市世界遺産登録推進室	2015
37	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査概要報告書－第14次調査－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第29集	奥州市世界遺産登録推進室	2016
38	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査概要報告書－第9～第15次調査遺構・遺物編－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第32集	奥州市世界遺産登録推進室	2017
39	奥州市	白鳥館		『国指定史跡 白鳥館遺跡発掘調査概要報告書－第9～第15次調査遺物・考察・分析編－』	岩手県奥州市埋蔵文化財調査報告書第34集	奥州市世界遺産登録推進室	2018
40	奥州市	衣川柵擬定地		『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅴ－』	岩手県文化財調査報告書第54集	岩手県教育委員会	1980
41	平泉町	中尊寺		岩手県西磐井郡平泉中尊寺	日本考古学年報 6	日本考古学協会	1963
42	平泉町	中尊寺		平泉中尊寺大金堂前第1次発掘調査概報	岩手大学学芸学部研究年報 第13巻	岩手大学学芸学部学会	1958
43	平泉町	中尊寺		岩手県西磐井郡平泉町中尊寺本堂前広場	日本考古学年報 10	日本考古学協会	1963
44	平泉町	中尊寺		『中尊寺第5次春季 発掘調査略報告』		平泉遺跡調査会	1963
45	平泉町	中尊寺		岩手県平泉町中尊寺境内伝三重池跡	日本考古学年報 17	日本考古学協会	1969
46	平泉町	中尊寺		中尊寺境内	日本考古学年報 20	日本考古学協会	1972
47	平泉町	中尊寺		『特別史跡中尊寺境内 保存管理計画書』		平泉町教育委員会	1980
48	平泉町	中尊寺		『特別史跡中尊寺境内 金剛院発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第53集	平泉町教育委員会	1994
49	平泉町	中尊寺		『中尊寺総合調査－第1次遺構確認調査報告書－』		中尊寺	1994
50	平泉町	中尊寺		『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	平泉町教育委員会	1994
51	平泉町	中尊寺		『特別史跡中尊寺境内 内容確認調査報告書(Ⅰ)』	岩手県平泉町文化財調査報告書第66集	平泉町教育委員会	1997
52	平泉町	中尊寺		『特別史跡中尊寺境内 内容確認調査報告書(Ⅱ) 遺構編』	岩手県平泉町文化財調査報告書第69集	平泉町教育委員会	1998
53	平泉町	中尊寺		『特別史跡中尊寺境内 内容確認調査報告書(Ⅲ)』	岩手県平泉町文化財調査報告書第74集	平泉町教育委員会	1999
54	平泉町	中尊寺	57～59次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	平泉町教育委員会	2000
55	平泉町	中尊寺	61・62次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	平泉町教育委員会	2001
56	平泉町	中尊寺	61次Ⅱ期・63・64次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	平泉町教育委員会	2002
57	平泉町	中尊寺	65次	『中尊寺跡第65次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第84集	平泉町教育委員会	2004
58	平泉町	中尊寺	61次Ⅲ期・65次Ⅰ期・66・67次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	平泉町教育委員会	2003
59	平泉町	中尊寺	68・69次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004
60	平泉町	中尊寺	70次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	平泉町教育委員会	2005
61	平泉町	中尊寺	72次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	平泉町教育委員会	2008
62	平泉町	中尊寺	73次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	平泉町教育委員会	2009
63	平泉町	中尊寺	78～80次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	平泉町教育委員会	2012
64	平泉町	中尊寺	81・82次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	平泉町教育委員会	2013
65	平泉町	中尊寺	83次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第124集	平泉町教育委員会	2015
66	平泉町	中尊寺	84次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第128集	平泉町教育委員会	2017
67	平泉町	中尊寺	86次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
68	平泉町	中尊寺	85・87・88次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
69	平泉町	毛越Ⅱ		『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅴ－』	岩手県文化財調査報告書第54集	岩手県教育委員会	1980
70	平泉町	毛越Ⅱ	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第23集	平泉町教育委員会	1991
71	平泉町	毛越Ⅱ	4次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004
72	平泉町	毛越Ⅱ	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
73	平泉町	毛越Ⅲ		『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅴ－』	岩手県文化財調査報告書第54集	平泉町教育委員会	1980
74	平泉町	毛越Ⅳ	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
75	平泉町	毛越Ⅴ	1・2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	平泉町教育委員会	1994
76	平泉町	毛越Ⅴ	3次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	平泉町教育委員会	2001
77	平泉町	毛越Ⅴ	4・5次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	平泉町教育委員会	2002
78	平泉町	毛越Ⅴ	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004

(注) 下表は「市町村名、遺跡名、発行年」の順に優先して並べたもの

No.	市町村名	遺跡名	回数	報告書名	シリーズ名等	発行者等	発行年
79	平泉町	毛越Ⅵ	1 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
80	平泉町	毛越Ⅳ	1 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第127集	平泉町教育委員会	2017
81	平泉町	猫間が淵	1 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第11集	平泉町教育委員会	1987
82	平泉町	猫間が淵	2 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第13集	平泉町教育委員会	1988
83	平泉町	猫間が淵	3・4 次	『東北電力鉄塔用地 (No49、No48、No47) 発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第20集	平泉町教育委員会	1990
84	平泉町	猫間が淵	5 次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	平泉町教育委員会	2003
85	平泉町	猫間が淵		『柳之御所遺跡』	岩手県文化財調査報告書第118集	岩手県教育委員会	2004
86	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡発掘調査報告書－第11・12次発掘調査概報－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第1集	平泉町教育委員会	1983
87	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡発掘調査報告書－第13・14・15・16次発掘調査報告概報－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第3集	平泉町教育委員会	1984
88	平泉町	柳之御所	17次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第6集	平泉町教育委員会	1985
89	平泉町	柳之御所	18次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第11集	平泉町教育委員会	1987
90	平泉町	柳之御所	19次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第13集	平泉町教育委員会	1988
91	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡発掘調査報告書－第20・22次発掘調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第15集	平泉町教育委員会	1989
92	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡発掘調査報告書－第24次・25次調査概報－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第19集	平泉町教育委員会	1990
93	平泉町	柳之御所		『東北電力鉄塔用地 (No49、No48、No47) 発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第20集	平泉町教育委員会	1990
94	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡発掘調査報告書－第27・29次調査概報－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第24集	平泉町教育委員会	1991
95	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡発掘調査報告書－第30次調査概報－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第28集	平泉町教育委員会	1992
96	平泉町	柳之御所	32～34次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第29集	平泉町教育委員会	1992
97	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡発掘調査報告書－第35次調査概報－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第32集	平泉町教育委員会	1993
98	平泉町	柳之御所		『平泉遺跡群範囲確認調査－第37次柳之御所跡発掘調査報告書－』	岩手県文化財調査報告書第94集	岩手県教育委員会	1993
99	平泉町	柳之御所		『平泉遺跡群発掘調査報告書－柳之御所跡第38次・39次・40次発掘調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第33集	平泉町教育委員会	1993
100	平泉町	柳之御所	24・25・27・30・35次	『柳之御所跡発掘調査報告書－平泉バイパス・一関遊水地関連調査遺跡発掘調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第38集	平泉町教育委員会	1994
101	平泉町	柳之御所	42次	『平泉遺跡群範囲確認調査－第42次柳之御所跡発掘調査報告書－』	岩手県文化財調査報告書第96集	岩手県教育委員会	1994
102	平泉町	柳之御所	43次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	平泉町教育委員会	1994
103	平泉町	柳之御所	44次	『平泉遺跡群範囲確認調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第39集	平泉町教育委員会	1994
104	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡第45次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第46集	平泉町教育委員会	1994
105	平泉町	柳之御所		『柳之御所跡－一関遊水地事業・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査報告－』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1995
106	平泉町	柳之御所	46次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
107	平泉町	柳之御所		『柳之御所遺跡』『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成9年度)』	岩手県文化財調査報告書第103集	岩手県教育委員会	1998
108	平泉町	柳之御所	47～49次	『柳之御所遺跡－第47・48・49次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第104集	岩手県教育委員会	1999
109	平泉町	柳之御所		『柳之御所遺跡－第50次発掘調査概報－』	岩手県文化財調査報告書第107集	岩手県教育委員会	2000
110	平泉町	柳之御所	51次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	平泉町教育委員会	2000
111	平泉町	柳之御所		『柳之御所遺跡－第52次発掘調査概報－』	岩手県文化財調査報告書第111集	岩手県教育委員会	2001
112	平泉町	柳之御所	53・54次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	平泉町教育委員会	2001
113	平泉町	柳之御所	55次	『柳之御所遺跡－第55次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第113集	岩手県教育委員会	2002
114	平泉町	柳之御所		『柳之御所遺跡－第56次発掘調査概報－』	岩手県文化財調査報告書第117集	岩手県教育委員会	2003
115	平泉町	柳之御所遺跡・猫間が淵跡		『柳之御所遺跡－第57次発掘調査概報・猫間が淵跡発掘調査報告・第1・2次内容確認調査総括報告書』	岩手県文化財調査報告書第118集	岩手県教育委員会	2004
116	平泉町	柳之御所	57次	『柳之御所遺跡』	岩手県文化財調査報告書第118集	岩手県教育委員会	2004
117	平泉町	柳之御所	58次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004
118	平泉町	柳之御所	60～63次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	平泉町教育委員会	2005
119	平泉町	柳之御所		『平泉遺跡群発掘調査報告書－柳之御所跡第59次発掘調査概報－』	岩手県文化財調査報告書第121集	岩手県教育委員会	2006
120	平泉町	柳之御所		『平泉遺跡群発掘調査報告書－柳之御所跡第64次発掘調査概報－』	岩手県文化財調査報告書第123集	岩手県教育委員会	2007

(註) 下表は「市町村名、遺跡名、発行年」の順に優先して並べたもの

No.	市町村名	遺跡名	回数	報告書名	シリーズ名等	発行者等	発行年
121	平泉町	柳之御所		『平泉遺跡群発掘調査報告書－柳之御所遺跡第65次発掘調査概報－』	岩手県文化財調査報告書第125集	岩手県教育委員会	2008
122	平泉町	柳之御所	66次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	平泉町教育委員会	2008
123	平泉町	柳之御所		『平泉遺跡群発掘調査報告書－柳之御所遺跡第68次発掘調査概報－』	岩手県文化財調査報告書第127集	岩手県教育委員会	2009
124	平泉町	柳之御所	59次	『柳之御所遺跡－第59次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第121集	岩手県教育委員会	2006
125	平泉町	柳之御所	64次	『柳之御所遺跡－第64次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第123集	岩手県教育委員会	2007
126	平泉町	柳之御所	65次	『柳之御所遺跡－第65次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第125集	岩手県教育委員会	2008
127	平泉町	柳之御所	68次	『柳之御所遺跡－第68次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第127集	岩手県教育委員会	2009
128	平泉町	柳之御所	69次	『柳之御所遺跡－第69次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第130集	岩手県教育委員会	2010
129	平泉町	柳之御所	70次	『柳之御所遺跡－第70次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第133集	岩手県教育委員会	2011
130	平泉町	柳之御所	72次	『柳之御所遺跡－第72次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第135集	岩手県教育委員会	2012
131	平泉町	柳之御所	73次	『柳之御所遺跡－第73次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第137集	岩手県教育委員会	2013
132	平泉町	柳之御所	74次	『柳之御所遺跡－第74次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第140集	岩手県教育委員会	2014
133	平泉町	柳之御所		『柳之御所遺跡－出土資料（重要文化財指定品）目録』	岩手県文化財調査報告書第141集	岩手県教育委員会	2015
134	平泉町	柳之御所	75次	『柳之御所遺跡－第75次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第144集	岩手県教育委員会	2015
135	平泉町	柳之御所	76次	『柳之御所遺跡－第76次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第147集	岩手県教育委員会	2016
136	平泉町	柳之御所	77次	『柳之御所遺跡－第77次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第150集	岩手県教育委員会	2017
137	平泉町	柳之御所	78・79次	『柳之御所遺跡－第78・79次発掘調査概報』	岩手県文化財調査報告書第153集	岩手県教育委員会	2018
138	平泉町	柳之御所		『柳之御所遺跡－堀内部内容確認調査 図版編』	岩手県文化財調査報告書第154集	岩手県教育委員会	2018
139	平泉町	柳之御所		『柳之御所遺跡－堀内部内容確認調査 本文編』	岩手県文化財調査報告書第155集	岩手県教育委員会	2019
140	平泉町	金鶏山	1 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	平泉町教育委員会	1994
141	平泉町	金鶏山		『花立 I 遺跡第 2・3・4 次、白山社遺跡第 3 次、西光寺跡第 2 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第89集	平泉町教育委員会	2004
142	平泉町	金鶏山	3・4 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	平泉町教育委員会	2009
143	平泉町	金鶏山	5・6 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第126集	平泉町教育委員会	2016
144	平泉町	金鶏山	7 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第128集	平泉町教育委員会	2017
145	平泉町	無量光院		『無量光院跡』	埋蔵文化財発掘調査報告 第三	文化財保護委員会	1954
146	平泉町	無量光院		岩手県西磐井郡平泉無量光院跡	日本考古学年報 5	日本考古学協会	1957
147	平泉町	無量光院	1 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第34集	平泉町教育委員会	1993
148	平泉町	無量光院	4 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
149	平泉町	無量光院	5～7 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	平泉町教育委員会	1999
150	平泉町	無量光院	8～10次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	平泉町教育委員会	2000
151	平泉町	無量光院	11次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	平泉町教育委員会	2001
152	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院跡内容確認調査報告書－第12次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第83集	平泉町教育委員会	2003
153	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院跡発掘調査報告書 I－第13次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第87集	平泉町教育委員会	2004
154	平泉町	無量光院	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004
155	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院跡発掘調査報告書 II－第15次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第91集	平泉町教育委員会	2005
156	平泉町	無量光院	16次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	平泉町教育委員会	2005
157	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 III－第17次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第99集	平泉町教育委員会	2006
158	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 IV－第18次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第107集	平泉町教育委員会	2008
159	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 V－第19次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第109集	平泉町教育委員会	2009
160	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 VII－第22次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第115集	平泉町教育委員会	2011
161	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 VIII－第23次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第117集	平泉町教育委員会	2012
162	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 IX－第24次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第119集	平泉町教育委員会	2013
163	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 XI－第24次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第123集	平泉町教育委員会	2015
164	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 XII－第30次調査－』	岩手県平泉町文化財調査報告書第125集	平泉町教育委員会	2016
165	平泉町	無量光院	27・29次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第124集	平泉町教育委員会	2015
166	平泉町	無量光院	31次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第126集	平泉町教育委員会	2016

(註) 下表は「市町村名、遺跡名、発行年」の順に優先して並べたもの

No.	市町村名	遺跡名	回数	報告書名	シリーズ名等	発行者等	発行年
167	平泉町	無量光院	33次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第127集	平泉町教育委員会	2017
168	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 XIV - 第34次調査 -』	岩手県平泉町文化財調査報告書第129集	平泉町教育委員会	2018
169	平泉町	無量光院	35次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
170	平泉町	無量光院		『特別史跡無量光院発掘調査報告書 XV - 第36次調査 -』	岩手県平泉町文化財調査報告書第131集	平泉町教育委員会	2019
171	平泉町	無量光院	37・38次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
172	平泉町	花立 I		平泉花館遺址	文化財調査報告 第 1 輯	岩手県教育委員会	1951
173	平泉町	花立 I		『花立 I 遺跡第 2・3・4 次、白山社遺跡第 3 次、西光寺跡第 2 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第89集	平泉町教育委員会	2004
174	平泉町	花立 I		『花立 I 遺跡第 5 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第37集	平泉町教育委員会	1993
175	平泉町	花立 I	6 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	平泉町教育委員会	1994
176	平泉町	花立 I		『花立 I 遺跡第 7 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第42集	平泉町教育委員会	1994
177	平泉町	花立 I	8 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
178	平泉町	花立 I		『花立 I 遺跡 (第 9・12・13次)・衣岡遺跡 (第 5 次) 発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第285集	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1999
179	平泉町	花立 I	15・16次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	平泉町教育委員会	1999
180	平泉町	花立 I	17・19次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	平泉町教育委員会	2000
181	平泉町	花立 I	20次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	平泉町教育委員会	2001
182	平泉町	花立 I	21・22次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	平泉町教育委員会	2003
183	平泉町	花立 I	23次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004
184	平泉町	花立 I	24次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	平泉町教育委員会	2005
185	平泉町	花立 I	27・28次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	平泉町教育委員会	2009
186	平泉町	花立 I	31次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第124集	平泉町教育委員会	2015
187	平泉町	花立 II		『花立 II 遺跡第 1 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第25集	平泉町教育委員会	1991
188	平泉町	花立 II	2 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第29集	平泉町教育委員会	1992
189	平泉町	花立 II	3 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	平泉町教育委員会	1994
190	平泉町	花立 II	4 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
191	平泉町	花立 II	5 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第55集	平泉町教育委員会	1996
192	平泉町	花立 II	11・12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	平泉町教育委員会	1999
193	平泉町	花立 II	15・16次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	平泉町教育委員会	2002
194	平泉町	花立 II	17次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	平泉町教育委員会	2003
195	平泉町	花立 II	18～20次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	平泉町教育委員会	2005
196	平泉町	花立 II	21次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	平泉町教育委員会	2008
197	平泉町	花立 II	22次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	平泉町教育委員会	2009
198	平泉町	花立 II	25次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
199	平泉町	伽羅之御所	1 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第 8 集	平泉町教育委員会	1986
200	平泉町	伽羅之御所	2 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第11集	平泉町教育委員会	1987
201	平泉町	伽羅之御所	3 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第21集	平泉町教育委員会	1990
202	平泉町	伽羅之御所	4 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第23集	平泉町教育委員会	1991
203	平泉町	伽羅之御所	5 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第29集	平泉町教育委員会	1992
204	平泉町	伽羅之御所	6 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	平泉町教育委員会	1994
205	平泉町	伽羅之御所	7 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
206	平泉町	伽羅之御所	8 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第55集	平泉町教育委員会	1996
207	平泉町	伽羅之御所	12・13次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第73集	平泉町教育委員会	1999
208	平泉町	伽羅之御所	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	平泉町教育委員会	2000
209	平泉町	伽羅之御所	15・16次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	平泉町教育委員会	2003
210	平泉町	伽羅之御所	17次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	平泉町教育委員会	2005
211	平泉町	伽羅之御所	18次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	平泉町教育委員会	2008
212	平泉町	伽羅之御所	20・21次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	平泉町教育委員会	2014
213	平泉町	伽羅之御所	24次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第126集	平泉町教育委員会	2016
214	平泉町	伽羅之御所	25次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
215	平泉町	伽羅之御所	26・27次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
216	平泉町	白山社		『泉屋遺跡第 3 次・白山社遺跡第 1 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第27集	平泉町教育委員会	1991
217	平泉町	白山社		『白山社遺跡第 2 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第30集	平泉町教育委員会	1993
218	平泉町	白山社		『花立 I 遺跡第 2・3・4 次、白山社遺跡第 3 次、西光寺跡第 2 次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第89集	平泉町教育委員会	2004

(註) 下表は「市町村名、遺跡名、発行年」の順に優先して並べたもの

No.	市町村名	遺跡名	回数	報告書名	シリーズ名等	発行者等	発行年
219	平泉町	白山社		岩手県西磐井郡平泉町白山社遺跡検出 梵鐘鋳造遺構	日本考古学年報 48	日本考古学協会	1997
220	平泉町	白山社	9 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	平泉町教育委員会	2014
221	平泉町	白山社	10次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第128集	平泉町教育委員会	2017
222	平泉町	毛越寺		岩手県西磐井郡毛越寺伽藍跡および観 自在王院跡	日本考古学年報 8	日本考古学協会	1959
223	平泉町	毛越寺		岩手県平泉町毛越寺遺跡	日本考古学年報 10	日本考古学協会	1963
224	平泉町	毛越寺		『第四次毛越寺調査概報(昭和33年度)』	平泉遺跡調査会	平泉遺跡調査会	1958
225	平泉町	毛越寺		『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』		東京大学出版会	1961
226	平泉町	毛越寺		『昭和55年度 特別名勝毛越寺庭園発掘 調査報告書(第1次調査・第2次調査)』		平泉町教育委員会	1981
227	平泉町	毛越寺		『昭和56年度 特別名勝毛越寺庭園発 掘調査報告書』		平泉町教育委員会	1982
228	平泉町	毛越寺		『昭和57年度 特別名勝毛越寺庭園発 掘調査報告書(第4次調査)』		平泉町教育委員会	1983
229	平泉町	毛越寺		『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発 掘調査報告書-第5次調査-』		平泉町教育委員会	1984
230	平泉町	毛越寺		『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発 掘調査報告書-第6次調査-』		平泉町教育委員会	1985
231	平泉町	毛越寺		『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発 掘調査報告書-第7次調査-』		平泉町教育委員会	1986
232	平泉町	毛越寺		『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発 掘調査報告書-第9次調査-』		平泉町教育委員会	1987
233	平泉町	毛越寺		『毛越寺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査 報告書第127集	財団法人岩手県文化振興事業 団埋蔵文化財センター	1988
234	平泉町	毛越寺		『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発 掘調査報告書-第11次調査-』	岩手県平泉町文化財調査報告書第12集	平泉町教育委員会	1988
235	平泉町	毛越寺		『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発 掘調査報告書-第12次調査-』	岩手県平泉町文化財調査報告書第14集	平泉町教育委員会	1989
236	平泉町	毛越寺		『特別史跡・特別名勝 毛越寺庭園発 掘調査報告書-第13次調査-』	岩手県平泉町文化財調査報告書第26集	平泉町教育委員会	1991
237	平泉町	毛越寺	18次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
238	平泉町	毛越寺	19次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
239	平泉町	観自在王院		岩手県西磐井郡毛越寺伽藍跡および観 自在王院跡	日本考古学年報 8	日本考古学協会	1959
240	平泉町	観自在王院		『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』		東京大学出版会	1961
241	平泉町	観自在王院		『昭和51年度 観自在王院跡発掘調査報告書』		平泉町教育委員会	1976
242	平泉町	観自在王院		『昭和52年度 観自在王院跡発掘調査報告書』		平泉町教育委員会	1978
243	平泉町	観自在王院		『観自在王院跡整備報告書』		平泉町	1979
244	平泉町	倉町		『倉町遺跡第1次・志羅山遺跡第11・ 12・19・22次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第36集	平泉町教育委員会	1993
245	平泉町	倉町	3 次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	平泉町教育委員会	2002
246	平泉町	倉町		『倉町遺跡第4次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第88集	平泉町教育委員会	2004
247	平泉町	倉町		『倉町遺跡第6次・国衡館跡第13次』	岩手県平泉町文化財調査報告書第101集	平泉町教育委員会	2006
248	平泉町	倉町	11・12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	平泉町教育委員会	2008
249	平泉町	倉町	13次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	平泉町教育委員会	2009
250	平泉町	倉町	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第124集	平泉町教育委員会	2015
251	平泉町	泉屋	1 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第21集	平泉町教育委員会	1990
252	平泉町	泉屋		『泉屋遺跡第3次・白山社遺跡第1次 発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第27集	平泉町教育委員会	1991
253	平泉町	泉屋		『泉屋遺跡第4次発掘調査報告書概報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第22集	平泉町教育委員会	1990
254	平泉町	泉屋	2・5 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第23集	平泉町教育委員会	1991
255	平泉町	泉屋		『泉屋遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査 報告書第184集	財団法人岩手県文化振興事業 団埋蔵文化財センター	1993
256	平泉町	泉屋	8 次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第34集	平泉町教育委員会	1993
257	平泉町	泉屋	12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	平泉町教育委員会	1994
258	平泉町	泉屋	14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
259	平泉町	泉屋		『泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調 査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査 報告書第247集	財団法人岩手県文化振興事業 団埋蔵文化財センター	1997
260	平泉町	泉屋	20次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第75集	平泉町教育委員会	2000
261	平泉町	泉屋		『泉屋遺跡第16・19・21次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査 報告書第399集	財団法人岩手県文化振興事業 団埋蔵文化財センター	2003
262	平泉町	泉屋	22～24次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	平泉町教育委員会	2001

(註) 下表は「市町村名、遺跡名、発行年」の順に優先して並べたもの

No.	市町村名	遺跡名	次数	報告書名	シリーズ名等	発行者等	発行年
263	平泉町	泉屋	25次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	平泉町教育委員会	2002
264	平泉町	泉屋	26次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004
265	平泉町	泉屋	27次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	平泉町教育委員会	2012
266	平泉町	泉屋	28次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	平泉町教育委員会	2013
267	平泉町	毛越Ⅰ		『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書－Ⅴ－』	岩手県文化財調査報告書第54集	岩手県教育委員会	1980
268	平泉町	祇園Ⅱ	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第108集	平泉町教育委員会	2008
269	平泉町	祇園Ⅱ	3次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第110集	平泉町教育委員会	2009
270	平泉町	祇園Ⅱ	7～10次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	平泉町教育委員会	2012
271	平泉町	祇園Ⅱ	11次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	平泉町教育委員会	2013
272	平泉町	祇園Ⅱ	12～14次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	平泉町教育委員会	2014
273	平泉町	祇園Ⅰ	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
274	平泉町	祇園Ⅰ	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第128集	平泉町教育委員会	2017
275	平泉町	本町Ⅱ		『本町Ⅱ遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第410集	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2003
276	平泉町	三日町Ⅱ	5・6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	平泉町教育委員会	2013
277	平泉町	三日町Ⅲ	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
278	平泉町	伽羅の御所跡東		『伽羅の御所跡東遺跡第2次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第16集	平泉町教育委員会	1989
279	平泉町	毛越Ⅴ	1・2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第40集	平泉町教育委員会	1994
280	平泉町	毛越Ⅴ	3次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第77集	平泉町教育委員会	2001
281	平泉町	毛越Ⅴ	4・5次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第78集	平泉町教育委員会	2002
282	平泉町	毛越Ⅴ	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第85集	平泉町教育委員会	2004
283	平泉町	毛越Ⅵ	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第47集	平泉町教育委員会	1995
284	平泉町	衣閤		『衣閤遺跡第1次発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第31集	平泉町教育委員会	1993
285	平泉町	衣閤	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第43集	平泉町教育委員会	1994
286	平泉町	衣閤		『花立Ⅰ遺跡(第9・12・13次)・衣閤遺跡(第5次)発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第285集	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	1999
287	平泉町	高館		奥州平泉高館	岩手大学教育学部研究年報 第26巻	岩手大学教育学部	1966
288	平泉町	高館		岩手県平泉町高館(判官館)遺跡	日本考古学年報 17	日本考古学協会	1969
289	平泉町	高館	3次	『平泉遺跡群範囲確認調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第39集	平泉町教育委員会	1994
290	平泉町	高館	5次	『平泉遺跡群発掘調査略報』	岩手県平泉町文化財調査報告書第81集	平泉町教育委員会	2003
291	平泉町	高館	6次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第92集	平泉町教育委員会	2005
292	平泉町	西光寺跡	7次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	平泉町教育委員会	2012
293	平泉町	西光寺跡	8次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	平泉町教育委員会	2014
294	平泉町	西光寺跡	9次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第124集	平泉町教育委員会	2015
295	平泉町	西光寺跡	10次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第128集	平泉町教育委員会	2017
296	平泉町	西光寺跡	11次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
297	平泉町	西光寺跡	12次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
298	平泉町	志羅山	101次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第118集	平泉町教育委員会	2012
299	平泉町	志羅山	102次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第120集	平泉町教育委員会	2013
300	平泉町	志羅山	103～105次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	平泉町教育委員会	2014
301	平泉町	志羅山	106～108次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第124集	平泉町教育委員会	2015
302	平泉町	志羅山	109～111次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第126集	平泉町教育委員会	2016
303	平泉町	志羅山	112次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第128集	平泉町教育委員会	2017
304	平泉町	志羅山	113次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
305	平泉町	志羅山	114次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
306	平泉町	志羅山	115次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第132集	平泉町教育委員会	2019
307	奥州市	花園町地区		『水沢遺跡群範囲確認調査－昭和59年度発掘調査概報－』	岩手県水沢市文化財報告書第14集	水沢市教育委員会	1985
308	平泉町	里		『里遺跡発掘調査報告書』	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第383集	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター	2002
309	平泉町	坂下	15次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	平泉町教育委員会	2014
310	平泉町	小島館跡	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第122集	平泉町教育委員会	2014
311	平泉町	正法遺跡	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第126集	平泉町教育委員会	2016
312	平泉町	新井田遺跡	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第126集	平泉町教育委員会	2016
313	平泉町	鈴懸の森遺跡	2次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第130集	平泉町教育委員会	2018
314	平泉町	瀬原Ⅱ	11次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第124集	平泉町教育委員会	2015
315	平泉町	月館Ⅲ遺跡	1次	『平泉遺跡群発掘調査報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第128集	平泉町教育委員会	2017

平泉研究参考文献一覧（岩手県教育委員会 平泉遺跡群柳の御所調査事務所HP「古都平泉の文化遺産」より）

- 1 本文献目録は、平泉に関した主に考古学関係の文献を発行年順に収録した。
- 2 記載の順序は、発行年、発行月、文献題名、著(編)者名、文献名、巻・号
- 3 県・市・町・村誌(史)等と現地説明会・見学会資料は省略した。
- 4 編者及び収録文献名は、できるかぎり実名で表記するようにしているが、長名なものに限り略称を用いた。

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
1	塚本靖	1894	「中尊寺裝飾論」	『建築雑誌』97
2	塚本靖	1898	「中尊寺金色堂創建の年月に就て」	『建築雑誌』134
3	高平真藤	1898	『平泉誌』	鶴揚社
4	濱田耕作	1908	「中尊寺金色堂に就て」	『国華』219
5	濱田耕作	1908	「金色堂の建立の目的と年代に就て」	『史学雑誌』19-9
6	濱田耕作	1908	「金色堂建立年に就ての補訂」	『史学雑誌』19-10
7	高平真藤	1915	『大日本仏教全書』	
8	岡部精一	1916	「前九年役と後三年役」	『奥羽沿革史論』
9	喜田貞吉	1916	「蝦夷の馴服と奥州の拓殖」	『奥羽沿革史論』
10	原勝郎	1916	「日本史上の奥州」	『奥羽沿革史論』
11	大森金五郎	1916	「藤原氏三代の事蹟と源頼朝の奥州征伐」	『奥羽沿革史論』
12	辻善之助	1916	「平安朝仏教史上に於ける中尊寺の地位」	『奥羽沿革史論』
13	福井利吉郎	1916	「藤原時代の美術と中尊寺」	『奥羽沿革史論』
14	日本歴史地理学会編	1916	「奥羽沿革史論」	仁友社
15	齋藤隆三・柴田常恵	1918	「中尊寺大観」	
16	齋藤隆三・柴田常恵	1925	『中尊寺総監』	
17	源豊宗	1928	「中尊寺の仏像」	『仏教美術』1
18	小川春暢	1928	『中尊寺大観』	
19	大森金五郎	1929	『武家時代之研究』第二巻	
20	喜田貞吉	1930	「源頼朝奥州役後の処分と「みちのく」の蝦夷」	『歴史地理』69-5
21	服部勝吉	1931	「平泉史蹟の保存について」	『史蹟名勝天然記念物』6・7
22	水原亮榮編	1931	『高野山現存蔵経目録』	
23	阪谷良之進	1932	「中尊寺願成就院の石塔」	『寶雲』3
24	大島延次郎	1936	「平泉中尊寺梵鐘考」	『考古学雑誌』26-9
25	金森遼	1938	「中尊寺一字金輪像」	『国宝』1-1
26	福井利吉郎	1938	『中尊寺経絵』	
27	西田正秋	1940	「金色堂の孔雀」	『画説』39
28	松本源吉	1941	「陸中平泉千手院の鉄宝塔」	『史迹と美術』129
29	石田茂作	1941	「中尊寺大鏡」	
30	田中重久	1944	「中尊寺光堂の柱絵」	『日本壁画の研究』
31	小杉一雄	1947	「金色堂小論」	『東洋史会紀要』5
32	吉川保正	1949	「岩手の古佛像と中尊寺」	『岩手史学研究』3
33	司東真雄	1949	「平安前期の岩手県南仏教と平泉藤原氏への影響」	『岩手史学研究』3
34	森嘉兵衛	1949	「平泉文化の社会経済的構成と変質」	『岩手史学研究』3
35	田中喜多美	1949	「平泉中尊寺経移動考」	『岩手史学研究』3
36	坂元正典	1950	「平泉に秘められた謎・藤原基衡出生の年」	『国立博物館ニュース』36
37	田中塊堂	1950	「基衡の千部一日経」	『書品』9
38	朝日新聞社編	1950	「中尊寺と藤原四代」	『中尊寺学術調査報告』I
39	長谷部言人	1950	「遺体に関する諸問題」	『中尊寺と藤原四代』
40	津田左右吉	1950	「平泉の文化と中尊寺」	『中尊寺と藤原四代』
41	亀田孜	1950	「平安時代の陸奥開拓と平泉の仏教美術文化」	『東北史の新研究』
42	龍肅	1950	「奥州藤原氏三代の事蹟」	『日本歴史』24
43	坂元正典	1950	「清衡経料紙中の墨書について」	『美術研究』158
44	毛利登	1951	「基衡棺内の錦に就て」	『国華』707
45	林部伝七	1951	「中尊寺金色堂遺体と美術工芸について」	『東京芸術大学研究報告』第2輯
46	司東真雄	1952	「平泉中尊寺経移動考への一考察」	『岩手史学研究』11
47	山辺知行	1952	「中尊寺棺内発見の服飾品」	『国立博物館ニュース』59
48	林孝三・涼野元	1952	「中尊寺金棺中の二、三の染織品残欠の植物染料について」	『古文化財の科学』3
49	岩波書店編集部	1952	『平泉』	
50	田中喜多美	1953	「毛越寺文書に見る浅野長政取出しの御神宝の問題」	『岩手史学研究』33
51	板橋源	1953	「平泉藤原清衡新事蹟考」	『奥羽史談』7-1
52	朝比奈貞一	1953	「中尊寺ガラスの研究と日本の古代ガラスについて」	『古文化財の科学』5
53	藤橋孝三郎	1953	「無量光院発掘調査の日誌」	『羽陽文化』19
54	福山敏男	1955	「平泉千住院の鉄樹」	『MUSEUM』48・57
55	福山敏男	1956	「中尊寺蔵保安三年棟札」	『MUSEUM』61
56	板橋源	1956	「衣川関考」	『奥羽史談』6-3
57	藤橋孝三郎	1956	「平泉調査概要」上・下	『羽陽文化』32・33
58	伊藤信	1956	「辺境在家の成立－中尊寺領陸奥国骨寺について」	『歴史』15集
59	野間清六	1957	「華曼解説」	『国華』780
60	東北大学東北文化研究所	1957	『蝦夷史料』	
61	板橋源	1958	「奥州平泉金壳古次考」	『岩手史学研究』29
62	板橋源	1958	「平泉中尊寺大金堂前第1次発掘調査概報」	『岩手大学学芸学部研究年報』13-1
63	西川杏太郎	1958	「中尊寺金色堂の諸像について」	『国華』795
64	岩越二郎	1958	「平泉の寶相華文字瓦」	『史迹と美術』281
65	岩手県教育委員会	1958	『奥州平泉文書』	
66	石田茂作	1959	「中尊寺の文化」	『中尊寺』
67	石田茂作監修	1959	「中尊寺」	『中尊寺』

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
68	板橋源	1959	『中尊寺と藤原三代』	東北出版
69	東北大学東北文化研究所	1959	『奥州藤原史料』	吉川弘文館
70	福山敏男	1959	『日本の寺・中尊寺』	
71	川勝政太郎	1960	「中尊寺の一字金輪像」	『史迹と美術』 321
72	久野健	1960	「東北古代彫刻史論」上・下	『美術研究』 210/211
73	板橋源	1960	「平泉文化－考古学上の立場から－」	『歴史教育』 8-7
74	中尊寺・朝日新聞社	1960	『中尊寺秘法展目録』	
75	芳賀幸四郎	1960	「泰衡征伐物語 やすひらせいばつものがたり」	『群書解題 第四』 続群書類従完成会
76	堀一郎	1961	「中尊寺金色堂北面長押内発見の火葬人納骨器及び笹塔婆について」	『印度学仏教学研究』 17
77	板橋源	1961	『奥州平泉』	
78	岩手県編	1961	『岩手県史（上古・上代編）』	
79	藤島玄治郎	1961	『平泉 毛越寺と観自在王院の研究』	東京大学出版会
80	平泉遺跡調査会	1962	「中尊寺第2次第3次発掘調査略報告」	『岩手県南史談会研究紀要』 6
81	藤島玄治郎	1962	「平泉の建築庭園遺跡」	『建築雑誌』 907
82	坪井良平	1962	「広度寺鐘銘と中尊寺鐘に関して」	『史迹と美術』 315
83	中川成夫	1962	「考古学より見た中尊寺小考」	『大類伸博士喜寿記念史学論集』
84	保坂三郎	1962	『中尊寺』	
85	藤島玄治郎	1963	「平泉の文化」	『月刊文化財』 3
86	高橋富雄	1963	『蝦夷』	吉川弘文館
87	板橋源	1964	「平泉文化圏の意味するもの」	『奥羽史談』 39
88	服部勝吉	1964	「中尊寺金色堂保存修理の近況」	『月刊文化財』 5
89	高橋富雄	1964	「平泉政権の成立とその権力構造」	『東北大学日本文化研究所研究報告』 別巻2
90	石田一良	1964	「中尊寺建立の過程にあらわれた奥州藤原氏の信仰と政治」	『東北大学日本文化研究所研究報告』 別巻3
91	金倉円照・松山義昭	1964	「東北地方における天台教団成立の特殊性－平泉諸寺院を中心として」	『東北文化研究室紀要』 6
92	石田一良他	1964	『平泉文化の研究』	『東北文化研究室紀要』 6
93	梅沢伊勢三	1964	「平泉文化と鎌倉文化－その歴史的関連と性格的相違」	『東北文化研究室紀要』 6
94	板橋源	1964	「平泉中尊寺正応元年棟札考」	『東北文化研究室紀要』 6
95	飯田須賀斯	1964	「金色堂の建築について」	『東北文化研究室紀要』 6
96	豊田武	1964	「平泉史料補遺」	『東北文化研究室紀要』 6
97	福山敏男	1964	「平等院と中尊寺」	『日本の美術』 9
98	久野健	1964	「中尊寺彫刻とその周辺」	『美術研究』 222・225・228
99	矢崎靖子	1964	「岩手県平泉中尊寺伝大池址周辺遺跡出土瓦について」	『物質文化』 3
100	岩手日報社	1964	『よみがえる秘宝 中尊寺金色堂』	
101	文化財保護委員会編	1964	『無量光院跡』	
102	亀田孜	1965	「中尊寺供養願文雑事」	『東北文化研究室紀要』 6
103	中川成夫	1965	「奥羽州平泉中尊寺大長寿院の一考察」	『史苑』 26-1
104	毛利登	1965	「金色堂から発見された金棺の残片による藤原基衡、秀衡の寺伝の訂正について」	『東京芸術大学美術学部紀要』
105	中川成夫	1965	「いわゆる中尊寺供養願文の一考察」	『物質文化』 5
106	板橋源・佐々木博康	1966	「奥羽平泉高館」	『岩手大学教育学部研究年報』 26-1
107	猪川和子	1966	「紳将形二天彫像について」	『美術研究』 244・245
108	高橋富雄	1966	『義経伝説』	
109	高橋崇	1966	『藤原秀衡』	
110	西川新次	1967	「中尊寺金色堂壇上諸仏私見」	『MUSEUM』 195
111	藤島玄治郎	1967	「中尊寺伽藍の研究と金色堂の修理史」	『建築雑誌1000』
112	高橋富雄	1967	『奥羽藤原四代』	吉川弘文館
113	豊田武編	1967	『東北の歴史』 上巻	
114	藤島玄治郎	1967	「古寺再現」	学生社
115	藤島玄治郎	1968	「中尊寺」	『月刊文化財』 56
116	白田昭吾	1968	「西行の初度陸奥の旅に就いて－その時期と意義－」	『静岡英和女学院短期大学研究紀要』 1
117	中尊寺・東京新聞他	1968	『みちのくの秘法中尊寺展目録』	
118	伊藤昌夫	1969	「中尊寺老女面の形態的特徴の研究」	『岩手大学教育学部研究年報』 29
119	板橋源	1969	「伝『中尊寺供養願文』をめぐる諸説の回顧と展望」	『岩手大学教育学部研究年報』 29
120	荒木伸介	1969	「中尊寺経蔵に関する一考察」	『日本建築学会大会概要集』
121	関野克	1969	「科学的にみた金色堂の研究」	『佛教藝術』 72
122	亀田孜	1969	「法華教見返絵と中尊寺経絵」	『佛教藝術』 72
123	宮次男	1969	「金光明最勝王金字宝塔曼陀羅図私見」	『佛教藝術』 72
124	高橋富雄	1969	「藤原三代の歴史と文化」	『佛教藝術』 72
125	西川新次	1969	「中尊寺彫刻の特質－金色堂諸仏、経蔵本尊、一字金輪像を中心に－」	『佛教藝術』 72
126	中里寿克・立田三郎	1969	「金色堂堂内装飾の工芸技法について」	『佛教藝術』 72
127	藤島玄治郎	1969	「中尊寺創建伽藍考」	『佛教藝術』 72
128	服部勝吉	1969	「金色堂修理の諸問題」	『佛教藝術』 72
129	福山敏男	1969	「中尊寺金色堂の性格－平安時代の葬礼史からみる－」	『佛教藝術』 72
130	毛利登	1969	「副葬品－特に服飾品を中心として－」	『佛教藝術』 72
131	濱田直嗣	1969	「中尊寺関係美術文献目録」	『佛教藝術』 72
132	濱田隆	1969	「金色堂の巻柱絵について」	『佛教藝術』 72
133	金色堂修理委員会	1970	『国宝中尊寺金色堂保存修理工事報告書』	
134	板橋源・勝股国夫	1971	「奥州平泉往昔都市図考」	『岩手史学研究』 57
135	藤島玄治郎監修	1971	『中尊寺』	河出書房新社
136	高橋富雄	1971	『藤原清衡』 清水書院	
137	山本信吉	1971	「中尊寺経」	河出書房新社
138	中里寿克	1972	「古代蒔絵粉の研究」	『保存科学』 9
139	奈良国立博物館編	1972	『国宝重要文化財仏教美術、北海道東北編』	『北海道東北編』
140	高橋富雄	1973	「－中世文書から見た平泉問題－」	『日本古代・中世史の地方的展開』

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
141	斎木一馬	1975	『中尊寺供養願文の輔方本と顕家本との関係について』	『仏教史研究』9
142	板橋源	1975	『北方の王者 平泉藤原氏』	
143	遠藤巖	1976	『中世国家の東夷成敗権について』	『松前藩と松前』第9号
144	国生尚	1976	『奥州平泉の近況と諸問題』	『日本歴史』第339号
145	板橋源	1976	『わが朝無又 毛越寺』	
146	板橋源	1976	『伝弁慶墓考』	
147	豊田武	1976	『英雄と伝説』	
148	宮次男	1976	『金字宝塔万陀羅』	
149	司東真雄	1977	『中尊寺宋版経』	『岩手史学研究』62
150	佐々木邦世	1977	『『中尊寺経移動考』批判』	『天台学报』19
151	庄司浩	1977	『辺境の争乱』	教育社新書
152	目崎徳衛	1978	『西行の陸奥行』	『西行の思想史的研究』
153	大石直正	1978	『中世の黎明』	『中世奥羽の世界』
154	入間田宣夫	1978	『鎌倉幕府と奥羽両国』	『中世奥羽の世界』
155	高橋富雄	1978	『平泉 奥州藤原四代』	教育社新書
156	日本名跡叢刊25	1978	『中尊寺建立供養願文』	
157	目崎徳衛	1978	『西行の思想史的研究』	
158	森嘉兵衛	1979	『平泉文化』	『岩手県の歴史』
159	荒木伸介	1979	『中尊寺経蔵建立年代の問題について』	『中尊寺文化財総合調査』(1)
160	中尊寺編	1979	『中尊寺文化財総合調査』(1)	
161	永井信一他	1980	『中尊寺とみちのくの古寺』	『日本古寺美術全集』16
162	藤島亥治郎監修	1980	『平泉－中尊寺・毛越寺の全容』	川嶋印刷
163	金丸義一	1981	『奥州平泉の研究・其一－金色堂の性格－』	『芝浦工業大学研究年報理工系』25-1
164	高橋富雄	1981	『中尊寺と法華経－中尊寺建立の心－』	『東北大学教養部紀要』33
165	藤島亥治郎	1981	『夢のあと－発掘された平泉』	岩手日報社
166	荒木伸介	1982	『奥州藤原氏造宮寺院をめぐる諸問題』	『アガマル 澤柳先生古希記念美術史論文集』
167	佐々木邦世他	1982	『中尊寺』	『古寺巡礼東国』1
168	田口栄一	1982	『平等院と中尊寺』	『名宝日本の美術』9
169	金子啓明	1983	『文殊五尊図像の成立と中尊寺経蔵文殊五尊像』(序説)	『東京国立博物館紀要』18
170	佐々木邦世	1983	『中尊寺史稿』	
171	藤島亥治郎編	1983	『中尊寺 発掘調査の記録』	平泉遺跡調査会・中尊寺
172	大石直正	1984	『中尊寺領骨寺村の成立』	『東北学院大学東北文化研究所紀要』第15号
173	川本重雄	1984	『住宅史の視点－寝殿造と儀式－』	『カラム』94
174	高橋富雄他	1984	『中尊寺と東北の古寺』	『全集日本の古寺』I
175	高橋富雄・梅原猛編	1984	『シンポジウム東北文化と日本』	
176	川勝憲亮編	1984	『多宝塔と法華経思想』	東京堂出版
177	上原昭一他	1985	『みちのくの伝統文化I 古美術編』	
178	高橋富雄他	1985	『シンポジウム平泉』	
179	角田文衛	1986	『平泉と平安京の見すごされていた関係』	『芸術新潮』10
180	大石直正	1986	『奥羽の荘園と前九年・後三年合戦』	『東北学院大学論集歴史地理学』17
181	高橋富雄	1986	『「吾妻鏡」と平泉』	『東北古代史の研究』
182	斉藤利男	1986	『境界都市平泉と北奥世界』	『東北古代史の研究』
183	遠藤巖	1986	『秋田城介の復活』	『東北古代史の研究』
184	斉藤利男	1986	『境界都市平泉と北奥世界』	『東北古代史の研究』
185	大石直正	1986	『奥羽の荘園公領についての一考察』	『東北古代史の研究』
186	入間田宣夫	1986	『糠部の駿馬』	『東北古代史の研究』
187	鷲塚泰光	1986	『阿弥陀堂とその本尊』	『私の平泉』
188	井上正	1986	『美濃・石徹白の銅造虚空蔵菩薩像と秀衡伝説』	『佛教藝術』165
189	藤島亥治郎	1986	『平泉 中尊寺・毛越寺の全容』	
190	毛越寺編	1986	『毛越寺宝物館資料集』	
191	大矢邦宣	1987	『中尊寺金色堂内両脇壇再考』	『岩手史学研究』70
192	田中恵	1987	『中尊寺一字金輪大日如来座像の周辺』	『岩手大学教育学部研究年報』46-2
193	大矢邦宣	1987	『中尊寺建立供養願文伽藍再考』	『岩手の古文書』創刊号
194	大石直正	1987	『東国・東北の自立と『日本国』』	『日本の社会史』1
195	斉藤利男	1987	『古代中世の交通と国家』	『日本の社会史』第2巻
196	平泉郷土館	1987	『平泉の埋蔵文化財』	『平泉郷土館図録第I冊』
197	森嘉兵衛	1987	『中尊寺金色堂の建設と修理』	『森嘉兵衛著作集』第1巻
198	高野山霊宝館	1987	『経絵の美術』	
199	大田静六	1987	『平等院鳳凰堂の源流』	『寝殿造りの研究』吉川弘文館
200	佐々木博泰	1988	『中尊寺建立供養願文覚書』	『岩手大学教育学部研究年報』48-1
201	大石直正	1988	『奥州藤原氏の貢馬について』	『中世東国史の研究』
202	藤島亥治郎	1988	『平泉の文化と中尊寺』	『平泉町史 総説・総論編』
203	大石直正	1988	『鎌倉時代の平泉』	『平泉町史 総説・総論編』
204	板橋源	1988	『安倍氏・平泉藤原氏時代の平泉』	『平泉町史 総説・総論編』
205	藤原良章	1988	『中世の食器・考－〈かわらけ〉ノート』	『列島の文化史』5
206	荒木伸介・角田文衛他	1988	『奥州平泉黄金の世紀』	
207	菅野成寛	1988.1989	『中尊寺金色堂の諸問題－藤原氏葬法に関する－視座－』	『岩手史学研究』No71・72
208	岩佐光晴	1989	『中尊寺金色堂内左右壇の寺伝錯誤問題について』	『MUSEUM』458
209	八木光則	1989	『安倍・清原氏の城柵遺跡』	『岩手考古学』第1号
210	斉藤利男	1989	『都市平泉、その謎を解く』(上)(下)	『月刊百科』323・324号
211	矢部良明	1989	『中世陶器』	『講座日本荘園史』1
212	須藤弘敏	1989	『中尊寺金色堂考』	『特定研究報告書文化における「北」』
213	須藤弘敏・岩佐光晴	1989	『中尊寺と毛越寺』	『日本の古美術』19
214	内藤榮	1989	『中尊寺金色堂孔雀格狹間試考』	『論集』3

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
215	田中恵	1989	『平泉文化のなかで毛越寺の神像彫刻の占める位置』	
216	菊池章太	1989	『平泉古図覚書』	『日本史学収録 第8号』 筑波大学日本史談話会編
217	齋藤利夫	1990	『二つの平泉・二つの京都』	『北日本中世史の研究』
218	三浦謙一	1990	『柳之御所跡出土の木製品－速報－』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 X
219	野口実	1990	『十一～十二世紀、奥羽の政治権力をめぐる諸問題』	『後期摂関時代史の研究』
220	大石直正	1990	『陸奥国の荘園と公領』	『東北学院大学東北文化研究所紀要』 第22号
221	大石直正	1990	『東北中世村落の成立』	『北日本中世史の研究』
222	斉藤利男	1990	『二つの平泉・二つの京都』	『北日本中世史の研究』
223	関幸彦	1990	『源義経 伝説に生きる英雄』	
224	西野修	1991	『岩手県紫波郡矢巾町城内山頂遺跡出土の渥美三筋文系壺』	『岩手考古学』 第3号
225	桜井芳彦	1991	『紫波町内出土の中世陶器』	『岩手考古学』 第3号
226	菅野成寛	1991	『平泉無量光院考－思想と方位に関する試論－』	『岩手史学研究』 No.74
227	三浦謙一	1991	『柳之御所跡出土の刻画文陶器』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 X I
228	三浦謙一	1991	『柳之御所跡出土の墨書折敷』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 X I
229	松本建速	1991	『東北北部の平安時代のなべ』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 X I
230	入間田宣夫	1991	『平泉柳之御所跡出土の折敷墨書を読む』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 X I
231	野口実	1991	『十一～十二世紀、奥羽の政治勢力をめぐる諸問題』	『後期摂関時代史の研究』
232	大石直正	1991	『平泉館の構造』	『国史学』 No.143
233	入間田宣夫	1991	『中世奥南の正統意識』	『正統と異端』
234	藤沼邦彦	1991	『東北地方出土の常滑焼・渥美焼について』	『知多半島の歴史と現代』 三
235	入間田宣夫	1991	『平泉館はベースキャンプだった』	『月刊歴史手帖』 第19巻7号
236	大石直正	1991	『平泉館と柳之御所跡』	『月刊歴史手帖』 第19巻7号
237	義江彰夫	1991	『都市平泉の構成と発展』	『月刊歴史手帖』 第19巻7号
238	入間田宣夫編	1991	『武者の世に』	
239	高橋富雄	1991	『古代蝦夷を考える』	吉川弘文館
240	高橋崇	1991	『蝦夷の末裔』	中公新書
241	菅野成寛	1991	『平泉無量光院考』	『岩手史学研究』 第74号
242	遠藤巖	1992	『『北の押さえ』の系譜』	『アジアのなかの日本史Ⅱ・外交と戦争』
243	伊藤博幸	1992	『宿館小論』	『岩手考古学』 第4号
244	荒木伸介	1992	『平泉の歴史地理』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
245	入間田宣夫	1992	『折敷墨書を読む』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
246	大石直正	1992	『奥州藤原氏研究と柳之御所跡』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
247	川本重雄	1992	『寝殿造の絵画資料』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
248	菅野成寛	1992	『都市平泉の宗教的構造』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
249	菊池徹夫	1992	『柳之御所跡出土の内耳鍋』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
250	斉藤利男	1992	『平泉の都市プランと柳之御所跡』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
251	千葉信胤	1992	『平泉の地名』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
252	本澤慎輔	1992	『平泉を掘る－平泉遺跡群について－』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
253	三浦謙一	1992	『柳之御所跡出土の墨書折敷』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
254	矢部良明	1992	『世界から見た柳之御所跡』	『奥州藤原氏と柳之御所跡』
255	平泉文化研究会	1992	『奥州藤原氏と柳之御所跡』	吉川弘文館
256	高橋興右衛門	1992	『発掘された中世の建物跡』	『北の中世』
257	斉藤利男	1992	『よみがえる中世都市・平泉』	『北の中世』
258	三浦謙一	1992	『みちのく平泉藤原氏のトイレ』	『月刊文化財』 No.350
259	熊谷公男	1992	『古代史からみた『柳之御所』跡』	『月刊歴史手帖』 20-10
260	菅田慶信	1992	『安倍氏・清原氏・藤原氏』	『新版古代の日本・九・東北・北海道』
261	中里寿克	1992	『中尊寺の漆芸』	『日本の技術』 318
262	入間田宣夫	1992	『平泉柳之御所の発掘と文献史学』	『宮城歴史科学研究』 No.34
263	熊谷公男	1992	『古代史からみた柳之御所跡－古代城柵との比較を中心として－』	『歴史手帖』 20-10
264	松本建速	1992	『柳之御所とかわけ』	『歴史手帖』 20-10
265	菅野文夫	1992	『平泉の『幕府』』	『歴史手帖』 20-10
266	大平聡	1992	『都市平泉研究の新地平－斉藤利男『平泉』を読む－』	『歴史手帖』 20-10
267	八重樫忠郎	1992	『柳之御所跡出土の鳥帽子について』	『歴史手帖』 20-10
268	松本建速	1992	『柳之御所跡におけるかわかけ存在の意味』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 X II
269	藤沼邦彦	1992	『石巻市水沼窯跡の再検討と平泉藤原氏』	『石巻の歴史』 第6巻
270	斉藤利男	1992	『平泉 よみがえる中世都市』	岩波新書
271	田中卓	1992	『白山神社の概要と創祀』	『白山神社史』 国書刊行会
272	清水擴	1992	『平安時代仏教建築史の研究』	中央公論美術出版
273	大石直正	1993	『地域性と交通』	『岩波講座日本通史』 7
274	埴原和郎	1993	『ミイラからみた藤原四代』	『黄金の平泉藤原一族の時代』
275	菅野成寛	1993	『中尊寺金色堂－院政文化の謎』	『黄金の平泉藤原一族の時代』
276	三浦謙一	1993	『柳之御所跡を発掘する』	『奥州藤原氏と平泉』
277	岡田清一	1993	『基成から秀衡へ』	『古代文化』 45-9
278	前川佳代	1993	『平泉の鎮守』	『古代文化』 45-9
279	江谷寛	1993	『平安京出土瓦から見た平泉出土瓦の年代』	『古代文化』 45-9
280	及川司	1993	『〈図版解説〉『平泉遺跡群の発掘調査』	『古代文化』 45-9
281	本澤慎輔	1993	『12世紀平泉の都市景観の復元』	『古代文化』 45-9
282	吉村佳子	1993	『折敷墨書の服飾について』	『日本史の中の柳之御所跡』
283	金丸義一	1993	『寝殿造と水辺』	『日本史の中の柳之御所跡』
284	五味文彦	1993	『「吾妻鏡」と平泉』	『日本史の中の柳之御所跡』
285	高橋克彦	1993	『平泉文化の特質』	『日本史の中の柳之御所跡』
286	小野正敏	1993	『中世みちのくの陶磁器と平泉』	『日本史の中の柳之御所跡』
287	三浦謙一	1993	『柳之御所跡調査の現場から1（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの調査区域』	『日本史の中の柳之御所跡』

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
288	八重樫忠郎	1993	『柳之御所跡調査の現場から2 平泉町教育委員会の調査区域』	『日本史の中の柳之御所跡』
289	岡田清一	1993	『柳之御所跡－奥州平泉の都市計画－』	『別冊歴史読本みちのく燃ゆ』
290	八木光則	1993	『陸奥中部における古代末期の土器群』	『歴史時代土器研究』 第8号
291	伊藤一義	1993	『藤原基衡－奥羽両国支配の確立』	『歴史読本』 595 (38-11)
292	遠藤巖	1993	『藤原清衡-平泉開府と中尊寺建立』	『歴史読本』 595 (38-11)
293	岡田清一	1993	『藤原秀衡－公権を握った北方の王者』	『歴史読本』 595 (38-11)
294	金丸義一	1993	『藤原氏四代の邸宅』	『歴史読本』 595 (38-11)
295	須藤弘敏	1993	『金色堂建立と金棺の謎』	『歴史読本』 595 (38-11)
296	松本建速	1993	『12世紀平泉の都市計画』	『歴史読本』 595 (38-11)
297	菅野成寛	1993	『宗教都市・平泉のロケーション』	『歴史読本』 595 (38-11)
298	菅野文夫	1993	『馬産の国奥州－貢馬の伝統』	『歴史読本』 595 (38-11)
299	斉藤利男	1993	『奥州の産金と金売吉次伝説』	『歴史読本』 595 (38-11)
300	大矢邦宣	1993	『清衡の妻「北方平氏」』	『歴史読本』 595 (38-11)
301	入間田宣夫	1993	『遺物からわかる日常生活』	『歴史読本』 595 (38-11)
302	菅田慶信	1993	『藤原泰衡－運命の奥州「追討」戦』	『歴史読本』 595 (38-11)
303	松本建速	1993	『柳之御所跡出土かわらけ編年試案』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 XⅢ
304	野口実	1993	『平安期における奥羽諸勢力と鎮守府將軍』	『古代世界の諸相』
305	前川佳代	1993	『衣関考』	『古代世界の諸相』
306	渡辺誠	1993	『柳之御所跡出土の御簾編み用錘について』	『古代世界の諸相』
307	大石直正	1993	『平泉文化と柳之御所遺跡』	『六軒丁中世史研究』 第1号
308	荒木伸介	1993	『平泉奥州藤原氏黄金の夢』	
309	高橋崇	1993	『藤原秀衡－奥州藤原氏の栄光』	
310	高橋克彦(編)	1993	『黄金の平泉 藤原一族の時代』	
311	高橋富雄	1993	『奥州藤原氏－その光と影』	
312	高橋富雄・三浦謙一・入間田宣夫	1993	『図説 奥州藤原氏と平泉』	河出書房新社
313	平泉文化研究会	1993	『日本史の中の柳之御所跡』	吉川弘文館
314	中尊寺黄金秘宝展実行委員会	1993	中尊寺黄金秘宝展 奥州平泉文化の全貌	中尊寺黄金秘宝展実行委員会
315	吉田努・井上雅孝	1994	『滝沢村大釜館遺跡出土の古代末期の土器について』	『岩手考古学』 第6号
316	高橋昭治・八木光則	1994	『岩手町出土の古代末期の土器』	『岩手考古学』 第6号
317	松本建速	1994	『ロクロかわらけと手づくねかわらけ』	『岩手考古学』 第6号
318	八重樫忠郎	1994	『常滑・渥美窯産物の12世紀後半における変化』	『岩手考古学』 第6号
319	菅野成寛	1994	『都市平泉における鎮守成立試論－靈山神と都市神の勧請－』	『岩手史学研究』 No.77
320	松本建速	1994	『平泉古図を読む』	『奥州藤原四代』
321	松本建速	1994	『かわらけが語る秀衡全盛期』	『奥州藤原四代』
322	入間田宣夫	1994	『平泉柳之御所跡研究の現在』	『国立歴史民俗博物館研究報告・第63集』
323	大平聡	1994	『堀の系譜』	『城と館を掘る・読む』
324	齋藤利男	1994	『都市平泉と北方世界』	『中世の光景』
325	入間田宣夫	1994	『中尊寺金色堂の視線』	『中世の地域社会と交流』
326	齋藤利夫	1994	『東北の「平泉前史」』	『平泉の原像』
327	本澤慎輔	1994	『掘立柱建物跡の平面形態と関連遺物』	『柳之御所跡の検討資料』
328	菅野成寛	1994	『平泉出土の国産・輸入陶磁器と宋版一切経の船載－2代基衡と院近臣－』	『柳之御所跡発掘調査報告書』
329	菅野文夫	1994	『柳之御所跡の保存決定によせて』	『歴史学研究』 657
330	高島緑雄	1994	『柳之御所跡遺跡の保存運動』	『歴史手帖』 22-7
331	菅野文夫	1994	『平泉柳之御所跡と平泉研究』	『歴史評論』 No.535
332	本堂寿一	1994	『所謂蝦夷館から柳之御所跡まで』	『歴史評論』 No.535
333	五味文彦	1994	『中世の館』	『歴史を読みなおす7 中世の館と都市－ミクロの空間から』
334	鎌田勉	1994	『柳之御所跡出土瓦からの一考察』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 XⅣ
335	松本建速	1994	『手づくねかわらけからみた個の解釈』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 XⅣ
336	金丸義一他	1994	『中尊寺総合調査－第一次遺構確認調査報告書』	
337	岩田重雄	1994	『柳之御所跡出土の尺度』	『計量史研究』 16-1
338	本中眞	1994	『日本古代の庭園と景観』	吉川弘文館
339	中尊寺編	1994	『中尊寺御遺体学術調査(最終報告)』	中尊寺
340	狭川真一	1995	『平泉型宝塔について』	『岩手考古学』 第7号
341	室野秀文	1995	『厨川の中世初期居館』	『岩手考古学』 第7号
342	菅野成寛	1995	『藤原秀衡・泰衡期における陸奥国衙と惣社』	『岩手史学研究』 78
343	松本建速	1995	『平泉町達谷の語源－地名の考古学－』	『岩手史学研究』 No.78
344	八重樫忠郎	1995	『平泉遺跡群の常滑焼』	『考古学ジャーナル』 396
345	大平寛	1995	『都市平泉と奥州藤原氏』	『情況』 2-6-3
346	斉藤利男	1995	『都市平泉』	『図説岩手県の歴史』
347	入間田宣夫	1995	『馬の領主と海の領主』	『図説岩手県の歴史』
348	入間田宣夫	1995	『文治五年合戦』	『図説岩手県の歴史』
349	伊藤博幸	1995	『藤原氏と平泉文化』	『図説岩手の歴史』
350	本澤慎輔	1995	『都市平泉の成立と構造』	『中世都市研究2/古代から中世へ』
351	本堂寿一	1995	『藤原四代の栄華 平泉』	『中世の風景を読む1/蝦夷の世界と北方交易』
352	八重樫忠郎	1995	『奥州平泉に見る常滑焼』	『常滑焼と中世社会』
353	斉木秀雄	1995	『中世鎌倉の出土遺物?』	『平泉と鎌倉 永福寺遺物展記念』
354	福田誠	1995	『源頼朝縁の寺「永福寺」』	『平泉と鎌倉 永福寺遺物展記念』
355	清水擴	1995	『平泉の仏教文化と鎌倉』	『平泉と鎌倉 永福寺遺物展記念』
356	本澤慎輔	1995	『平泉遺跡群と中尊寺について』	『平泉と鎌倉 永福寺遺物展記念』
357	八重樫忠郎	1995	『平泉町出土の刻画文陶器集成』	『平泉と鎌倉 永福寺遺物展記念』
358	鎌田勉	1995	『陸奥国北部の瓦』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 XⅤ
359	鎌田勉・八重樫忠郎	1995	『岩手県内の経塚の検証1』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』 XⅤ

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
360	佐々木努	1995	『平泉町泉屋遺跡出土の柱状高台と突帯文四耳壺』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X V
361	松本建速	1995	『平泉のかわらけと平安京のかわらけの比較』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X V
362	入間田宣夫	1995	『平泉柳之御所跡研究の現在』	『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集
363	飯淵康一他	1995	『古代末期平泉に於ける方角認識』	
364	藤島玄治郎	1995	『平泉建築文化研究』	吉川弘文館
365	野中哲照	1995	『「奥州後三年記」の成立圏』	『鹿兒島短期大学研究紀要』第55号
366	野中哲照	1995	『「奥州後三年記」の成立年代』	『鹿兒島短期大学研究紀要』第56号
367	藤島玄治郎	1995	『平泉建築文化研究』	吉川弘文館
368	鎌田勉	1996	『岩手県内の経塚の検証』2	『岩手考古学』第8号
369	菅野成寛	1996	『「延慶本平家物語」追討宣言考－鎮守府將軍藤原秀衡宣旨の真偽をめぐって－』	『岩手史学研究』79
370	松本建速	1996	『かわらけを作った人々のこと』	『考古学雑渉－西野元先生退官記念論集』
371	桜井芳彦	1996	『比呂館の調査と課題』	『考古学ジャーナル』407
372	井上雅孝	1996	『岩手県における古代末期から中世前期の土器様相(素描)』	『中近世土器の基礎研究』X I
373	本澤慎輔	1996	『平泉の中世遺物』	『東北中世考古学の現状と課題』
374	松本建速	1996	『絵巻物にみる器の解釈』	『物質文化』
375	入間田宣夫	1996	『中尊寺造営にみる清衡の世界戦略－『寺塔已下注文』記事について－』	『宮城歴史科学研究』第42号
376	高橋義介	1996	『岩手県における古代の木製食器について(その1)』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VI
377	羽柴直人	1996	『近世の「柳之御所跡」について』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VI
378	荒木伸介	1996	『平泉・発掘調査の歩み』	『考古学ジャーナル』407
379	及川司	1996	『中尊寺調査に見る平泉の初期的様相』	『考古学ジャーナル』407
380	菅野成寛	1996	『海の將軍、平泉藤原氏』	『考古学ジャーナル』407
381	千葉信胤	1996	『平泉地名研究の諸問題』	『考古学ジャーナル』407
382	本澤慎輔	1996	『都市平泉の地割りについて』	『考古学ジャーナル』407
383	八重樫忠郎	1996	『藤原氏以後の平泉』	『考古学ジャーナル』407
384	八重樫忠郎	1996	『輸入陶磁器から見た柳之御所跡』	『中近世土器の基礎研究』X I
385	八重樫忠郎	1996	『平泉出土の輸入陶磁』	『貿易陶磁研究』第16号
386	小池平和	1996	『平泉藤原時代/その文化と人びと』	
387	川井康	1996	『源平合戦の虚像を剥ぐ』	講談社
388	相原康二	1997	『江刺市増沢出土の経壺について』	『岩手県立博物館研究報告』第15号
389	伊藤一美	1997	『奥州藤原氏と鎌倉』	『鎌倉』第85号
390	伊藤博幸	1997	『律令期村落の基礎構造』	『岩手史学研究』第80号
391	井上雅孝	1997	『陸奥における10・11世紀の土器様相』	『北陸古代土器研究』第7号
392	入間田宣夫	1997	『平泉藤原氏の自己認識』	『東北の歴史再発見』
393	入間田宣夫	1997	『平泉柳之御所跡出土の折敷墨書を読む(続)』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
394	大石直正	1997	『奥州藤原氏の北奥開発』	『六軒丁中世史研究』第5号
395	鎌田勉	1997	『岩手県内の経塚の検証2』	『岩手考古学』第9号
396	菅野成寛	1997	『中尊寺供養願文の諸問題－吾妻鏡との整合性をめぐって－』	『宮城歴史科学研究』第43・44号併合
397	高橋寛雄	1997	『平泉文化の道－道の道海の手紙－』	『岩手史学研究』No80・第80号記念特集
398	田中恵	1997	『華の仏－隠れた仏たち－』	『藤森武写真集 華の仏』
399	羽柴直人	1997	『岩手県平泉町における近世掘立柱民家について』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
400	樋口知志	1997	『安倍氏の時代』	『岩手史学研究』第80号
401	松本建速	1997	『12世紀平泉の四面廂掘立柱建物』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
402	室野秀文	1997	『平泉関山丘陵の城郭遺構』	『中尊寺総合調査－第2次遺構確認調査報告書－』
403	八重樫忠郎	1997	『輸入陶磁器からみた平泉』	『貿易陶磁研究』第17号
404	八重樫忠郎	1997	『平泉の吹き遺跡の一例』	『梵鐘』No6
405	横山紘一	1997	『原勝郎』	『20世紀の歴史家たち(1)』刀水書房
406	松本建速	1997	『柳之御所跡の墨書資料』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
407	羽柴直人・千葉和弘	1998	『平泉町中尊寺の文永九年銘の板碑について』	『岩手考古学』第10号
408	八重樫忠郎	1998	『平泉白山社遺跡の梵鐘構造遺構』	『季刊考古学』62
409	三浦謙一	1998	『発掘されたトイレ遺構/岩手県柳之御所遺跡ほか』	『トイレ遺構の総合的研究－発掘された古代・中世トイレ遺構の検討－』
410	八重樫忠郎	1998	『平泉の道－古道と検出された道』	『発掘された中世古道Part1』
411	八重樫忠郎	1998	『平泉の井戸跡』	『館研究』第1号
412	鎌田勉	1998	『柳之御所遺跡出土瓦の製作者について』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
413	杉沢昭太郎	1998	『岩手県における中世後半のかわらけの様相』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
414	沼田和宏・松本建速	1998	『岩手県平泉町柳之御所遺跡出土かわらけの胎土分析』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
415	羽柴直人	1998	『岩手県南の播鉢について－岩手県西磐井郡平泉町の事例を中心に－』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
416	松本建速	1998	『柳之御所遺跡出土遺構の変遷とその性質』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
417	鎌田勉	1998	『無量光院と加羅御所』	『岩手県立博物館研究報告』第16号
418	本澤慎輔	1998	『平泉毛越寺庭園』	『日本庭園学会誌』6
419	松本建速	1998	『12世紀代東北地方におけるかわらけ存在の意味』	『中近世土器の基礎研究』X III
420	岩手県立博物館編	1998	『岩手の仏画Ⅰ－中尊寺・毛越寺の仏画－』	
421	八重樫忠郎	1998	『平泉・白山社遺跡の梵鐘構造遺構』	『季刊考古学』62
422	川島茂裕	1998	『中尊寺供養願文の研究史と毛越寺説(2)』	『富士大学紀要』第31巻2号
423	入間田宣夫	1998	『中世武士団の自己認識』	三弥書店
424	綿貫友子	1998	『中世東国の太平洋海運』	東京大学出版会
425	千葉和弘	1998	『岩手県南における中世板碑の一側面。－平泉町泉屋遺跡第16次発掘調査出土の板碑をめぐりつつ』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』X VII
426	八重樫忠郎	1999	『平泉・無量光院跡再考』	『岩手考古学』第11号
427	斉藤利男	1999	『「宿館」「宿所」と「本宅」』	『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集
428	藤原良章	1999	『中世の交流と物流』	『中世のみちと物流』
429	八重樫忠郎	1999	『平泉への道・平泉の道』	『中世のみちと物流』
430	仲田茂司	1999	『平泉・柳之御所跡の復元試案』	『考古学に学ぶ』同志社大学考古学シリーズVII

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
431	佐々木邦世	1999	『平泉中尊寺 - 金色堂と経の世界』	吉川弘文館
432	高橋富雄	1999	『平泉の世紀 古代と中世の間』	NHK 出版
433	伊藤博幸	1999	『奥六郡成立の史的前提』	『岩手考古学』第3号
434	伊藤博幸	1999	『鎮守府領と奥六郡の再検討』	高志書院
435	菅野成寛	1999	『奥六郡の関と津』	『古代蝦夷と律令国家』高志書院
436	高橋富雄	1999	『平泉の世紀 - 古代と中世の間』	日本放送出版協会
437	佐々木邦世	1999	『平泉中尊寺 = 金色堂と経の世界』	吉川弘文館
438	上原真人	2000	『平安京からみた花立Ⅱ遺跡出土軒瓦の年代』	『瓦からみた平泉文化』
439	小林康幸	2000	『12世紀末から13世紀初めの鎌倉と東国の瓦』	『瓦からみた平泉文化』
440	佐川正敏	2000	『12世紀の瓦作り』	『瓦からみた平泉文化』
441	佐藤嘉広	2000	『柳之御所遺跡の暦年代』	『山形考古』第6巻4号
442	杉本宏	2000	『京都の瓦・平泉の瓦』	『瓦からみた平泉文化』
443	仲田茂司	2000	『平泉・柳之御所の性格』	『阿部正光君追悼集』
444	羽柴直人	2000	『平泉御蔵場についての考察』	『館研究』第2号
445	羽柴直人	2000	『平泉遺跡群の墨書のある中国産陶磁器について』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』XⅨ
446	羽柴直人	2000	『柳之御所遺跡に礎石建物がある可能性』	『岩手考古学』第12号
447	本澤慎輔	2000	『平泉出土の瓦』	『瓦からみた平泉文化』
448	前川佳代	2000	『平泉の都市プラン』	『寧楽史苑』45号
449	川島茂裕	2000	『寺塔已下注文の基本テキストと中世都市論』	『史海』47
450	入間田宣夫	2000	『みちのくの都のくらしを復元する』	『ものがたり 日本列島に生きた人たち 1遺跡上』
451	羽柴直人	2001	『柳之御所遺跡堀内部地区の中心建物群について』	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』XX
452	羽柴直人	2001	『平泉遺跡群のロクロかわけについて』	『岩手考古学』第13号
453	菅野成寛	2001	『一〇世紀北奥における衣関成立試論』	『岩手史学研究』第84号
454	樋口知志	2001	『『陸奥話記』と安倍氏』	『岩手史学研究』第84号
455	八木光則	2001	『王朝国家期の国郡制と北奥の建郡』	『岩手史学研究』第84号
456	上原真人	2001	『秀衡の持仏堂』	『京都大学文学部研究紀要』第40号
457	八重樫忠郎	2001	『平泉の手工業者』	『考古学ジャーナル』478
458	相原康二	2001	『平泉遺跡群の現状と課題』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
459	及川司	2001	『12世紀前半の平泉』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
460	富島義幸	2001	『平泉の都市空間と仏教建築』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
461	羽柴直人	2001	『平泉を構成する地割』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
462	本澤慎輔	2001	『平泉の庭園遺構』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
463	八重樫忠郎	2001	『東北における中世初期陶磁器の分布』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
464	八木光則	2001	『奥六郡安倍氏から奥州藤原氏へ』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
465	山本信夫	2001	『11・12世紀平泉の貿易陶磁と京都・大宰府』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
466	斉藤利夫	2001	『都市平泉について』	『平泉文化研究年報』第1号
467	前川要	2001	『中世東アジアにおける平泉の都市史上における位置づけ』	『平泉文化研究年報』第1号
468	前川佳代	2001	『平泉の苑地』	『平泉文化研究年報』第1号
469	本中真	2001	『今、世界遺産委員会で語られていること』	『平泉文化研究年報』第1号
470	八重樫忠郎	2001	『中世前期の時間軸としての遺物』	『平泉文化研究年報』第1号
471	吉田欽	2001	『東アジアの世界の中の都市平泉』	『平泉文化研究年報』第1号
472	大石直正	2001	『奥州藤原氏の時代』	吉川弘文館
473	大石直正・高良倉吉・高橋公明	2001	『周縁からみた中世日本』	講談社
474	丸山仁	2001	『平泉藤原氏と鎮護国家大伽藍一区』	『六軒丁中世研究』第8号
475	大矢邦宣	2001	『奥州藤原氏五代』	河出書房
476	菅野成寛	2001	『関山中尊寺にみる伝承と史実』	『山家学会紀要』4
477	羽柴直人	2001	『平泉を構成する地割』	『都市・平泉 - 成立とその構成』
478	大石直正	2001	『奥州藤原氏の貢馬』	吉川弘文館『奥州藤原氏の時代』
479	樋口知志	2001	『『奥六郡主』安倍氏について』	『歴史』96輯
480	上原真人	2001	『秀衡の持仏堂 - 平泉柳之御所遺跡出土瓦の一解釈 -』	『京都大学文学部研究紀要』第40号
481	大澤伸啓	2001	『庭園 - 平等院から永福寺』	『都市・平泉』日本考古学協会2001年度盛岡大会研究発表資料集
482	川島茂裕	2002	『藤原清衡の妻たち』	『平泉の世界』高志書院
483	菅野成寛	2002	『平泉の宗教と文化』	『平泉の世界』高志書院
484	工藤清泰	2002	『環濠集落とは何か』	『平泉の世界』高志書院
485	野口実	2002	『列島ネットワークの中の平泉』	『平泉の世界』高志書院
486	羽柴直人	2002	『平泉の道路と都市構造の変遷』	『平泉の世界』高志書院
487	樋口知志	2002	『前九年合戦と後三年合戦』	『平泉の世界』高志書院
488	八重樫忠郎	2002	『平泉藤原氏の支配領域』	『平泉の世界』高志書院
489	八木光則	2002	『奥六郡安倍氏から奥州藤原氏へ』	『平泉の世界』高志書院
490	西村幸夫	2002	『歴史的遺産を活かしたまちづくり』	『平泉文化研究年報』第2号
491	降矢哲男	2002	『平泉出土の貿易陶磁』	『平泉文化研究年報』第2号
492	前川要	2002	『平泉出土土器の認知考古学的研究』	『平泉文化研究年報』第2号
493	八重樫忠郎	2002	『東北の経塚 - 分布傾向からの考察 -』	『平泉文化研究年報』第2号
494	吉田欽	2002	『白河・鳥羽・平泉』	『平泉文化研究年報』第2号
495	入間田宣夫・豊見山和行	2002	『北の平泉、南の琉球』	中央公論新社
496	高橋崇	2002	『奥州藤原氏』	中公新書

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
497	菅野文夫	2002	『平泉と京・鎌倉』	細井計編『南部と奥州道中』吉川弘文館
498	菅野文夫	2002	『平泉文化の広がり』	『白い国の詩』556号 東北電力株式会社地域交流部
499	杉山洋	2002	「1 平泉周辺の和鏡について」	『里遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター383集
500	羽柴直人	2002	鎌倉時代の平泉の様相。－泉屋遺跡の性格をめぐって	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』XXI
501	及川司	2003	『平泉』	『季刊考古学』第85号
502	杉沢昭太郎	2003	『岩手県平泉で出土した産地不明の輸入陶器』	『貿易陶磁研究』第23号
503	川島茂裕	2003	『奥羽合戦における藤原泰衡の布陣と藤原基成の娘』	『宮城歴史科学研究』53・54号
504	川島茂裕	2003	『藤原基衡と秀衡の妻たち』	『歴史』第101輯
505	岩手県立博物館考古分野	2003	『衣川流域における古代末期遺跡の分布調査（1）』	『岩手県立博物館研究報告』第20号
506	岩手県立博物館考古分野	2003	『衣川流域における古代末期遺跡の分布調査（2）』	『岩手県立博物館研究報告』第21号
507	高橋学	2003	『滑石製石鍋と山茶碗』	『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第17号
508	及川司・杉沢昭太郎	2003	『陸奥のかわらけ 陸奥北部1 岩手県』	『中世奥羽の土器・陶磁器』
509	中田書矢	2003	『中世奥羽におけるかわらけの意味』	『中世奥羽の土器・陶磁器』
510	中山雅弘	2003	『奥羽におけるかわらけの生産』	『中世奥羽の土器・陶磁器』
511	羽柴直人	2003	『平泉におけるかわらけの用途と機能』	『中世奥羽の土器・陶磁器』
512	八重樫忠郎	2003	『奥羽における輸入陶磁器の受容』	『中世奥羽の土器・陶磁器』
513	杉本宏	2003	『浄土への憧憬』	『平泉文化研究年報』第3号
514	八重樫忠郎	2003	『平泉文化にみえる北と南』	『平泉文化研究年報』第3号
515	吉田敏	2003	『武士の館の構造』	『平泉文化研究年報』第3号
516	渕原智幸	2003	『歌枕の用例分析からみる平安中期東北支配の推移』	『平泉文化研究年報』第3号
517	前川要	2003	『考古学から見た東北北部における中世社会の確立』	『平泉文化研究年報』第3号
518	入間田宣夫	2003	『都市平泉の遺産』	山川出版社
519	小野祐貴	2003	『東国平泉－白山信仰と共に世界遺産へ』	私家版 北上市
520	高橋利彦	2003	岩手県内の遺跡から出土した木質遺物の樹種Ⅰ－下駄と漆器－	『岩手考古学』第15号
521	前川佳代	2004	『如法経信仰と平泉』	『地域と古文化』
522	川島茂裕	2004	『藤原基成娘の鎌倉連行について』	『中尊寺仏教文化研究所論集』第2号
523	大矢邦宣	2004	『「中尊寺建立供養願文」を読む』	『中尊寺仏教文化研究所論集』第2号
524	長岡龍作	2004	『中尊寺金色堂壇上諸仏の調査について』	『中尊寺仏教文化研究所論集』第2号
525	井出靖夫	2004	『平泉成立前後における土器様式の変遷』	『平泉文化研究年報』第4号
526	羽柴直人	2004	『安倍氏の「柵」の構造』	『平泉文化研究年報』第4号
527	岡陽一郎	2004	『中世都市周縁部の歴史を探索』	『平泉文化研究年報』第4号
528	富島義幸	2004	『平安時代後期における浄土のイメージと建築造形』	『平泉文化研究年報』第4号
529	大石直正	2004	『平泉柳之御所跡発見の「磐前村印」と荘園公領』	『米沢史学』20
530	富島義幸	2004	『平泉柳之御所遺跡出土部材にもとづく板葺屋根の復元考察』	『建築史学』第43号
531	羽柴直人	2004	『柳之御所遺跡の変遷』	『国立歴史民俗博物館研究報告』第118集
532	羽柴直人	2004	『政權都市としての平泉』	『政權都市 中世都市研究9』
533	（財）佐川美術館	2004	『（財）佐川美術館』	（財）佐川美術館
534	内藤榮	2004	『金色堂と舎利法』	『仏教芸術』277
535	水野敬三郎	2004	『中尊寺一字金輪像について』	『仏教芸術』277
536	入間田宣夫	2004	『藤原秀衡の奥州幕府構想』	『源義経 流浪の勇者』
537	及川真紀	2004	『東北地方の経塚』	『中世の系譜』高志書院
538	橋口定志	2004	『中世前期居館の展開と戦争』	『戦争Ⅰ 中世戦争論の現在』青木書店
539	鹿野里絵	2004	平泉遺跡群における12世紀庇付き建物	『岩手考古学』第16号
540	川島茂裕	2004	『吾妻鏡』に見える郭について	『岩手考古学』第16号
541	国生尚	2004	長者ヶ原廃寺の伽藍配置雑感	『岩手考古学』第16号
542	金丸義一	2004	衣川長者ヶ原廃寺について	『岩手考古学』第16号
543	村田淳	2004	岩手県内出土の緑釉陶器－出土事例の集成と若干の検討	『岩手考古学』第16号
544	佐藤嘉広	2005	『柳之御所遺跡出土かわらけの年代推定』	『岩手考古学』第17号
545	田中則和	2005	『東北地方中世墓の様相と画期』	『東北中世史の研究』（下）
546	遠藤基郎	2005	『平泉藤原氏と陸奥国司』	『東北中世史の研究』（上）
547	丸山仁	2005	『奥州平泉と京』	『東北中世史の研究』（上）
548	佐藤健治	2005	『平泉惣別当体制と中尊寺衆徒・毛越寺衆徒』	『東北中世史の研究』（上）
549	菅野成寛	2005	『鎮守府付属寺院の成立』	『東北中世史の研究』（上）
550	川島茂裕	2005	『藤原秀衡の「常居所」と泰衡の「居所」』	『東北中世史の研究』（上）
551	岩手県立博物館考古分野	2005	『衣川流域における古代末期遺跡の分布調査（3）』	『岩手県立博物館研究報告』第22号
552	前川佳代	2005	『平泉と宇治』	『古代日本と東アジア世界』
553	八重樫忠郎	2005	『平泉における寺院』	『中世の都市と寺院』
554	岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課柳之御所班	2005	『柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷（中間報告）～史跡整備計画との関わりを中心に～』	『平泉文化研究年報』第5号
555	岡陽一郎	2005	『中世都市周縁部の歴史を探索－毛越地区の踏査から－その2』	『平泉文化研究年報』第5号
556	入間田宣夫	2005	『北日本中世社会史論』吉川弘文館	
557	富島義幸	2005	『平安時代後期京都の伽藍と毛越寺・嘉祥寺』	『平泉文化研究年報』第5号
558	野中奈津子	2005	『柳之御所付近の沖積地の河川氾濫と河道痕跡の検出』	『平泉文化研究年報』第5号
559	羽柴直人	2005	『安倍氏の柵の構造（2）』	『平泉文化研究年報』第5号
560	工藤雅樹	2005	『平泉への道－国府多賀城・胆沢鎮守府・平泉藤原氏－』	雄山閣
561	入間田宣夫	2005	『鎌倉期における中尊寺伽藍の破壊・？倒・修復記録について』	『中世の地域と宗教』
562	入間田宣夫	2005	『古都平泉の生活・文化遺産』	『世界遺産と歴史学』
563	遠藤基郎	2005	『平泉藤原氏と陸奥国司』	『東北中世史の研究 上』高志書院
564	三好俊文	2005	『「奥州惣奉行」体制と鎌倉幕府の列島統治』	『東北中世史の研究 上巻』高志書院
565	佐藤嘉広	2005	柳之御所遺跡出土かわらけの年代推定－ロクロかわらけ大皿を中心に－	『岩手考古学』第17号
566	伊藤博幸	2006	『衣川遺跡群研究ノート』	『岩手考古学』第18号
567	今野公顕	2006	『盛岡市大宮遺跡出土かわらけについて』	『岩手考古学』第18号
568	斉藤利男	2006	『安倍・清原・平泉藤原氏の時代と北奥世界の変貌』	『十和田湖が語る古代北奥の謎』

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
569	菅野成寛	2006	『中尊寺十界阿弥陀堂の成立』	『宮城歴史科学研究』第60号
570	大石直正	2006	『「柳之御所における宴会の風景」の舞台裏』	『宮城歴史科学研究』第60号
571	富島義幸	2006	『平泉建築の復元』	『宮城歴史科学研究』第60号
572	田中則和	2006	『多賀国府の変容』	『鎌倉時代の考古学』
573	室野秀文	2006	『城館の発生とその機能』	『鎌倉時代の考古学』
574	八重樫忠郎	2006	『日本的都市・平泉』	『鎌倉時代の考古学』
575	吉田博行	2006	『陣が峯城跡』	『鎌倉時代の考古学』
576	鎌田勉	2006	『柳之御所出土瓦についての再検討』	『岩手県立博物館研究報告』第23号
577	岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課柳之御所班	2006	『柳之御所遺跡中心域における遺構の変遷（中間報告 その2）～史跡整備計画との関わりを中心に～』	『平泉文化研究年報』第6号
578	岡陽一郎	2006	『中世都市周縁部の歴史を探索－毛越地区の踏査から－その3』	『平泉文化研究年報』第6号
579	木本拳周	2006	『柳之御所遺跡出土瓦の研究』	『平泉文化研究年報』第6号
580	富島義幸	2006	『平泉柳之御所遺跡の建築についての一考察』	『平泉文化研究年報』第6号
581	羽柴直人	2006	『安倍氏の柵から平泉の居館へ』	『平泉文化研究年報』第6号
582	及川真紀・福島正和	2006	『衣川遺跡群とは何か』	『歴史評論』678
583	斉藤利男	2006	『北方世界のなかの平泉・衣川』	『歴史評論』678
584	羽柴直人	2006	『南北奥羽の居館遺跡と平泉政権』	『歴史評論』678
585	菅野成寛	2006	『「都市平泉」像の再構築』	『歴史評論』678
586	鈴木琢也	2006	『北日本における古代末期の北方交易』	『歴史評論』678
587	岩手県立博物館考古部門	2006	『衣川流域における古代末期遺跡調査報告書』	岩手県立博物館調査研究報告書第21冊
588	関彦彦	2006	『東北の争乱と奥州合戦』	吉川弘文館
589	岡田清一	2006	『鎌倉幕府と東国』	続群書類従完成会
590	八重樫忠郎	2006	『霊場平泉』	『中世の聖地・霊場』
591	菅野成寛	2006	『中尊寺十界阿弥陀堂の成立』	『宮城歴史科学研究』60
592	八木光則	2006	『北上盆地からみた東北北部の古代社会』	『北の防衛性集落と激動の時代』同成社
593	佐々木邦世	2006	『平泉の文化遺産を語る－わが心の人々』	大正大学出版会
594	羽柴直人	2007	『経埋ムベギ山』	『「都市平泉」CG復元論集』
595	菅野成寛	2007	『CG「蘇る都市平泉制作における儀礼と荘厳の復元」』	『「都市平泉」CG復元論集』
596	大石直正	2007	『「人々給絹日記」を読み直す』	『「都市平泉」CG復元論集』
597	富島義幸	2007	『平泉の建築を復元する』	『「都市平泉」CG復元論集』
598	北嶺澄照	2007	『中尊寺に関する検討』	『「都市平泉」CG復元論集』
599	室野秀文・井上雅孝・神原雄一郎	2007	『滝沢村八幡館山遺跡について』	『岩手考古学』第19号
600	阿部勝則	2007	『世界遺産としての「平泉」』	『東アジアの平泉』
601	岡陽一郎	2007	『中世都市平泉に生きた人々』	『東アジアの平泉』
602	佐藤嘉広	2007	『平泉の「古層」』	『東アジアの平泉』
603	斎藤邦雄	2007	『柳之御所遺跡の概要』	『東アジアの平泉』
604	菅野成寛	2007	『中尊寺「宋版一切経」の舶載』	『東アジアの平泉』
605	菅野文夫	2007	『平泉研究の現在』	『東アジアの平泉』
606	千葉信胤	2007	『平泉余話』	『東アジアの平泉』
607	入間田宣夫	2007	『平泉藤原氏による建寺・造仏の国際的意義』	『東アジアの平泉』
608	八重樫忠郎	2007	『東アジアの平泉』	『東アジアの平泉』
609	石崎高臣	2007	『伝説と伝承の衣川』	『平泉・衣川と京・福原』
610	入間田宣夫	2007	『衣川館と平泉館』	『平泉・衣川と京・福原』
611	及川真紀	2007	『白鳥館遺跡とその周辺』	『平泉・衣川と京・福原』
612	鹿野里恵	2007	『長者ヶ原廃寺跡』	『平泉・衣川と京・福原』
613	菅野成寛	2007	『平泉都市構造の再検討』	『平泉・衣川と京・福原』
614	斉藤利夫	2007	『都市衣川・平泉と北方世界』	『平泉・衣川と京・福原』
615	高橋昌明	2007	『西の福原と北の衣川・平泉』	『平泉・衣川と京・福原』
616	七海雅人	2007	『平泉藤原氏・源義経研究の新しい動向』	『平泉・衣川と京・福原』
617	西澤正晴	2007	『柳之御所遺跡調査の現段階』	『平泉・衣川と京・福原』
618	羽柴直人	2007	『衣川遺跡群の発掘・調査』	『平泉・衣川と京・福原』
619	保立道久	2007	『義経・基成と衣川』	『平泉・衣川と京・福原』
620	柳原敏昭	2007	『「寺塔已下注文」の新解釈をめぐって』	『平泉・衣川と京・福原』
621	磯野綾	2007	『中世平泉の市街地形成』	『平泉文化研究年報』第7号
622	関根達人	2007	『平泉文化と北方交易1』	『平泉文化研究年報』第7号
623	鳥山愛子	2007	『12世紀柳之御所遺跡における掘立柱建物の研究』	『平泉文化研究年報』第7号
624	前川佳代	2007	『「聖地」平泉』	『平泉文化研究年報』第7号
625	柳之御所遺跡調査事務所	2007	『柳之御所遺跡の検討（中間報告 その3）～史跡整備計画との関わりを中心に～』	『平泉文化研究年報』第7号
626	目時和哉	2007	『伝「中尊寺落慶供養願文」再考』	『六軒丁中世史研究』第12号
627	入間田宣夫	2007	『平泉藤原氏と南奥武士団の成立』	歴史春秋出版
628	五味文彦	2007	『王の記憶』	新人物往来社
629	斉藤利男	2007	『北の古代末期防衛性集落の成立・発展・消滅と王朝国家』	『古代蝦夷からアイヌへ』
630	井上雅孝	2007	『古代蝦夷社会における古密教の受容と展開』	『原始・古代日本の祭祀』同成社
631	入間田宣夫	2007	『衣河館と平泉館』	『「平泉・衣川と京・福原」高志書院』
632	八重樫忠郎	2007	『特別史跡毛越寺境内 特別名勝 毛越寺庭園整備報告書』	岩手県平泉町文化財調査報告書第106集
633	千葉信胤	2007	『平泉余話』－その民俗を知る手掛かりとして－	『アジア遊学－東アジアの平泉』第102号
634	井上雅孝・野坂晃平・田中美穂	2007	江刺市豊田館跡出土の埴仏	『岩手考古学』第19号
635	伊藤博幸	2007	胆沢地方の掘立柱建物群とその評価	『岩手考古学』第19号
636	樋口知志	2008	『藤原清衡論（上）』	『アルテス リベラレス』第82号
637	樋口知志	2008	『藤原清衡論（下）』	『アルテス リベラレス』第83号
638	八木光則	2008	『柳之御所遺跡整備に望む』	『岩手史学研究』第89号
639	羽柴直人	2008	『平泉の発掘調査』	『歴史研究の最前線』
640	玉井哲雄	2008	『平泉・鎌倉の建築文化』	『歴史研究の最前線』

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
641	小野正敏	2008	『平泉と鎌倉、発掘された虚と実』	『歴史研究の最前線』
642	羽柴直人	2008	『平泉の宴』	『宴の中世』
643	大平聡	2008	『堀のある風景』	『季刊東北学』第16号
644	工藤雅樹	2008	『蝦夷の系譜』	『季刊東北学』第16号
645	長岡龍作	2008	『救済と表象』	『季刊東北学』第16号
646	七海雅人	2008	『平泉藤原氏と中世武家政権論』	『季刊東北学』第16号
647	誉田慶信	2008	『平泉・宗教の系譜』	『季刊東北学』第16号
648	宮本長二郎	2008	『柳之御所遺跡の建築』	『季刊東北学』第16号
649	柳原敏昭	2008	『奥羽古代・中世交易史』	『季刊東北学』第16号
650	羽柴直人	2008	『奥州藤原氏と平泉文化圏』	『考古学ジャーナル』571
651	磯野綾	2008	『平泉の市街地形成』	『平泉文化研究年報』第8号
652	鈴木弘太	2008	『12世紀の二つの都市』	『平泉文化研究年報』第8号
653	関根達人	2008	『平泉文化と北方交易2』	『平泉文化研究年報』第8号
654	前川佳代	2008	『「苑地都市」平泉』	『平泉文化研究年報』第8号
655	柳之御所遺跡調査事務所	2008	『柳之御所遺跡堀内部地区の遺構変遷（中間報告 その4）』	『平泉文化研究年報』第8号
656	NHK 仙台放送局	2008	特別展『平泉 みちのく浄土』	NHK 仙台放送局
657	本中真	2008	『平泉－浄土思想を基調とする文化的景観』の評価・審査をめぐる	『月刊文化財』541
658	大矢邦宣	2008	『平泉 自然美の浄土』	里文出版
659	七海雅人	2008	『鎌倉・南北朝時代の塩竈』	『東北学院大学論集 歴史と文化』43
660	盛岡市遺跡の学び館編	2008	『岩手・斯波の平泉文化』	『第7回企画展図録』盛岡市遺跡の学び館
661	樋口知志	2009	『「奥州後三年記」について』	『アルテス リベラレス』第84号
662	及川真紀・島原弘征	2009	『平泉（11世紀後半～文治5年）』	『岩手考古学』第20号
663	八重樫忠郎	2009	『平泉の土木遺構』	『季刊考古学』第108号
664	前川佳代	2009	『古代地方都市の「かたち」』	『古代都城のかたち』
665	斉藤利男	2009	『北の辺境世界と平泉政権』	『説話文学研究』44
666	佐藤嘉広	2009	『奥州に夢見た理想郷と庭園群』	『東アジアにおける理想郷と庭園』－「東アジアにおける理想郷と庭園に関する国際研究会」報告書－
667	鎌田勉	2009	『柳之御所遺跡の祭祀遺構について（1）』	『岩手県立博物館研究報告』第26号
668	前川佳代	2009	『条坊の残影』	『古代都市とその思想』奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.21
669	磯野綾	2009	『平泉の市街地形成』	『平泉文化研究年報』第9号
670	鈴木啓司	2009	『12世紀に奥羽における陶器の研究』	『平泉文化研究年報』第9号
671	関根達人	2009	『北奥の12世紀』	『平泉文化研究年報』第9号
672	前川佳代	2009	『都市平泉の形成』	『平泉文化研究年報』第9号
673	柳之御所遺跡調査事務所	2009	『柳之御所遺跡堀内部地区の建物復元（中間報告 その5）』	『平泉文化研究年報』第9号
674	菅野成寛	2009	『「陸奥国骨寺村絵図」の宗教史』	『季刊東北学』21
675	入間田宣夫	2009	『御館は秀郷将軍嫡流の正統なり』	『奥羽から中世をみる』
676	飯村均	2009	『中世奥羽のムラとマチ』	東京大学出版会
677	井上雅孝	2009	『奥州平泉から出土する土器の編年的研究』	
678	工藤雅樹	2009	『平泉藤原氏』	無明舎出版
679	黒崎直	2009	『水洗トイレは古代にもあった』	吉川弘文館
680	五味文彦	2009	『日本の中世を歩く』	岩波新書
681	前川佳代	2009	『条坊の残影－12世紀平泉の都市構造から古代都市を考える－』	奈良女子大学21世紀COEプログラム古代日本形成の特質解明の研究教育拠点『古代都市とその思想』
682	関野貞研究会	2009	『関野貞日記』	中央公論美術出版
683	入間田宣夫	2010	『都市平泉研究の問題点』	『学習院史学』第48号
684	七海雅人	2010	『奥州と幕府』	『鎌倉の世界』史跡で読む日本の歴史6
685	井上雅孝	2010	『岩手県出土の八稜鏡』	『考古学論究』第13号
686	八木光則	2010	『「兵」安倍・清原氏』	『考古学論究』第13号
687	八重樫忠郎	2010	『花立窯（瓷器系）』	『古陶の譜 中世のやきもの』
688	及川司	2010	『平泉の世界』	『平安の都市と文化』史跡で読む日本の歴史5
689	青木修	2010	『会津坂下町雷神山経塚出土の渥美・灰釉壺について』	『渥美半島の考古学』
690	赤羽一郎	2010	『渥美と常滑』	『渥美半島の考古学』
691	中野晴久	2010	『渥美窯の大型製品と経塚関連製品をめぐる』	『渥美半島の考古学』
692	八重樫忠郎	2010	『消費地からの渥美編年』	『渥美半島の考古学』
693	吉岡康暢	2010	『中世窯の成立・展開と加飾法』	『渥美半島の考古学』
694	鎌田勉	2010	『柳之御所遺跡の祭祀遺構について（2）』	『岩手県立博物館研究報告』第27号
695	斉藤利男	2010	『奥州藤原氏の首都遺跡』	『通交・通商圏の拡大』日本の対外関係3
696	入間田宣夫	2010	『巨理権大夫経清から平泉御館清衡へ』	『兵たちの登場』兵たちの時代Ⅰ
697	小川弘和	2010	『西の境界からみた奥羽と平泉政権』	『兵たちの登場』兵たちの時代Ⅰ
698	七海雅人	2010	『平泉藤原氏・奥羽の武士団と中世武家政権論』	『兵たちの登場』兵たちの時代Ⅰ
699	本郷和人	2010	『鎌倉幕府が意識する東国の地域的分類』	『兵たちの登場』兵たちの時代Ⅰ
700	五十川伸矢	2010	『みちのくの古鐘生産』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
701	井上雅孝	2010	『平泉かわらけの系譜と成立』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
702	大石直正	2010	『「人々給絹日記」を読み直す』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
703	岡陽一郎	2010	『平泉藤原氏と交通』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
704	久保智康	2010	『中世前期の鏡作り』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
705	狭川真一	2010	『平泉の石造文化』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
706	野口実	2010	『京都七条町から列島諸地域へ』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
707	八重樫忠郎	2010	『平泉藤原氏の陶器窯』	『兵たちの生活文化』兵たちの時代Ⅱ
708	大澤伸啓	2010	『発掘された平泉以前の東国寺院』	『兵たちの極楽浄土』兵たちの時代Ⅲ
709	菅野成寛	2010	『平安期の奥羽と列島の仏教』	『兵たちの極楽浄土』兵たちの時代Ⅲ
710	斉藤利男	2010	『仏教都市平泉とその構造』	『兵たちの極楽浄土』兵たちの時代Ⅲ
711	佐藤弘夫	2010	『霊場と巡礼』	『兵たちの極楽浄土』兵たちの時代Ⅲ

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
712	富島義幸	2010	『中尊寺金色堂再考』	『兵たちの極楽浄土』 兵たちの時代Ⅲ
713	長岡龍作	2010	『平泉の美術と仏教思想』	『兵たちの極楽浄土』 兵たちの時代Ⅲ
714	誉田慶信	2010	『平泉・宗教の系譜』	『兵たちの極楽浄土』 兵たちの時代Ⅲ
715	羽柴直人	2010	『「矢立廃寺」の研究』	『北方世界の考古学』 すいれん舎
716	岩手県立博物館考古部門	2010	『人首川流域における古代末期遺跡調査報告書』	岩手県立博物館調査研究報告書第26冊
717	大石直正	2010	『中世北方の政治と社会』	校倉書房
718	河原純之	2010	『柳之御所遺跡の発掘調査』	『平泉文化研究年報』 第10号
719	西澤正晴	2010	『柳之御所遺跡の調査成果』	『平泉文化研究年報』 第10号
720	島原弘征	2010	『平泉遺跡群の調査成果』	『平泉文化研究年報』 第10号
721	羽柴直人	2010	『柵と居館から見た平泉』	『平泉文化研究年報』 第10号
722	前川佳代	2010	『都市史の中の平泉』	『平泉文化研究年報』 第10号
723	誉田慶信	2010	『宗教から見た平泉』	『平泉文化研究年報』 第10号
724	岡村光展	2010	『中世「骨寺村在家絵図」に描かれた小村落』	『新潟大学教育学部研究紀要 人文社会科学編』 3-1
725	上島亨	2010	『日本中世社会の形成と王権』『中世国家と仏教』	名古屋大学出版会
726	斉藤利男	2010	『仏教都市平泉とその構造』	『兵たちの極楽浄土』 高志書院
727	長岡龍作	2010	『平泉の美術と仏教思想』	『兵たちの極楽浄土』 高志書院
728	誉田慶信	2010	『平泉・宗教の系譜』	『兵たちの極楽浄土』 高志書院
729	八木光則	2010	『「兵」安倍・清原氏』	『芙蓉峰の考古学』 六一書房
730	八木光則	2010	『古代末期の北奥蝦夷社会』	『古代末期・日本の境界』 森話社
731	村田淳	2010	岩手県出土の初期貿易陶磁集成	『岩手考古学』 第21号
732	八重樫忠郎	2011	『平泉の園池』	『日本庭園学会誌』 24
733	浅利英克	2011	『安倍氏の館・鳥海柵遺跡』	『前九年・後三年合戦』
734	井上雅孝	2011	『岩手郡厨川における安倍氏関連の柵跡遺跡』	『前九年・後三年合戦』
735	井上雅孝	2011	『安倍氏の器・清原氏の器』	『前九年・後三年合戦』
736	岡陽一郎	2011	『後三年合戦の堀と柵』	『前九年・後三年合戦』
737	坂井秀弥	2011	『古代の城から館へ』	『前九年・後三年合戦』
738	清田祐悦	2011	『清原氏の本拠 大鳥井山遺跡と台処館跡』	『前九年・後三年合戦』
739	信太正樹	2011	『沼柵と金沢柵』	『前九年・後三年合戦』
740	高橋学	2011	『古代出羽国における城柵・城館の行方』	『前九年・後三年合戦』
741	富樫泰時	2011	『台処館跡の復元』	『前九年・後三年合戦』
742	羽柴直人	2011	『河崎柵』	『前九年・後三年合戦』
743	八重樫忠郎	2011	『東北地方の四面庇建物』	『前九年・後三年合戦』
744	利部修	2011	『虚空蔵大台滝遺跡』	『前九年・後三年合戦』
745	八重樫忠郎	2011	『平泉藤原氏の蔵と宝物』	『中世人のたからもの』 考古学と中世史研究8
746	及川真紀	2011	『白鳥館遺跡』	『都市のかたち-権力と領域-』 中世都市研究第16号
747	鈴木弘太	2011	『慈恵塚と慈恵大師伝承』	『都市のかたち-権力と領域-』 中世都市研究第16号
748	高橋学	2011	『都市平泉成立の淵源に出羽国城柵の存在』	『都市のかたち-権力と領域-』 中世都市研究第16号
749	七海雅人	2011	『平泉藤原氏・鎌倉幕府と陸奥国』	『都市のかたち-権力と領域-』 中世都市研究第16号
750	八重樫忠郎	2011	『平泉という領域』	『都市のかたち-権力と領域-』 中世都市研究第16号
751	斉藤利男	2011	『奥州藤原三代』	山川出版
752	羽柴直人	2011	『東日本初期武家政権の考古学的研究』	総合研究大学院大学学位論文
753	樋口知志	2011	『前九年・後三年合戦と奥州藤原氏』	高志書院
754	田辺征夫	2011	『遺跡を活かし、今に伝える』	『平泉文化研究年報』 第11号
755	松本秀明・熊谷真樹	2011	『平泉とその周辺地域の河成地形形成についての自然地理学的研究Ⅰ』	『平泉文化研究年報』 第11号
756	岡陽一郎	2011	『中世都市平泉関連資料の再検討・再調査』	『平泉文化研究年報』 第11号
757	藪敏裕・劉海宇	2011	『古代中国と平泉庭園』	『平泉文化研究年報』 第11号
758	吉田敏	2011	『東アジアにおける都市造営と平泉の比較研究』	『平泉文化研究年報』 第11号
759	中村和之	2011	『中尊寺に残されたガラス玉の非破壊的分析と考察』	『平泉文化研究年報』 第11号
760	菅野文夫	2011	『藤原高衡と本吉荘』	『平泉文化研究年報』 第11号
761	八木光則	2011	『北奥の古代末期開闢集落』	『古代中世の蝦夷世界』
762	樋口知志	2011	『前九年合戦と北方社会』	『古代中世の蝦夷世界』
763	斉藤利男	2011	『安倍・清原・奥州藤原氏と北の辺境』	『古代中世の蝦夷世界』
764	鈴木琢也	2011	『北日本における古代末期の交易ルート』	『古代中世の蝦夷世界』
765	羽柴直人	2011	『北奥における奥六郡・平泉文化の流入過程』	『古代中世の蝦夷世界』
766	岡村光展	2011	『中世「骨寺村在家絵図」に描かれた小村落 (2)』	『新潟大学教育学部研究紀要 人文社会科学編』 3-2
767	斉藤利男	2011	『奥州藤原三代』	山川出版
768	元木泰雄	2011	『河内源氏 頼朝を生んだ武士本流』	中央公論新社
769	入間田宣夫	2011	『武家儀礼(宴会)の座列にみる主従制原理の貫徹について(ノート)』	『家具道具室内史』 3
770	羽柴直人	2011	『東日本初期武家政権の考古学的研究-平泉勢力圏の位置づけを中心に-』	総合研究大学院大学学位論文
771	井上雅孝・君島武史・君島麻耶	2011	北上川東岸に出土する清原期の土器様相-11世紀末葉に存在する左回転土器について-	『岩手考古学』 第22号
772	佐藤嘉広	2012	『平泉:仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群』の紹介	『月刊文化財』 580
773	本中真	2012	『「平泉:仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の評価・審査をめぐる』	『月刊文化財』 580
774	及川司	2012	『中尊寺境内の遺跡調査』	『中尊寺仏教文化研究所論集』 第3号
775	国生尚	2012	『中尊寺境内 閼加堂跡地区/法泉院地区の発掘調査』	『中尊寺仏教文化研究所論集』 第3号
776	鹿野里絵	2012	『平泉出土の「穿孔かわらけ」と「円盤状かわらけについて」』	『岩手考古学』 第23号
777	櫻井友梓	2012	『柳之御所遺跡出土の滑石製石鍋』	『岩手考古学』 第23号
778	前川佳代	2012	『奈良と平泉』	『奈良女子大学文学部研究教育年報』 第8号
779	入間田宣夫	2012	『安倍・清原・藤原政権の成立史を組み直す』	『北から生まれた中世日本』
780	八重樫忠郎	2012	『考古学からみた北の中世の黎明』	『北から生まれた中世日本』
781	井上雅孝	2012	『東北』	『中世石塔の考古学』
782	五味文彦	2012	『世界遺産登録後の平泉を考える』	『平泉文化研究年報』 第12号
783	松本秀明・熊谷真樹	2012	『平泉とその周辺地域の河成地形形成についての自然地理学的研究Ⅱ』	『平泉文化研究年報』 第12号

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
784	岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦	2012	「平泉出土文字資料の再検討 その1」	『平泉文化研究年報』第12号
785	藪敏裕・劉海宇	2012	「西周金文に見える苑池について」	『平泉文化研究年報』第12号
786	吉田 敏	2012	「平泉の特殊性」	『平泉文化研究年報』第12号
787	越田賢一郎	2012	「12世紀前後における奥州藤原氏と北海道の関連について」	『平泉文化研究年報』第12号
788	菅野文夫	2012	「日記としての『給絹日記』」	『平泉文化研究年報』第12号
789	五味文彦	2012	「日本史の新たな見方、捉え方」	敬文舎
790	吉田 敏	2012	「中世城館の成立」	『中世やまがたの城館』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
791	平川 南	2012	「東北「海道」の古代史」	岩波書店
792	平泉隆房	2012	「白山信仰研究の現状と課題（1）－古代中世を中心として」	『金沢工業大学に本覚研究所 日本学研究』第15号
793	松村英之	2012	「白山平泉寺旧境内の貿易陶磁－青白磁仏像を中心に－」	『第33回日本貿易陶磁研究集会 記録された貿易陶磁発表資料』
794	平泉町編	2012	「平泉－光と水の浄土－」	平泉文化遺産センター常設展示図録
795	櫻井友梓	2013	「平泉における「内折れかわらけ」の導入とその意義」	『岩手考古学』第24号
796	相原康二	2013	「文学に表れた平泉文化の基礎的研究－「ころもかは」詠出和歌について－」	岩手大学平泉文化研究センター年報1
797	徳留大輔	2013	「日本出土の中国産青磁の動向－龍泉窯系青磁を中心に－」	岩手大学平泉文化研究センター年報1
798	三浦謙一	2013	「平泉の発掘庭園－発掘調査成果の整理を通じて－」	岩手大学平泉文化研究センター年報1
799	岡村光展	2013	「中世骨寺村在家絵図に描かれた小村落（3）」	『新潟大学教育学部研究紀要 人文社会科学編』5-2
800	井上雅孝	2013	「岩手県」	『日本石造物辞典』吉川弘文館
801	菅野文夫	2013	「中尊寺文書正和二年衆徒申状の周辺」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
802	木村直弘	2013	「平泉 音の古層」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
803	今野日出晴	2013	「世界遺産教育「平泉」の可能性」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
804	齊藤利男	2013	「平泉「北方王国」と平泉の三つの富」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
805	佐藤嘉広	2013	「平泉の「都市」計画と園池造営」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
806	中村一基	2013	『《蝦夷王義経誕生》序説』	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
807	誉田慶信	2013	「平泉造営思想に見る仏教的要素」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
808	三浦謙一	2013	「飛鳥から平泉へ」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
809	藪敏裕	2013	「平泉起源考」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
810	林士民	2013	「世界文化遺産平泉の調査を振り返って」	『平泉文化の国際性と地域性』汲古書院
811	羽柴直人	2013	「陸前高田市矢作町出土の内耳鉄鍋」	『岩手県立博物館研究報告』第30号
812	八重樫忠郎	2013	「平泉・毛越寺境内の新知見」	『中世社会への視点』
813	吉田 敏	2013	「中国の地方都市と平泉」	『平泉文化研究年報』第13号
814	坂井秀弥	2013	「平泉の文化遺産の可能性」	『平泉文化研究年報』第13号
815	越田賢一郎	2013	「平泉文化の鍋と玉」	『平泉文化研究年報』第13号
816	岡陽一郎・阿部勝則・小岩弘明・時田里志・七海雅人・平田光彦	2013	「平泉出土文字資料の再検討 その2」	『平泉文化研究年報』第13号
817	森達也	2013	「中国唐宋元時代の陶磁生産と海外輸出」	『陶磁器流通の考古学』高志書院
818	森達也	2013	「日本出土の中国唐宋元時代の陶磁」	『陶磁器流通の考古学』高志書院
819	村田淳	2013	「東北地方出土の平安時代施釉陶磁器集成（2）」	『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』XXIX II
820	渕原智幸	2013	『平安期東北支配の研究』	塙書房
821	前川佳代	2013	「平泉の宗教施設と風水思想」	『都城制研究（7）』
822	三好俊文	2013	「八幡荘と治承・寿永内乱」	『市史せんだい』23
823	入間田宣夫	2013	「平泉の政治と仏教」	高志書院
824	高橋一樹	2013	「東国武士団と鎌倉幕府」	吉川弘文館
825	入間田宣夫	2013	「御館は秀衡將軍嫡流の正統なり」『平泉の政治と仏教』	高志書院
826	渕原智幸	2013	『平安期東北支配の研究』	塙書房
827	入間田宣夫	2013	「平泉館はベースキャンプだった」	『平泉の政治と仏教』高志書院
828	入間田宣夫	2013	「都市平泉研究の問題点」	『平泉の政治と仏教』高志書院
829	入間田宣夫	2013	「『人々給絹日記』を読み解く」	『平泉の政治と仏教』高志書院
830	藪敏裕	2013	「平泉文化の国際性と地域性」	汲古書院
831	岩手県教育委員会	2013	「世界遺産 平泉－仏国土－（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」	岩手県教育委員会
832	劉海宇	2013	中国先秦時代苑池史料集成（一）－西周篇－	岩手大学平泉文化研究センター年報1
833	劉海宇	2013	山東考古研究概略	岩手大学平泉文化研究センター年報1
834	沈 岳明、黄 利斌	2013	窯火長紅：浙江古代磁器業の概況	岩手大学平泉文化研究センター年報1
835	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2013	「平泉の文化遺産」の世界遺産追加登録に係る国内専門家会議	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
836	佐藤嘉広	2013	「平泉の世界遺産登録、その前後」	『遺跡学研究』第10号
837	會澤純雄・桑静・平原英俊・沈岳明・徐軍・徳留大輔	2014	「ポータブル複合X線分析による浙江（Zhejiang）省陶磁器の元素分析」	岩手大学平泉文化研究センター年報2
838	相原康二	2014	「文学に表れた平泉文化の基礎的研究（2）」	岩手大学平泉文化研究センター年報2
839	佐藤由紀男・平原英俊・三浦一樹	2014	「渥美湖西窯と常滑窯製品の蛍光X線分析」	岩手大学平泉文化研究センター年報2
840	佐藤嘉広	2014	「世界遺産「平泉」拡張登録のための類似資産調査（1）－「天地之中」登封（Deng feng）の歴史遺産群」	岩手大学平泉文化研究センター年報2
841	佐藤嘉広・鈴木弘太	2014	「世界遺産「平泉」拡張登録のための類似資産調査（2）－チベット（Tibet）「ラサ（Lhasa）のポタラ宮（Potala Palace）と歴史遺産群」	岩手大学平泉文化研究センター年報2
842	平原英俊・會澤純雄・桑静・藤崎聡美	2014	「3Dレーザースキャナーを用いた平泉柳の御所遺跡と無量光院跡の三次元計測」	岩手大学平泉文化研究センター年報2
843	本中真	2014	「最近の世界遺産登録と平泉の今後」	岩手大学平泉文化研究センター年報2
844	劉海宇	2014	「秦（Qin）代の「数術簡牘文献における私邸庭園及びその性格」	岩手大学平泉文化研究センター年報2

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
845	劉海宇	2014	『中国古代の文献史料に見える洛陽（Luoyang）の平泉（Pingquen）』	岩手大学平泉文化研究センター年報2
846	荒木志伸	2014	『四面廂建物からみた平泉の都市景観』	『平泉文化研究年報』第14号
847	伊藤博幸	2014	『「平泉」思想と藤原清衡』	『平泉文化研究年報』第14号
848	越田賢一郎	2014	『平泉文化と北海道』	『平泉文化研究年報』第14号
849	清水擴	2014	『仏教建築にみる平泉文化の特質』	『平泉文化研究年報』第14号
850	七海雅人	2014	『平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究（1）』	『平泉文化研究年報』第14号
851	誉田慶信	2014	『平泉仏教の歴史的性格に関する文献資料学的考察』	『平泉文化研究年報』第14号
852	前川佳代	2014	『平泉の食文化』	『平泉文化研究年報』第14号
853	榎本渉	2014	『宋元交替と日本』	『岩波講座日本歴史第7巻 中世2』岩波書店
854	高橋慎一郎	2014	『中世都市論』	『岩波講座日本歴史第7巻 中世2』岩波書店
855	前川佳代・島原弘征	2014	『平泉無量光院の造営プラン』	『古代学』第6号
856	鈴木博之	2014	『平泉遺跡群縁辺部出土陶磁器類の集成』	『公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要』第33号
857	千葉孝弥	2014	『考古学から見た多賀国府』	『講座東北の歴史第二巻 都市と村』
858	飯村均	2014	『中世のマチとムラ』	『講座東北の歴史第二巻 都市と村』清文堂
859	八木光則	2014	『東北北部における古代末期の囲郭集落』	『中世城館の考古学』
860	高橋学	2014	『11～12世紀の柵と城館』	『中世城館の考古学』高志書院
861	飯村均	2014	『中世のムラ』	『中世人の軌跡を歩く』高志書院
862	植木朝子	2014	『「梁塵秘抄」の職人たち』	『中世人の軌跡を歩く』高志書院
863	鈴木弘太	2014	『骨寺村と中尊寺を繋ぐ道』	『中世人の軌跡を歩く』高志書院
864	藤原良章	2014	『「後三年合戦絵詞」の世界』	『中世人の軌跡を歩く』高志書院
865	八重樫忠郎	2014	『平泉と鎌倉の手づくねかわらけ』	『中世人の軌跡を歩く』高志書院
866	岡陽一郎	2014	『境界と貴人』	『中世人の軌跡を歩く』高志書院
867	斉藤利男	2014	『平泉 北方王国の夢』	講談社
868	吉田敏	2014	『日中古代都城と中世都市平泉』	汲古書院
869	入間田宣夫	2014	『藤原清衡』	集英社
870	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2014	『日本都市史のなかの平泉 資料集』 「平泉の文化遺産」 拡張登録に係る共同研究成果品 1	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
871	高橋康夫	2014	『日本都市史のなかの平泉』	『日本都市史のなかの平泉』
872	岡田保良	2014	『世界の中の都市・平泉』	『日本都市史のなかの平泉』
873	吉田敏	2014	『都市平泉の建設』	『日本都市史のなかの平泉』
874	富島義幸	2014	『都市平泉と浄土信仰』	『日本都市史のなかの平泉』
875	杉本宏	2014	『平安京周辺の都市と平泉』	『日本都市史のなかの平泉』
876	高橋慎一郎	2014	『中世都市と周辺地域』	『日本都市史のなかの平泉』
877	仁木宏	2014	『日本中世固有の都市類型』	『日本都市史のなかの平泉』
878	入間田宣夫	2014	『藤原清衡 平泉に浄土を作った男の世界戦略』	集英社
879	高橋慎一郎	2014	『中世都市論』	『岩波講座日本歴史第7巻』岩波書店
880	吉田敏	2014	『日中古代都城と中世都市平泉』	汲古書院
881	岩手県立博物館編	2014	『比爪－もう一つの平泉－』	『テーマ展図録』 岩手県立博物館
882	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2014	『日本都市史のなかの平泉』 -平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 報告書-	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
883	櫻井友梓	2014	平泉出土の下駄の変遷と特質	『岩手考古学』第25号
884	村田淳	2014	胆江地域における奥州藤原氏時代の遺跡（上）	『岩手考古学』第25号
885	鎌田勉	2015	『平泉町花立Ⅱ遺跡出土の瓦について（2）』	『岩手県立博物館研究報告』第32号
886	櫻井友梓	2015	『遊戯具からみた平泉の様相』	『岩手考古学』第26号
887	高橋学	2015	『木都の誕生』	『木材の中世』高志書院
888	富島義幸	2015	『日本建築の歴史に見る木の再利用』	『木材の中世』高志書院
889	中澤寛将	2015	『古代・中世環日本海沿岸の港町』	『島と港の歴史学』中央大学人文科学研究 所研究叢書61
890	前川佳代	2015	『源義経と壇ノ浦』	吉川弘文館
891	村田晃一	2015	『円福寺の伽藍と中世の松島』	『宮城考古学』第17号
892	八重樫忠郎	2015	『北のつわものの都 平泉』	新泉社
893	吉田敏	2015	『日中都市比較からみた平泉』	『島と港の歴史学』中央大学人文科学研究 所研究叢書61
894	吉田敏	2015	『平安中期における城館の機能と性格』	『城館と中世史料』高志書院
895	柳原敏昭	2015	『"平泉"とは何か』	『平泉の光芒』吉川弘文館
896	佐藤健治	2015	『清衡の草創』	『平泉の光芒』吉川弘文館
897	遠藤基郎	2015	『基衡の苦悩』	『平泉の光芒』吉川弘文館
898	岡陽一郎	2015	『秀衡の革新』	『平泉の光芒』吉川弘文館
899	八重樫忠郎	2015	『掘り出された平泉』	『平泉の光芒』吉川弘文館
900	菅野成寛	2015	『平泉文化の歴史的意義』	『平泉の光芒』吉川弘文館
901	小川弘和	2015	『東アジア・列島のなかの平泉』	『平泉の光芒』吉川弘文館
902	柳原敏昭	2015	『奥州合戦』	『平泉の光芒』吉川弘文館
903	七海雅人	2015	『鎌倉時代東北史への招待』	『鎌倉幕府と東北』吉川弘文館
904	三好俊文	2015	『鎌倉幕府の成立と東北』	『鎌倉幕府と東北』吉川弘文館
905	清水亮	2015	『東北の荘園と公領』	『鎌倉幕府と東北』吉川弘文館
906	山口博之	2015	『中世奥羽の霊場』	『鎌倉幕府と東北』吉川弘文館
907	飯村均	2015	『遺跡からみる中世前期東北の社会』	『鎌倉幕府と東北』吉川弘文館
908	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2015	『アジア都市史における平泉』 -平成26年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 報告書-	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
909	妹尾達彦	2015	『東アジアの都市史と平泉』	『アジア都市史における平泉』

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
910	董新林	2015	『中国唐・宋・元時代の都城の造営理念とその影響』	『アジア都市史における平泉』
911	四日市康博	2015	『アジアにおける都市と周辺』	『アジア都市史における平泉』
912	友田正彦	2015	『東南アジア古代都市の特質をめぐって』	『アジア都市史における平泉』
913	濱崎一志	2015	『南アジアと西アジアにおける都市と宗教施設』	『アジア都市史における平泉』
914	橋本義則	2015	『日本における都城の受容（明日か～平泉）』	『アジア都市史における平泉』
915	玉井哲雄	2015	『アジア都市史からみる都市平泉の特質』	『アジア都市史における平泉』
916	小野正敏	2015	『平泉、鎌倉、一乗谷』	『平泉文化研究年報』第15号
917	前川佳代	2015	『12世紀平泉の暮らし』	『平泉文化研究年報』第15号
918	誉田慶信	2015	『院政期平泉の仏会と表象に関する歴史学的研究』	『平泉文化研究年報』第15号
919	伊藤博幸	2015	『日本国内における「平泉寺」について』	『平泉文化研究年報』第15号
920	滑川敦子	2015	『平安貴族社会における陸奥国の位置づけ』	『平泉文化研究年報』第15号
921	荒木志伸	2015	『地域・時代別にみた四面廂建物の特徴』	『平泉文化研究年報』第15号
922	柳原敏昭	2015	『平泉の光芒』	吉川弘文館
923	入間田宣夫	2015	『藤原秀衡 義経を大將軍として国務せしむべし』	ミネルヴァ書房
924	前川佳代	2015	『平泉の馬場殿－平泉・鳥羽・宇治』	『日本古代のみやこを探る』勉誠出版
925	柳原敏昭	2015	『糠部の成立』	『新編八戸市史』通史編Ⅰ
926	三好俊文	2015	『藤原秀衡』	『中世の人物 京・鎌倉の時代編第2巻』清文堂
927	八重樫忠郎	2015	『北のつわもの都・平泉』	新泉社
928	前田速夫	2015	『平泉地名と牛首地名』	『地名と風土』第8号
929	七海雅人	2015	平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究	『平泉文化研究年報』第15号
930	相原康二	2015	文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その3）：物語に記された安倍氏・奥州藤原氏・源義経	岩手大学平泉文化研究センター年報3
931	劉海宇	2015	呉越国史跡調査記	岩手大学平泉文化研究センター年報3
932	劉海宇	2015	中国先秦時代苑池史料集成（二）：東周篇	岩手大学平泉文化研究センター年報3
933	徳留大輔	2015	福建省窯址調査記	岩手大学平泉文化研究センター年報3
934	菅野成寛	2015	日本経塚信仰の起源と源流を探る：中国調査中間報告	岩手大学平泉文化研究センター年報3
935	佐藤嘉広	2015	世界遺産「平泉」の拡張のための類似資産調査（3）：中国内モンゴル自治区「元上都の遺跡」	岩手大学平泉文化研究センター年報3
936	三浦謙一	2015	平泉遺跡群発掘調査の記録：発掘調査報告書から	岩手大学平泉文化研究センター年報3
937	劉海宇	2015	中国産陶磁器の墨書銘の所謂「花押」に関する一考察	岩手大学平泉文化研究センター年報3
938	壽松木章、三浦愛夢	2015	平泉遺跡土壌の種実および花粉分析（第1報）：無量光院跡第26次および柳之御所第74次調査土	岩手大学平泉文化研究センター年報3
939	會澤純雄、桑 静、平原英俊、羊 澤林、栗 建安、沈岳明、徐 軍、徳留大輔	2015	ポータブル複合X線分析による福建省陶磁器の元素分析（その1）（その2）	岩手大学平泉文化研究センター年報3
940	斉藤利夫	2015	平泉藤原氏と北奥武士の統合：平泉型「安全保障」体制の成立	岩手大学平泉文化研究センター年報3
941	樋爪俊衡と高水寺の走湯権現：平泉までの道・平泉からの道	2015	前平泉文化関連遺跡調査報告書	岩手大学平泉文化研究センター年報3
942	岩手県立博物館考古部門	2015	前平泉文化関連遺跡調査報告書	岩手県立博物館調査研究報告書第33冊
943	佐藤信	2016	『日本史上の平泉の位置－古代国家から中世への変換－』	『平泉文化研究年報』第16号
944	荒木志伸	2016	平泉の四面廂建物と古代官衙遺跡との比較検討	『平泉文化研究年報』第16号
945	七海雅人	2016	平泉藤原氏の権力基盤に関する基礎的研究・報告（3）	『平泉文化研究年報』第16号
946	滑川敦子	2016	11世紀における陸奥と京都	『平泉文化研究年報』第16号
947	前川佳代	2016	平泉の都市生活－都市と祭礼	『平泉文化研究年報』第16号
948	伊藤博幸	2016	日本中世における平泉寺の立地をめぐる若干の問題	『平泉文化研究年報』第16号
949	會澤純雄・平原英俊・三浦謙一	2016	「ポータブル複合X線分析による白磁と青磁の胎土分析	『平泉文化研究年報』第16号
950	元木泰雄	2016	『奥羽と軍事貴族－前九年合戦の前提』	『紫苑』14号
951	八重樫忠郎	2016	『東北の経塚と厚真町の常滑壺』	『歴史評論』795
952	入間田宣夫	2016	『清衡のグローバル・スタンダードと仏教的・商業的人脈』	『歴史評論』795
953	小口雅史	2016	『城柵制支配の廃絶と北の境界世界』	『東北の古代史』5、吉川弘文館
954	斉藤利男	2016	『未完の北方王国－「日本国」と平泉政権』	『歴史評論』795
955	鈴木琢也	2016	『平泉政権下の北方交易システムと北海道在地社会の変容』	『歴史評論』795
956	妹尾達彦	2016	『世界史の中の平泉』	『歴史評論』795
957	羽柴直人	2016	『奥州藤原氏時代の北奥への交通路－陸奥国奥六郡から外ヶ浜への道－』	『歴史評論』795
958	誉田慶信	2016	『平泉藤原氏と仏会』	『岩手県立大学盛岡短期大学研究論集』18
959	村田 淳	2016	『東北地方北部の施釉陶磁器』	『一般社団法人日本考古学協会2016年度弘前大会 第Ⅱ分科会 北東北9・10世紀社会の変動 研究報告資料集』日本考古学協会
960	八木光則	2016	『平泉期の奥六郡』	『考古学論究』第17号
961	八木光則	2016	『奥六郡と安倍氏』	『東北の古代史』吉川弘文館
962	入間田宣夫	2016	『藤原秀衡』	ミネルヴァ書房
963	八木光則	2016	北奥における12世紀の居館と居宅	岩手大学平泉文化研究センター年報4
964	佐藤由紀男、平原英俊、佐藤桃子	2016	続・常滑窯製品の蛍光X線分析	岩手大学平泉文化研究センター年報4
965	佐藤嘉広	2016	仏都平泉：日本における拠点形成の画期	岩手大学平泉文化研究センター年報4
966	戸根貴之	2016	世界遺産「平泉」の保存に係る課題と遺産影響評価	岩手大学平泉文化研究センター年報4
967	誉田慶信	2016	平泉の仏教と景観	岩手大学平泉文化研究センター年報4
968	劉海宇	2016	中国における金銀字経の起源およびその展開	岩手大学平泉文化研究センター年報4
969	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2016	『アジアにおける平泉文化』－平成27年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 報告書－	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
970	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2016	『アジアにおける平泉文化 資料集』 「平泉の文化遺産」拡張登録に係る共同研究成果3	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会

	著 者 名	年次	文 献 名	所 収
971	櫻井友梓	2016	柳之御所遺跡における箸の特徴とその意義	『岩手考古学』第27号
972	佐川正敏	2017	『考古学からみた仏教文化東漸の諸相と仏都平泉の形成』	『平泉文化研究年報』第17号
973	中澤寛将	2017	北東アジアからみた平泉文化の特質	『平泉文化研究年報』第17号
974	佐藤健治	2017	平安後期の京都と平泉	『平泉文化研究年報』第17号
975	滑川敦子	2017	前九年合戦前夜の陸奥と京都	『平泉文化研究年報』第17号
976	荒木優也	2017	共振するイメージ－西行「東稲山」詠について－	『平泉文化研究年報』第17号
977	會澤純雄・平原英俊・三浦謙一・徳留大輔	2017	「ポータブル複合X線分析による白磁と青磁の胎土分析（その2）」	『平泉文化研究年報』第17号
978	劉海宇	2017	唐代における金銀字経と五臺山金閣寺	『平泉文化研究年報』第17号
979	銭 国祥 訳 松本圭太	2017	漢魏洛陽城宮城調査における新発見とその構造	岩手大学平泉文化研究センター年報5
980	楼 建龍 訳 松本圭太	2017	福建における早期建築技法の形成と発展	岩手大学平泉文化研究センター年報5
981	楊 建華 鄺 夢茹	2017	寧波石造物と日中海域文化交流	岩手大学平泉文化研究センター年報5
982	何 忠礼、柏崎有里	2017	南宋時期における日中文化交流：禅僧交流を中心に	岩手大学平泉文化研究センター年報5
983	千葉正彦	2017	史跡整備と世界遺産：柳之御所遺跡の整備をめぐる	岩手大学平泉文化研究センター年報5
984	佐藤嘉広	2017	世界遺産「平泉」と価値のイメージ	岩手大学平泉文化研究センター年報5
985	相原康二	2017	文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その4）：義経生存説拡大の背景	岩手大学平泉文化研究センター年報5
986	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2017	『奥州藤原氏が構想した理想世界』－平成28年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会 報告書－	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
987	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2017	『奥州藤原氏が構想した理想世界 資料集』 「平泉の文化遺産」拡張登録に係る共同研究成果品4	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
988	島原弘征	2017	平泉遺跡群における四面庇建物について	『岩手考古学』第28号
989	櫻井友梓	2017	柳之御所遺跡の木器碗	『岩手考古学』第28号
990	及川真紀	2017	考古資料にみる「平泉」とその周辺－平泉以北・緑辺部の様相	『岩手考古学』第28号
991	西山良平	2018	「平安後期の京都と開発・再開発－平泉を遥かに望む－	『平泉文化研究年報』第18号
992	佐藤健治	2018	「国府関連施設との比較による平泉の位置」	『平泉文化研究年報』第18号
993	荒木優也	2018	「壺のいしぶみの浜風－西行が地名を詠む意味について－」	『平泉文化研究年報』第18号
994	渡辺健哉	2018	「東アジアにおける平泉遺跡群の歴史的位置づけ」	『平泉文化研究年報』第18号
995	中澤寛将	2018	「北東アジアの都市からみた平泉」	『平泉文化研究年報』第18号
996	劉海宇	2018	「五代・両宋期における金銀字一切経及びその政治的意義」	『平泉文化研究年報』第18号
997	會澤純雄・平原英俊・三浦謙一・徳留大輔	2018	ポータブル複合X線分析による白磁と青磁の胎土分析（その3）－中国および平泉出土資料の比較検討－	『平泉文化研究年報』第18号
998	山本けい子、中村和之、八重樫忠郎ほか	2018	「柳之御所遺跡の出土遺物に付着した金の産地推測と統計分析」	『函館工業高等専門学校紀要』52巻
999	島原弘征	2018	「平泉における苑池遺構」	『考古学ジャーナル』2018.11月期
1000	櫻井友梓	2018	「柳之御所の変遷とその位置」	『考古学ジャーナル』2018.11月期
1001	劉海宇	2018	「平泉考古学の現状と課題」	『考古学ジャーナル』2018.11月期
1002	劉海宇	2018	中尊寺供養願文写本の基礎的研究－書の視点から－	岩手大学平泉文化研究センター年報6
1003	伊藤博幸	2018	泰衡征伐物語の研究（一）：菅江真澄が記録した毛越寺常行堂摩多羅神の祭礼	岩手大学平泉文化研究センター年報6
1004	菅野成寛	2018	日本経塚信仰の起源と源流を探るⅡ：韓国調査中間報告と予備的考察	岩手大学平泉文化研究センター年報6
1005	劉海宇	2018	中国江南地区における法舍利埋納遺跡調査記	岩手大学平泉文化研究センター年報6
1006	相原康二	2018	文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その5）：菅江真澄が記録した毛越寺常行堂摩多羅神の祭礼	岩手大学平泉文化研究センター年報6
1007	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会	2018	平泉の文化遺産－「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究 総括報告書－	岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会
1008	二階堂里絵	2018	骨寺村の窟について	『岩手考古学』第29号
1009	清水真一	2019	「世界遺産平泉の保存管理に向けて－アジアの都市遺産・仏教遺跡の課題と取り組みから－」	『平泉文化研究年報』第19号
1010	佐藤健治	2019	「平泉の景観の変遷」	『平泉文化研究年報』第19号
1011	荒木優也	2019	「増幅するイメージ－西行「衣川」詠の成立と享受について－」	『平泉文化研究年報』第19号
1012	渡辺健哉	2019	「平泉研究の展開と藤島玄治郎」	『平泉文化研究年報』第19号
1013	劉海宇	2019	「中尊寺金銀字一切経のルーツについて－東アジアの視点から見た中尊寺の金銀字経（その3）－」	『平泉文化研究年報』第19号
1014	赤澤真理、伊永陽子、森田直美	2019	「寝殿造における遊興空間と装束による演出－藤原頼通期から院政期まで－」	『平泉文化研究年報』第19号
1015	中村和之、山本けい子、寺門修	2019	「柳之御所遺跡の砂金は蝦夷ヶ島の砂金か？」	『平泉文化研究年報』第19号
1016	劉海宇	2019	「柳之御所出土の中国産白磁『吉』字耳破片の産地推定研究」	高志書院
1017	劉海宇	2019	「貿易陶磁と東アジアの物流－平泉・博多・中国」	高志書院
1018	岩手大学平泉文化研究センター〔監修〕	2019	『貿易陶磁器と東アジアの物流－平泉・博多・中国』	高志書院
1019	佐藤嘉広	2019	12世紀におけるユニークな仏教政治の中心地	岩手大学平泉文化研究センター年報7
1020	劉海宇、アンデスカールキビスト	2019	平泉の世界遺産及びその考古学の現状	岩手大学平泉文化研究センター年報7
1021	伊藤博幸	2019	藤原清衡と「平泉思想」	岩手大学平泉文化研究センター年報7
1022	千葉信胤	2019	平泉の地名伝承について	岩手大学平泉文化研究センター年報7
1023	相原康二	2019	文学に表れた平泉文化の基礎的研究（その6）：常陸坊海尊・清悦・残夢の物語	岩手大学平泉文化研究センター年報7
1024	村田淳	2019	胆江地域における奥州藤原氏時代の遺跡（下）	『岩手考古学』第30号

平泉文化フォーラム第20回記念大会 実施報告

1. 日 時 令和元年11月30日(土) 午前10時～午後4時30分
2. 場 所 一関文化センター中ホール(一関市)
3. 主 催 「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会、岩手県、岩手県教育委員会
岩手大学、岩手大学平泉文化研究センター
共 催 一関市教育委員会、奥州市教育委員会、平泉町教育委員会
4. 日 程
基調講演 田辺 征夫(公財 大阪府文化財センター理事長)
「日本の遺跡保存と活用、この30年
－世界遺産“平泉”誕生の意義に寄せて－」
研究報告① 北村 忠昭
「柳之御所遺跡等の発掘調査成果」
研究報告② 杉本 宏
「世界遺産 －平泉と宇治－」
研究報告③ 吉田 勲
「書き換えられた東北の古代・中世
－平泉(柳之御所)30年の成果－」
研究報告④ 渡辺 健哉
「アジア史の新たな展開 －平泉の歴史的意義－」

パネルディスカッション
テーマ1 「“平泉”の発掘調査の成果を振り返る」
テーマ2 「世界遺産による新たな平泉の発見」
テーマ3 「世界へ発信すべき平泉」
5. 入場者数 約300名

平泉文化研究年報 第20号

令和2年3月31日

発行 「世界遺産平泉」保存活用推進実行委員会
(事務局：岩手県文化スポーツ部文化振興課)
〒020-8570 岩手県盛岡市内丸10-1

編集 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課

印刷 トーバン印刷株式会社
岩手県一関市三関字日照107-5
TEL 0191-31-8808

HIRAIZUMI BUNKA KENKYU NENPO

Annual Report of the Hiraizumi Studies

Contents

Keynote lecture

Preserving and utilizing archeological sites in Japan for the last 30 years

– On the significance of the birth of the World Heritage “Hiraizumi” –

TANABE Ikuo

Research report

Excavation results of Yanaginogosho Iseki

KITAMURA Tadaaki

World Heritage – Hiraizumi and Uji –

SUGIMOTO Hiroshi

Rewritten Tohoku Ancient and Middle Ages

– Achievements of Hiraizumi (Yanaginogosho) for 30 years –

YOSHIDA Kan

New Developments in Asian History – Hiraizumi's Historical Significance –

WATANABE Ken'ya

Panel Discussion

Attachments for the 20th Hiraizumi Cultural Forum

Iwate Board of Education

10-1 Uchimaru, Morioka City, Iwate Prefecture 020-8570, Japan